

徳島の剣道

第 12 号



徳島県剣道連盟

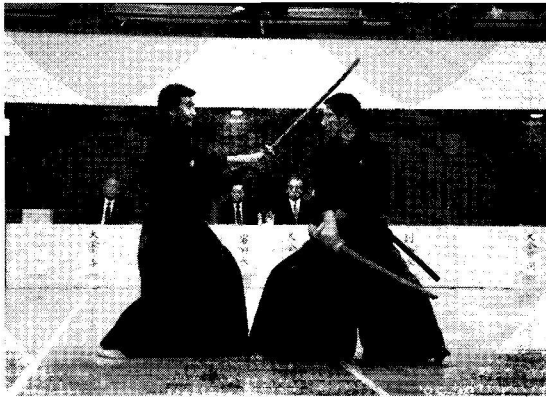
第19回 徳島県剣道段別選手権大会
各段優勝者

前列左より

初段男子の部 上田 昌也(徳島東工)
初段女子の部 福永 恵実子(富岡西高)
二段女子の部 大坂 尚子(富岡東高)
二段男子の部 日和田 崇(城ノ内高)

後列左より

三段の部 東内 茂(徳島支部)
四段の部 鳴川 善人(阿南支部)
五段の部 吉田 茂生(警察支部)
六段の部 平野 誠司(警察支部)



第24回徳島県社会人剣道大会

無双直伝英信流古伝太刀打之位

打太刀 一村 昌和
仕太刀 坂本 憲一

《表紙の解説》

大日本武徳会剣道範士 山根正雄先生之碑

場所 徳島市二軒屋観潮院境内北向

花岡岩 高さ 一〇メートル

下幅 〇、七〇メートル

建立 大正十一年七月

主唱者 近江佐久郎

吉本 彦吉

外八人

山根正雄は名西郡石井町高原村で稲田家貫心流剣術師範山根武五郎の長男として天保十一年(一八四〇)十一月三日に生まれる。

幼少より父武五郎より剣を学び、十八才の時家を出て、広島藩貫心流剣術師範細六郎の門弟となり、四ヶ年修行し、さらに二ヶ年、中・四国方面の武者修行に出る。

二十四才の時帰郷し、居を阿波郡久勝村大字勝命に移す。

その後稲田家の剣術師範となり、慶応三年(一八六七)九月

京都御所警備東征軍総督宮の守護の任にあたる。維新後は専ら郷土で多数の門人を育成し、明治二十九年大日本武徳会徳

島支部創立時には役員となり尽力し、主任師範となる。

大正十年九月剣道範士号授与され、大正十四年八十五才で

佐古の仮偶で没す。

法号 榮盈院正道義顕居士

墓地 観潮院

観潮院

履歴の詳細は『徳島の剣道第七号』に掲載

剣道史編纂委員長 坂本 裕 二

〃学道用心集〃の教え



剣連会長 堀江 幸夫

道元禅師の著した〃学道用心集〃は参禅入門の手引書である。そこには座禅をする最初に、また終始心得て実践することを教えられている。

を得るためにこれを修行するのではない、唯々仏法のため修行すべきである。

(一) 菩薩心を発すべきこと

〃自分こそは〃の自我にしがみつくな。

(四) 参禅学道は正師を求むべきこと

良い素材も良き匠の手によってこそはじめて活かされる。

この世に何一つ不変、不滅のものはない。(無常観を)

(二) 仏道は必ず行によって証入すべきこと

ひとの素質や能力のちがいによって理解するにも、早い遅いはあるが、必ず行によってさとりに入っていくこと。

修行のための〃剣道用心集〃として読んでみたい。

そう読んでみると剣道をする者には身にしみて響いてくる。剣

頭ではない、行ずることがすべてである。

(三) 有所得の心をもって仏法を修すべからずこと

修行は自分のためにすらせず、いわんや有名になり利益

道に導かれていくのを感じる。

指導者自らの資質向上の努力を怠れば、剣道の衰退は灯を観る

より明らかである。専心精進の一年にしたい。

顕彰一覽

体育功労者表彰（徳島県体育協会）

○ 広瀬 清（大正十一年十一月十六日生まれ）

徳島刑務所在職中は剣道部において活躍し、後輩部員の指導に努めた。退職後は少年剣道教室で地域社会の子供達や青年の指導に貢献した。また、徳島県剣道連盟の常任理事として剣道発展に寄与した功績は大きい。

剣道有功賞（全日本剣道連盟）

○ 竹原 常雄（明治三十六年七月十三日生まれ）

故・越川秀之介範士、高島永吉範士の指導を受け、大正十三年より、各種全国大会に県代表として出場、幾多の好成績を残す。戦後は徳島県剣道連盟の創設に尽くし、理事長、名誉会長として、その発展に寄与した。また、自宅屋敷内に道場を建設し、青少年及び愛好者に開放する等、剣道界発展のために多大な功績を残した。

支部長永年勤続表彰（徳島県剣道連盟）

○ 阿部 全司（名西支部）

○ 坂本 裕二（阿波支部）

○ 佐藤 藤太（美馬西支部）

○ 三木 只雄（明治四十五年四月一日生まれ）

全日本剣道連盟理事、評議員、及び徳島県剣道連盟理事長、会長を歴任し、徳島県剣道連盟の発展伸長に尽力し、今日の連盟組織の確立に寄与した。

平成七年度、徳島県より、お二人の剣道範士が誕生し、ここに手記の寄稿をいただきました。

私の剣道修行

剣道副会長 大澤 孝 彰



昭和三十九年、三十四才の時から、本格的に剣道を始め、県内では勿論、全国各地の稽古・講習会・試合と三十余年に亘って度の病欠場もなく頑張ってきました。こんなに元気に過ごせたのは剣道のお蔭だと剣道に感謝して居ります。

剣道修行の思い出として、現在まで全国各地の高段者の先生、同僚の先生又後輩の皆様のご指導御鞭撻を受けた一つ一つが眼のあたりに浮んできます。数え切れない稽古試合の思い出がありますが、特に心に残った稽古の事を三つ書かせて頂きます。

全日本剣道道場連盟の五月の京都稽古会で場所は弘道館だったと思いますが、故会長大麻勇次十段に一番先に掛った事があります。「切り返し」と言われたので大きく力一杯切り返しをいたしました。最後の面を打って先生の後へぬけると又「切り返し」と

言われたので切り返しをしました。もう掛り稽古がお願い出来るのかと思いきや又「切り返し」といわれ、連続往復七回だったと思いますが、力尽きて座り込んでしまった事を憶えています。稽古終了後挨拶に行きますと「大沢君、非常に良い切り返しだった」と褒めていただきました。

中四国学生剣道大会が松山であり、私は審判員で参加しました。前日、松山大学の武道場で稽古会があり故作道主二先生が元に立たれました。作道先生は私の父と大変親しくして頂いて居りました関係からか、愛媛県の先生方が稽古を頂こうと先生の前にたくさん並びましたのに私を探し出して一番先に指導を下さいました。掛り稽古で一生懸命に死にもぐるいで掛り、疲れ果てた所で「さあ二本勝負だ」と言われました。息ついて何負けるものかと打ち掛りましたが、ポンポンと二本打たれ、「参りました」と引き下がろうとしたのですが、いやもう一本、もう一本と本位やっていたいただきました。後で愛媛の先生方がしびれを切らして待って居られるのにお思えば思うほど、全然良い所なく、こんな苦しい事はありませんでした。しかし、今思えばすばらしい稽古だったと思います。

四国地区の八段の先生方が集り、故重岡昇九段先生に日本剣道形の御指導を一日二日の日程で高松と高知で二年連続で受けました。堀江先生にお供して参加しましたが、ほんとうに形の根本をきめ細かく懇切丁寧な、しかもきびしい御指導でした。私は勿論の事、堀江先生も非常に緊張されて指導を受けて居られました。

そして形の講習後は面を着けられ一人一人全員に稽古をつけて下さいました。私も一生懸命掛りました。同時に植田一九段先生にもきびしい御指導を頂き、大変意義深い稽古となりました。

しかし、何と言っても私を修行させて頂いたのは当り前の事だと言われるかも知れませんが、徳島県の先輩の先生方と同僚後輩の皆様です。先輩の先生方の並々ならぬ御苦心と御苦労で、戦後日本で一番に建設された助任橋のふもとの旧武道館で、故高島範士始め、亡くなられたたぐさんの先生方、現名誉会長三木先生、会長堀江先生、竹原先生、石井先生、勝浦先生その他数え切れないたぐさんの先生方に何十回何百回と死にもぐるいで稽古をつけて貰いました。又県警機動隊の坂下先生始め皆様ときびしい稽古も試合もして頂きました。さらに、何人かの先生には県下の異った場所でも違った環境で新しい気分でも稽古をつけて貰いました。同時に私も道場等で青少年を休みなく一生懸命指導してきました。

その全てが忘れ得ぬ思い出とすばらしい修行になったのです。あらためて徳島県の先生方から感謝申し上げます。

大澤孝彰先生の略歴

昭和5年5月13日生 徳島県那賀郡木頭村

幼少時代から亡父善二郎に剣道を習う

中学校の3年の時終戦（アメリカ占領軍の指令で剣道禁止）

大学在学時代父親と共に密かに修行

昭和29年3月 中央大学法学部卒業

昭和29年4月 自衛隊幹部候補生学校入校

自衛隊幹部として約9年半勤務

自衛隊時代は主として銃剣道修行

銃剣道5段

昭和38年12月 家事都合により自衛隊退職

昭和39年から現在まで徳島市で

- 三木只雄現名誉会長先生、堀江幸夫現会長先生、故松本一城先生、故下村富夫先生に師事
- 徳島市立高等学校剣道講師として正科剣道授業を平成7年3月まで約30年間指導
- 父の後を継ぎ、徳島錬心館道場館長として青少年の指導育成
- 徳島県代表選手として

・全日本選手権大会	3回出場
・全日本東西対抗大会	8回出場
・全日本都道府県対抗大会	13回出場
・国体剣道大会	23回出場
・四国四県対抗剣道大会	22回出場
・明治村剣道大会	6回出場
- 表 彰

・昭和53年	体育功労賞	県体育協会会長
・昭和60年	感謝状（道場功労）	文部大臣

昭和62年5月 剣道8段

平成7年5月 剣道範士

我流七転八起

審議員委員長 勝 浦 守



私は大正七年、阿波藩蜂須賀公隠居屋敷跡で知られる大谷郷に勝浦家第十五代目の後継として生れた。武士だった祖父は、父が村役場（勝占村）に勤めていた関係で、私の駈を引き受けていたようだ。私は少年の頃、雑誌で見た劍聖齊村五郎先生の武勇伝が大好きで、「大きくなったら先生のような劍客になりたいなあ」と思っていた。

中等学校に進学するようになった時、祖父は農家の後継は農学校以外の学校への進学は罷りならんとの強い要望に、父も折れ私も不服をこらえて徳農へ入学した。昭和七年当時、劍道師範だった松尾誠一先生に師事し、劍道の手ほどきを受けたのが劍道の始まりとなった。元々劍道が好きであった所へ、負け嫌いの性分が加わり、常に人様の三倍を努力目標に置いた稽古ぶりは、祖父の仕込みの極意であったのかも知れない。人はどんな道に進もうとも先ず最初に良師に出会う事が第一番、第二番目は努力の積み重ね、第三番目は自立と自分の分限の判断を誤らぬ事、是等を心得て修業が出来れば物事は成功すると信じ、七年間猛練習をした。

昭和十四年、その時は亡き祖父が生前、口癖のように言っていた「男は兵に行け」この事が実現して、藏本の兵営に現役兵とし

て入営することとなった。弱冠劍道四段が物を言ったのか入営前から「うちの中隊へ来い」と誘われることもあった。入隊後はそれ迄の劍道と少々異なり実戦向きの軍刀術で鍛えられた。戸山流の山城中隊長や天覧試合優勝の藤川中隊長には殊の外大事にして下さったが、惜しくも山城中隊長は奇襲上陸戦で、藤川中隊長は沖繩戦で夫々戦死された。他にも大東亜戦争で奉天幹候隊同期の国士館出の藤さんや東鉄の大将で試合した二刀流の香川出身藤本さんがビルマ戦で戦死したことを聞き痛恨に堪えない。

話が後先になるが入営後、私はモンハン事件の時は、北満州の満ソ国境警備中であつた。そして、奉天の甲幹隊に転出入隊。昭和十五年七月、同隊第一期生として卒業し、内地勤務を命ぜられ、大東亜戦争勃発まで徳島に居た。昭和十六年十二月八日、遂に開戦。タイ国南部に上陸後ビルマに進攻して、七年間に亘る激戦を切り抜け、三度伝わった戦死の誤報の中で奇跡的生還の恩命に浴した。戦闘に勝ち、戦争に負けた無念の大戦だったのである。かつての昔、劍道部長の笹田先生から頂いた軍刀はビルマで連合軍に渡した。之も残念な話。

戦後、劍道は武徳会から全日本劍道連盟に生れ代り、京都大会の存続から各種の全国大会、四国大会、県下大会と驚異的發展を遂げ、現在では少年錬成、女性劍道、高齢者劍道と国内から更に世界に向けて飛躍する迄に至っている。その為、京都、柳生、東京を大会或は講習の場所として大先生、先輩、同僚など交流交剣は目覚しく、生甲斐は劍道只一途にあるのみと言う所である。

古い話であるが、本県で近府県剣道大会を開催した折、越川先生が連れて来られた大阪勢が徳島勢に負けてしまった。先生曰く「大阪のお前達、髪を切り、坊主になって帰れ！」と叱って居られた事が忘れられない。その当時、県下の高校大会では市内実業学校と郡部の旧脇中がズバ抜けて強かったが、今では群雄割拠であり、県南の台頭が著しい。

田舎武士的存在の徳島が、国体剣道の輝く総合優勝や個人の全国優勝も数え出す事が出来るようになった。陰には県下の大先輩の物故者をはじめ、竹原、三木、石井の各範士先生ならびに現剣道連盟堀江会長先生を軸として役員、会員の力を結集努力した成果である。

茲に平成七年、範士の称号を賜った私は七の字の縁起を担ぐ心算はないが、我が人生七転して平成八年に向い更には未来に挑戦して、今迄に頂戴した総ての皆様にご恩返しを致したい昨今である。――戦後試合回数百八十八回を記念して――

勝浦守先生の略歴

経 歴

大正7年5月6日生 徳島県勝浦郡勝占村大字大谷字大縄手35番屋敷
 昭和11年3月 徳島県立徳島農業学校農業科卒業
 昭和35年～46年 徳島市立方上小学校PTA会長並びに南部中学校PTA会長
 昭和23年～平成7年 徳農種苗(株)2代目代表取締役 現取締役会長

軍 歴

昭和14年1月10日 徳島歩兵第43連隊留守隊に現役兵として入隊後、渡満
 昭和15年11月 任陸軍少尉、同日附予備役、同日附招集、歩兵第143連隊附
 昭和16年12月 南方派遣(現ミャンマー) 楯8416部隊、第2歩兵砲隊長
 昭和20年～21年 ビルマ作戦歩兵第143連隊戦犯容疑部隊連隊副官
 昭和22年3月 内地帰還字品で復員、残務整理、陸軍大尉正七位勲6等
 平成7年4月現在 歩兵第143連隊戦友会副会長、勝占地区遺族後援会長

剣 歴

昭和10年、12年 明治神宮全国青年剣道大会出場
 昭和11年～12年 徳島県立徳島農業学校剣道部助手
 武徳祭徳島支部剣道個人優勝、四国四県青年剣道優勝
 昭和13年3月 大日本武徳会剣道四段、徳農剣友会創設委員
 昭和15年 師団管内連隊対抗剣道団体優勝、軍旗祭個人優勝
 昭和25年剣道復興後 第3回全日本剣道選手権、都道府県対抗剣道、国体剣道
 四国四県対抗剣道、選手監督出場、京都大会連続41回出場
 昭和63年6月 第10回全日本高齢者武道大会剣道A組優勝
 平成7年4月現在 全日本高齢剣友会副会長、徳島県剣道連盟審議員委員長
 徳島県高齢剣友会会長、徳農剣友会会長
 平成7年5月8日 剣道範士



故 剣道範士九段 長野 充孝

亡父剣道範士九段 長野充孝を想う

剣道範士八段 長野 武大

亡父長野充孝（春吉）は、明治十四年三月二十二日長野亀吉の一人息子として、徳島市富田浦町で出生、明治三十年徳島中学校を卒業する。

この時代は、明治維新、西南戦役、間もない頃で封建社会から近代国家に突き進み、欧米文化の吸収にやっきとなった時代背景、一方軟弱に流れる風潮もあり、明治二十二年教育勅語発布、明治二十三年帝國議会議召集といった変転極まりない時期であった。

このことから幼くして、両親の勤めるところあって、剣の道に入り、貫心流山根範士の道場に入門し、剣術に打ち込む。この時、兄弟子に近江佐久郎範士がいた。

傍ら当時、草相撲が盛んで、力自慢の本人は十一歳の頃、大人達を投げ飛ばし、優勝する等、怪力の持ち主であった。

昭和二十五、六年頃（年月は不確実）広島県の堀正平範士と、亡父が徳島県剣道連盟から招待を受けた際、実兄大が随行し、その宿舎で二人が「攻め」には、陰と陽がある。等、剣道談議を実践をまじえて論じていた。その折、堀先生が、一君のお父さんは、柔道の生徒も持ち上げられない、養成所の庭にあった大きな石を、軽々と持ち上げていた事が強い印象に残っている。」旨の話がされていた。

相撲の話では祖叔父に当る芳蔵が、草相撲の世話役をしていた関係上、亡父をこよなく愛し、中学校卒業と同時に武者修業に旅立たせ、折から水戸に在住する伯父の元横綱、常陸山谷右衛門のもとで相撲の、手ほどきを受けると同時に、水戸東武館の内藤高治、門奈正範士の指導を受け、剣術を修業し、徳島へ帰郷する。

明治二十九年徳島中学校同校友会長より、撃剣教師補助並びに、大日本武徳会徳島支部長から武術講習所剣術助教授を命ぜられた。

長野春吉

擊劍教師補助

囑託入

明治三十九年十月一日

德島中學校會長 鈴木芳左

大日本武徳會本部

生徒世話掛ノ命

但月手當金奉還支給

明治三十九年三月八日

大日本武徳會本部職員長

長野春吉

長野春吉氏

武術講習所

劍術助教授ヲ

囑託入

明治四十年四月四日

大日本武徳會德島支部長
正五位勲六等 谷口留五

卒業證

長野春吉

明治四十年二月五

本會武術教員養成所

定術科修了ノ證書

明治四十三年五月三日

大日本武徳會長

正三位勲一等甲爵大浦

長野春吉

擊劍教師ヲ囑託入

但年手當金百貳拾圓給與

明治四十四年八月八日

兵庫縣立洲本中學校

長野春吉

劍術四段下ヲ允許ス

明治四十三年五月三日

大日本武徳會長 正三位勲等男 巖谷

擔任教授

大日本武徳會教員講習所 林高

大日本武徳會教員講習所 門本

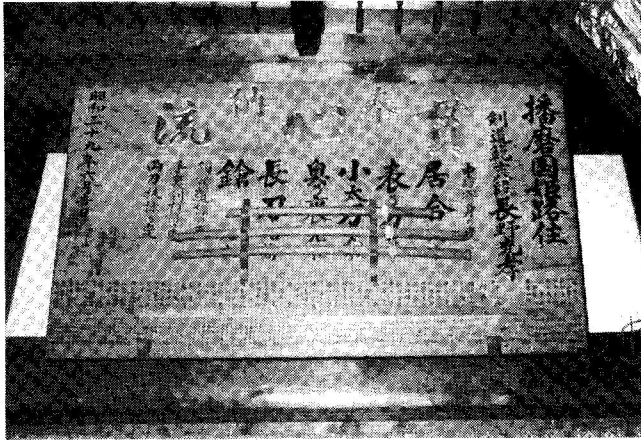
大日本武徳會教員講習所 遠藤

このような人生航路から明治四十年五月、徳島県知事の推せんを得て大日本武徳会武術教員養成所（武専の前身）第三期生として入所する。同期の中には、かの有名な持田盛二範士十段ら八名がいた。

明治四十三年五月、同養成所を卒業後、撃剣教師として、出身の阿波藩であった淡路の洲本中学校へ赴任する。着任後、席の暖まる間もない同年十二月、兵庫姫路市の姫路中学校剣道教師、同日付で姫路警察署剣道専務を命ぜられ、爾来第十師団将校・下士官団の剣道教師を始め、新設なった明石中学校、竜野商業学校、三菱生野鉦山等の他、

武徳会姫路支部、剣道主任師範として剣道の普及発展に尽力し、昭和四十年八月十三日、八十四歳の天寿を全うする迄、姫路の地を離れることはなかった。

亡父が子供達に語った思い出の一つに、武術教員養成所時代には学業途中、武者修業に立出し、青森県で同期の市川宇門先生らの道



播磨国統社拝殿内の貫心流の掲額

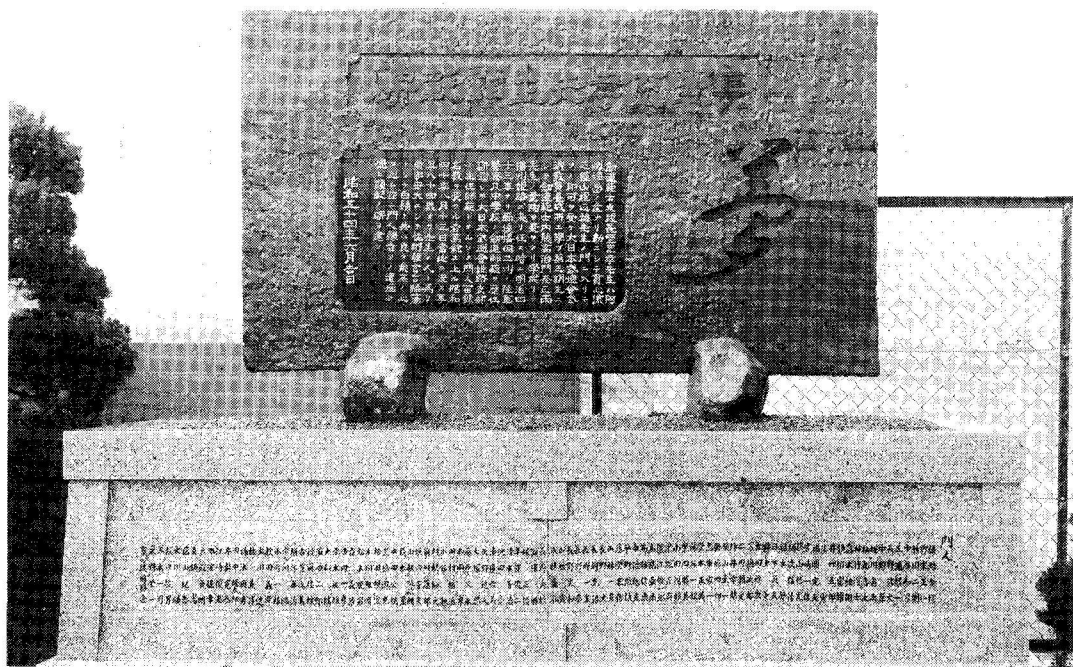
場で猛稽古をした際倒れると、雪の積った庭に門弟達の手によって做り出されるといふ、昔は苦しい修業をしたものだ、聞かされていた。その間、特に昭和三十九年には、第十八回東京オリンピックでの剣道公開演武に、最高齢者として、日本武道館で、養成所同時代、講習科卒業の愛知県出身の加藤七左衛門範士との模範試合に出場、外国人かも盛大な拍手喝采を浴びた。

この模様は、小澤丘範士著「近世剣豪伝」に写真入りで掲載されている。

昭和三十九年、門下生一回が発起人となって姫路市播磨国総社に、貫心流目録が奉納掲額されている。又播磨地方の剣道中興の祖として崇められた亡父の遺徳を偲ぶための「長野旗争奪剣道大会」が毎年夏行われ、本年度第三十二回目を迎えようとしている。その節には、貫心流居合、並びに貫心流剣術組太刀が披露されている。

次に昭和五十三年には、姫路武道館が建設された際、門下生等により御影石の土台の上に、高さ一、四米横二米の仙台石による顕彰碑が建立された。この仙台石に門下生代表として当時の全剣連副会長で、剣道範士結城令聞先生（元京都女子大学総長）により次のような碑文が寄せられている。

「剣道範士九段長野充孝先生ハ阿州徳島ノ産ナリ幼ニシテ貫心流正統山根正雄先生ノ門ニ入りテソノ印可ヲ受ケ大日本武徳会武術教員養成所ニ學ブ第三期生ニシテ剣道範士内藤高治門奈正両先生ノ薫陶ヲ受ケタリ學成リテ播州姫路ニ来リ住ス時二明治四十三



故 剣道範士九段 長野充孝先生顕彰碑

年ナリ爾後播丹二州ノ陸軍警察及中學校ノ剣道師範ヲ歴任研鑽シテ大日本武徳会姫路支部ノ主任師範トナルソノ門人百餘名教ヲ受クル者萬餘ニ上ル昭和四十年八月十三日當地ニ没ス享年八十四歳ナリ先生ノ人ト爲リ氣宇宏大ニシテ性剛毅言言駘蕩トシテ白髯ト共ニ良ク衆庶ノ心ヲ包ム茲ニ門人縁者ソノ遺徳ヲ俾ビ顕彰ノ碑ヲ建ツ

ところで、亡父の生活の一端を述べますと、武人らしく一生を和服で通し、長さ五十糎（胴の下迄）程のあご髯を靡かせながら、白転車で颯爽と道場へ通う、その袴姿を見て、髯の先生と慕われ、姫路地方では特に有名であった。又亡父は、豪放な性格で特に金銭的には、無頓着で（有ちが裕福な家庭であったためか）武徳殿での稽古が終ると門下生を毎日のように飲食店に連れて行き、酒を振舞っていた。当時学生立人禁止のレストランでは、制帽を鞆の中に隠させ裏口から入り、別室でよく御馳走になったというエピソードを現在八十歳近くの門下生が、折りにふれ話をしてくれらる。それもそのはず昭和十年代武徳殿の主任師範の手当が、月六十五円也であったが、（死亡後、書類整理していると出てきた）本人は受け取らず、そのまま当時姫路駅前に一軒だけあった三階建の西洋料理店「日の出食堂」に預けていたことを戦後に、当時のコック長と、仲居頭の夫婦から聞いた。

又そのことと同じく昭和三年に、教上号を授与された際、門下生一同から亡父に記念品の品定めを尋ねると、亡父は「皆で飲んだら良い。」と言われ、困ったという話を今は亡くなった先生か

ら聞かされた。一事が万事で、死去してから整理をしたときには、ガマ口から、百門札が一枚出てきただけで、亡母もあきれ果てた様子であった。その為、七人の子供を養育してきた亡母の家計のやりくりも大変だっただろうと推測するに餘りがある。

次に印象に残ることは、先祖なり、恩師、先輩に対する礼節は現在では、考えられない人生観を持っていた様で、遠く（現在では近いが）離れた異郷に先祖のお墓があった関係上、毎年八月の夏休みを利用して、一週間の予定で徳島市・軒屋にあった墓参りを欠かした事がない。又墓所の前にある花屋さんに、毎年お金を送り供花してもらっていた。これらは、戦後暫くまで続いていた芸者の置き屋を経営していた、栄町所在の従妹宅（佐藤性）を拠点に、恩師山根正雄先生、先輩近江佐久郎先生の墓前に額づくことも年中行事としていた。

又、劍禅一如と言われるように劍と茶道は、軌を一にしたもので、亡父は裏千家の一流である庸軒流師範で、お寺や自宅に於て指導していた。ある時、門下生の自宅を訪れ抹茶の接待を受けた際、亡父がその妻女に、そのお点前を褒めて帰宅した後、門下生が、今の人は劍道と茶道の先生だと話したところ非常に恥かしながら、今という話がある。その際、亡父はその夫婦に、茶道は形ではない、徒らに見栄をはることもいらない。ただ分相応に、心から客をもてなし、客もまた心から喜んで感謝して頂く、これが茶道の奥義だ、劍道と同じく、要は心である。愛情だよ。と話をしたそうである。

次に門下生への指導には厳しい中にも懇切丁寧に愛情を基本にして、常に心で打つ劍道を強調していた。特に貫心流武訓の一部である「武に徳と芸とがあり、徳はこれ本、芸はこれ末、本来兼ね備えたるを真の武と言ひ、真の武者というなり」生前よく口にしていたことは、「試合は勝たなくてもよい、常に堂々とした勝負をすること」「氣を抜かぬこと、これが一番大切だ」「劍道は己一人でもできる」「遠山の構え」「柔い劍道」「常に稽古に励むこと」等で、各年代、相手に相応する指導方法、褒めて伸ばさす指導方法であった。

亡父死去の際、大阪の吉田誠宏範士からも「長野君は弟子達への指導要領は天下一品だった」とお褒めを戴いた。

終りになりましたが、平成四年七月「しらぎ剣友会」（会長実兄長野大）の教師十二名が御地徳島へ稽古をお願いした折には、堀江会長様を始め諸先生方に大変お世話になりご指導を賜った事に対しまして、深甚の感謝を申し上げますと共に、徳島劍連の益々のご発展を諸先生方のご多幸を心から祈念いたします。

節 目

国民金融公庫徳島支店長 山崎 一夫



ゆっくりと天保山の棧橋を離れた高速船は、大阪港外に出るとスピードを増し、波のおだやかな海をすべるように進んでいる。

徳島への帰路の船の中、男は合宿稽古の疲れを休めるように、冬の陽光を輝かせて

いる海面を眺めていた。毎年二月の下旬に開催される関西学生剣道連盟によるリーダーシップは、昨年続き本年も大津で実施され、一五〇名余りに及ぶ学生達とこの三日間の合宿稽古は、午前の稽古で終了した。——ッや——とこれで今年度の学連の最終行事も終わった。早いものだ、徳島でもう半年余りが過ぎたのか。それにしても、この船にも何回乗ったことになるのだろう。——と男は思いながら、座席の背もたれを大きく倒し、慌ただしかったこの数か月を振り返るように目を閉じた。大きな船窓からは、海を輝かせている太陽が暖かな日差しを船内に注いでいた。午前の稽古の疲れと昼食時のささやかなピールのせい、船のかすかな震動と揺れは、男がまどろむには心地良いものでもあった。

昨年の夏、間近に迫った阿波おどりで街中に熱気があふれている徳島に男は転任してきた。新任地での仕事や生活で、秋から冬へと瞬く間に過ぎてしまったように、男には感じられた。そして、その間、月に三〜五回は徳島・大阪間を往復しているものの、その始どが学生剣道の大会やOB稽古会そして諸打合せ会といった

ものであった。週末ごとに家を空ける男を笑って送り出す妻の中には、半ばあきれ、半ばあきらめがあるのかも知れないと考えると、男も心の中で手を合せるしかすべがない。

徳島では、男は仕事の関係もあり、市街だけでなく郡部の各地を訪ねる機会も多い。落ち着いた街並み、そして緑深い森や山、清流の谷や川、明るい海といった豊かな自然に、男は大変に強い印象を受けた。長年、東京や大阪などのビルと喧噪と雑踏の地で生活し、仕事をしてきた男にとって、こぢんまりとまとまった街々と自然の身近な徳島での生活は、新鮮な気に満ちた活力と澄んだ感性を呼び起こさせられる思いがしている。男が仕事上のニーズもあって、いま新しい視点に立っての「地域づくり・まちづくり」をテーマに調査・研究に着手しているのも、このような重いが要因の一つとなっている。転勤、それは仕事の上ではもちろんのこと、生活の上でも当事者にとって一つの節目となるものである。男にとっては、自らの剣の修行においても、やはり節目となるものであった。

高校のころになんとなく始めた剣道に、男が面白さを分り出したのは大学の三年生のころであった。大学に在学中は、人並みの熱心さはあったものの、本来の不器用のためか技量の進み具合は遅々たるものであった。しかしなんとか四年間をやり通し、現在まで続いている剣の修行の第一歩を踏み出すことができたのは、大学での師の指導と励ましのおかげであった。

在学中はもとよりのこと卒業後も、男が佐賀へ転勤するまでの五年間、男は機会をつくっては大学で学生達と稽古に努めた。師と二人で学生達を引率し春・夏の合宿に全国各地を行脚し、各地

の先生方や剣士と竹刀を交しえ積んだ経験の数々は、今も貴重な楽しい思い出となっている。社会人となった男にとって職場から離れ、師や学生と過すひとときは、日常の自分を見直し、自らを純化する機会でもあった。仕事や勉強のやり練り等時間的にも金銭的にも苦勞もあったが、学生達が懸命に稽古に励む姿や若い夢を語り、コンパ等で笑い合っている姿から、男はどれだけの大きな励ましを得たことであろう。

この間、剣の師、教育者としての師から受けた指導とその影響は、大きく、暖かな愛情に満ちたものであった。現在、男がOBとして学生剣道に携わっているのも、このようなことが背景にあるといえる。

さて、男が大学を卒業した春に、大阪城内に市立修道館が設立された。初代の館長の卓越した運営と尽力、そしてそれによる充実した指導陣により全国屈指の道場となっていたこの道場に、男は自らの剣をつくりたいとの思いから、設立当初から稽古に通った。大阪はもとより近郊府県の有力指導者や実力者達が鍛え錬り合い充実した稽古が行われていたこの道場で、男は剣の修行の奥深さと豊かさに接することができ、以後の修行のための堅い節目をつくることができたと言える。

その後、男は佐賀、東京、名古屋、大阪等転任してきたが、なかでも東京における十六年間は、仕事の上でも大変に充実した時期であったとともに、自らの剣を鍛え深めることのできた大きな節目ともなった年月であった。

在京中の男は、警視庁で稽古する機会を与えられ、十五年間余り警視庁の朝稽古等に通い続けた。師範から助教までの重厚な指

導陣、選抜かれ鍛え抜かれた特練生や専科生といった人々の真剣で激しい稽古のなかで、男は、技術的には及ばないながらも、自らの剣の修行の方向とその心を観た。警視庁でのこの稽古によって、男は男なりに稽古への覚悟ができたことを、今も深く感謝している。

今、歳を重ねるごとに剣の修行の奥深さと自らの非力非才との落差がますます大きくなっていくのを目のあたりにして、男には、なおのこと修行の道を外すことなく、一步一步踏みしめていきたいとの思いが強くなっている。一打一突に自らの生きざまをこめられるような稽古を目指したいと願い、また一回一回の交剣の出会いを大事にして稽古に努めたいと思っている。

幸い徳島でも、県連盟の会長をはじめ多くの方々のご指導やご配慮により徳島県警や徳島大学等で稽古をする機会を、男は与えられている。男は、感謝の思いとともに、この徳島でしっかり肚を据えて稽古に励み、自らの剣の修行の節目をつくりたいものとな念じている。

突然のようにスピーカーから——「徳島港に到着するので下船の準備を」——といった内容の甲高い船内放送がひびき、男はまどろみから覚めた。船窓からは、西に沈みかけた夕日のなかに眉山が美しい影絵をつくっていた。——「もうすぐ三月か。来月は忙しいだろうなあ」——と男は、年度末までに片付けねばならない仕事のいろいろを考えながら降りる支度にかかった。高速船を降り、汗で重くなった防具を担ぎ、人々の列のなかゆっくと棧橋を歩いていく男には、このごろ肩の防具が少しずつ重くなっていくように感じられた。

全国講習会報告

第三十三回西日本中堅剣士講習会に

参加して

徳島文理中・高校教諭 中山 繁 輝



柳生流発祥の地、奈良市柳生正木坂道場に於いて、平成七年六月十四日から十八日までの四泊五日の日程で実施された。以前は全国規模で各県から選ばれた剣士達が柳生へ集まり行なわれていたが、現在は東西二会場に分かれて実施されている。参加資格は、五十才未満で教士七段と定められ、今年は西日本から二十八名が参加した。

柳生での講習会参加は、私にとって長年の夢であっただけに、喜びと感激はひとしおのものがあった。しかし、噂に聞く激しい稽古に耐えられるだろうか不安であった。『どんなに苦しくても、徳島県の代表として最後までやり遂げるんだ』と心に誓い強い決意で参加した。

初日に、近畿・中国、四国・九州の三班に編成され、道場掃除や先生方のお世話などをさせて頂く中で、集団での倫理や協調性

など大切な事項を初心に返って学ぶことができた。また、食事や入浴時、あるいは剣道談議を通して受講生相互の親睦を深め、併せて団結の心も強まっていった。

朝夕各一時間の稽古は園田先生の指揮で進行していった。稽古内容は三十分間の切り返し・掛かり稽古、更に三十分間の地稽古の繰り返しであった。一人当たりの切りかえし、掛かり稽古は約十五本ずつであったが、苦しくて息が上がり気・剣・体の一致の打突が思うようできず、日頃の稽古不足を痛感させられた。日頃、子供達に強制的にやらせている切り返しや掛かり稽古の苦しみが分かる思いであった。三日目の朝にはすでに全身が筋肉痛で、身体が動かない。風呂場で背中を洗うにも腕が上がらない状態で辛かった。『あと、何回』と残りの稽古回数を数えながら、一日の稽古が終わった時に、受講生から拍手が沸き起こっていた。最終の稽古が終わった時の受講生の大きな拍手と歓声、全てをやり終えたあの充実感と爽快感は今でも忘れる事ができない。

園田先生から大阪府警の選手時代のお話を聞かせて頂いた。試合に勝てない時期があり、師範から『試合稽古はしなくてよい。切り返しと掛かり稽古だけをやりなさい』と指導を受けたそうである。スランプから抜け出したい一心で、師範の言われる通りに切り返し・掛かり稽古に専念した。試合から離れる事により、気持ちの迷いが取れ、大会で予想以上の活躍をした貴重な体験談を伺う事ができた。また先生は、『今回の講習会では、剣道の基本である切り返しと掛かり稽古を中心に指導してきました。苦しい

事は分かっていますが、皆さんにとって極めて大切なことなので最後までやります。私は妥協はしません。これが私の信念であり受講生の皆さんへの愛情です』と素晴らしいお言葉を頂いた。太鼓を叩いている先生のお顔が鬼に見えたこともあったが、丁寧で理にかなった技術指導や、貴重な体験談をお話し頂き、今では園田先生に感謝の気持ちで一杯である。

最終日前夜、今回の受講生の同期会が結成された。第三十三回を記念して『柳生燦燦会』と命名され、年一回、五月の京都大会期間中に同期会を開く事となった。受講生一同、柳生で学んだ技術や知識、苦しい稽古をやり遂げた精神力を今後の修行の糧として、なお一層の研鑽と練磨に精進することを誓い合い柳生の里を後にした。

最後にこの講習会の参加の機会をお与え頂いた、県剣道連盟の先生方に感謝を申し上げます、報告と致します。

西日本中央講習会に参加して

審議員副委員長 細川 昭典



新規則が昨年七月から施行され、八か月が経過しました。改正から施行まで、全国の公式試合では、全国家庭婦人剣道大会に始まり各県に於ても、各大会に適用されている現状であります。

全剣連では、改正から施行まで、東西の中央講習会を始め、全国各地で、新規制の伝達講習が行われ、本県から、坂下先生と私、受講させていただき、大変ありがたく思っています。

今回の講習は、前述の通り、新規制の伝達が主な目的でありません。

改正の趣旨は、昭和五十四年に剣道理念に基づくものとして、かなり、大きい改定が行われたが、これまでの改正が、条文の追加や技術面の対応で、複雑多岐にわたり、規則の枠内で処置できないほどになり、規則そのものの整理統合が必要となってきた。特に条文の表現方法や、用語が実用にそぐわないものもあったり、試合規則と審判規則の一貫性を欠いた部分が出現したので改正に踏み切ったというものです。

改正は、これを運用する人に混乱をきたさないことを要点として、規則そのものを簡単にし、細則を設けて、その不備を補った。

目新しいものとして、「薬物の使用」その他「開始線の復活」「鏝競り合」からの「分かれ」の導入「竹刀の打突部を物打ち中心とした刃部」とあらためた。また、現行の規則が不十分なため、専門家家の指導により、一般的な規則の法則に従って、編、章、節と区分し、見やすいように改正した。

重複する点もあるが、主な改正点をあげて見ると、「剣道試合、審判細則」として整理統合し、条文の表現方法を簡素化、欠落しているものを補充した。さらに、誤解がないように細則を設け、剣道用語は、専門用語として、できるだけ残す。通告、注意などを改め開始線の新設、竹刀の打突部に「物打ち」を入れ、小刀の重さを改正、判定内容を明記する。胸突きを削除し、新たに薬物の項を設け、審判員の任務を定め、有効打突の錯誤について、新たに新設する。鏝競合いが膠着した場合は、「分かれ」を新設し、負傷、または、事故の場合、医師および審判員の判断により出場可能と改めた。更には、審判員の宣告と「旗の表示法」を表に改め、合議後の表示方法を改めた。

以上、剣道試合、審判規則改正について、例記しましたが、要は、審判技術の向上は、前述の通り十分、各細則を理解することにも、各自の技量の向上以外なものもないと思います。

また、日本剣道形については、形の重要性と、形の制定沿革、及び現在に至る経過、更には、実務上の基本的な注意点等、実技を通して、微に入り細にわたり指導をうけた。中でも、注意事項の中で、「稽古は形の如く、形は試合のごとく、試合は稽古の如

く行う」という、ご注意が心に残っている。

剣道の指導と心構えについては、「信念をもち、誰にでも、太陽光線のように、愛情をもって指導する」との、原点のご指導が、心に残っている。なお、指導の手引き書は、全剣連の出版「幼年剣道指導要領」の紹介もされた。

最後に、講師の先生方を中心に稽古会で、村山先生にお願いした稽古が非常に印象に残りました。

以上、講習会に参加させていただき、中央の空気に接する機会を与えていただきましたことを心から感謝しています。更に「初心」にかえり、持田盛二先生の遺訓を心に止め、精進していきたいと思っています。

徳島の剣道史

文化・文政期の阿波に於ける

剣術他流試合について

剣道史編集委員長 坂本裕二

剣術は近世後期になると防具の開発とともに、形稽古から竹刀打突の稽古法に逐次移行した。従って伝統技術とは全く異なった新しい技術が工夫考案され、相手に勝つための技が生まれた。

これと同時に今まで各流派は孤立し秘密主義であった技も、次第に開放的になり、禁止されていた他流試合も行われるようになった。

文化・文政頃になると武芸者は、各地の道場を廻って稽古する者が増加した。いわゆる『武者修業者』で各道場を廻ってお互いに技を競うようになった。これが現代の剣道へと移行していった。

他流試合の実態はどのようなものであったかを知るために貴重な資料がある。それは武芸者が武者修業に門出する時、携帯するものに『英名録』別名『諸国剣術修業帳、諸流派剣出合帳、武術尊名帳』ともいわれ、試合した日時、場所、道場の師範、稽古相手の姓名、流派、試合の状況等を記録した帳面である。この帳面を見れば大

体、当時の剣術の状況が判明される。

美馬郡脇町の神全塾武田家に文政年間の英名録が二通ある。

その一つは岡山藩小野派一刀流師範笹谷武次郎の門人津島兵左衛門が、武田家を訪れた時、持参した英名録を武田宗作（一七五六―一八三四）が筆写したものである。

津島は文政十二年（一八二四）五月十二日門出し、備中庭瀬藩に行き、神道無念流の神田刀右衛門の門人、小橋小兵衛以下八名との試合を手始めに、二十日までこの付近で試合をした。それから播州、大阪、京都、と廻り大阪で長期滞在して、文政十三年二月に阿波徳島城下に来て、池田大隅の家来川崎氏の道場で、名西郡下浦の神道無念流の一宮琢磨と、三浦儀太郎門人で稲田家の三宅繁左衛門と、同年十二月十一日には心形刀流多田三次右衛門門人池田大隅家中川端八郎、同虎八と、十二日・十三日の二日は三宅繁左衛門の門人十二名と試合をした。これで城下の試合は終わり、名西郡下浦に来て、神道無念流一宮琢磨ノ門人、美馬大蔵以下十八名と、二月十四日より十五日まで。名西郡関で山根大蔵の門人山口吉次郎以下十七名と二月十六日に。麻植塚の貫心流佐藤忠左衛門と河野玄良の門人、板東宗九郎以下二十六名と、二月十七日より十八日まで二日間。次に阿波郡伊月村に来て、小沢武次郎門人、原土江沢市郎次と、二月二十四日には美馬郡脇町武田の神全塾で試合して阿波の試合行程は終わっている。津島の試合日程は徳島城下で三日、郡部で十四、五日滞在中で試合したことになる。

その二は、江戸小川町住神道無念流一宮琢磨門人、真田俊之輔正之の英名録『諸流撃剣出合』を前記同様『武田宗作』が筆写したものが脇町武田家にある。

それによると真田俊之輔は江戸小川町を出て武州八王寺で近藤勇で有名な天然理心流近藤三介門人と試合をして、甲州都留、早川、三島、沼津、浜松、濃州、伊勢、京都、大阪と廻り、天保二年（一八三一）十月六日徳島城下に来て神道無念流三宅繁左衛門の門人、加本弥四郎と試合した。同十月八日は貫心流山根大蔵門人、山根武五郎以下六名と名西郡関で、十月九日は貫心流中川準三郎、関口流佐藤二三太の門人、市場の大俣、中田辰介と、最後に猪尻で関口流武田宗作、大輔の塾生、十六名と試合をしている。真田は阿波で十五日滞在、その間城下では一日のみ、後は郡部で試合をしている。

この二人の武者修業者津島と真田の英名録だけで他流試合について断定するのは甚だ危険であるが、二人の武者修業した場所を考察してみると城下より離れた処。人の集まるのに容易であり、物資の集散地であった処が殆どである。即ち政治的に束縛せられず、交通が便利で、諸国の情報が容易に得られ、しかも経済的に恵まれた場所であった。これらの条件を具備しているのが大坂である。従って武者修業者が一番多く大坂には集まった。

阿波に於いては徳島城下の剣術の担い手は武士の子弟である、彼等は武士として規範があり、旧態依然とした形稽古が主流で他

流試合になじめなかった。これに反して郡部の武者者は百姓、町人、郷士等の子弟で何等武士の如く束縛を受けなかった。郡部には藍の豪農、豪商があり、彼等は全国に雄飛するので護身術を必要とし、武芸を奨励した。彼等は財力にものをいわせて、他流の武者者の来訪を歓迎して腕を磨いた。これが他流試合を盛んにした原因で無かろうか。

岡山 津島兵左衛門が阿波で武者修業した相手

阿州下浦

神道無念流 一宮琢磨門人

辻 安之進

美馬大蔵

原見梅太郎

富田儀三郎

々 政吉

々 又蔵

谷本縁太郎

中野徳三郎

近藤加右衛門

近藤伊右衛門

三村虎五郎

平島伝吉

平島政吉

岡田仙太

石井六次郎

角野関弥

文政十三年二月十四日・十五日

名西郡関

貫心流 山根大蔵

山口吉次郎

芳田彦郎

藤井□三郎

芳田吉郎

近藤和平

林文左衛門

川端房吉

山口又三郎

関亀三郎

高田豊藏

文政十三年二月十六日

楠本善兵衛

近藤力太

藤井初藏

印藤源三郎

井内熊八

山根武五郎

麻植塚

貫心流 佐藤忠右衛門

河野玄良

板東宗九郎

小笠多藏

武知方藏

多田兵吉

藤井六右衛門

村井弥重藏

原田伊藏

松村好三郎

川端庄平

富樫武之丞

湯浅政右衛門

村井長三郎

乾嘉九郎

文政十三年二月十七日

門人

日野綱三郎

日野常三郎

佐藤慶之丞

佐藤忠兵衛

藤井藤右衛門

平井嘉二郎

佐藤清右衛門

口田儀三太

新居友左衛門

新居徳二

桑原栄太郎

村井峰三郎

佐藤万三郎

阿波郡伊月

小沢武次郎門人

文政十三年二月廿一日

江沢市郎次

鈴木派神道無念流東都産貞田俊之輔止之が
阿波で武者修業した相手

神道無念流

三宅繁左衛門門人

阿州徳島 加本弥四郎

天保二年十月三日

名西郡高原村関

貫心流

山根大藏

山根武五郎

野口齐二郎

芳田吉朗

近藤和平

山口世之助

重本武市

天保二年十月八日

貫心流

郡 九十九

郡 泰太

郡 惣右衛門

郡 予一

郡 氷三郎

〃 亀久三

天保二年十月九日

阿州麻植

貫心流

新居好助

柏木亀太

上藤茂市

藤本文蔵

鰻淵文平

板東万二郎

板東利二郎

中村吉五郎

坂東左馬郎

板東八百太

天保二年十月十日

阿州美馬郡棚田村処士

小野派一刀流 中川準三郎維清

天保二年十月十二日

関口流

佐藤三三太止秀

天保二年十月十二日

竹之内流

遠藤宗吉

阿波郡大俣

関口流

佐藤三三太門人

中内辰介

阿州北方井尻

関口流

武田宗作

武田大輔

塾生

湯浅源十郎

林儀蔵

吉田栄之助

木村高四郎

武田本吉郎

一宮徳郎

青木徳蔵

尾方忠三郎

上田伊三郎

上田喜三郎

南 幾平

柴田□太

武田尚軒

大谷関左衛門

天保二年十月十四日

後記

脇町武田誠夫氏蔵の資料の提供と賜り記述致しました。
厚くお礼申し上げます。

支部だより

〈小松島支部〉

支部五十年あれこれ

小松島支部長 田村直一



一 少年剣道クラブの育成

昭和二十五年、新開小学校の昔びた校舎の一角で夜、薄暗い裸の電球の明るみを頼りに「しない競技」と名をつけて、剣道の同好会が発足をした。

当時は、敗戦まもなく主要食糧の供給も不十分であったが、他に何の娯楽もなかった時代でしたので同志が集り、赤石町の笹倉太郎氏を中心となって切磋琢磨した。

昭和二十六年四月、小松島市初代会長に橋本正吉氏が就任。昭和三十三年四月、笹

倉太郎氏（二代目会長）が組織を拡充し、児童、生徒への普及指導に精励された。

昭和四十年四月。私は、スポーツ振興法にもとづく小松島市体育指導委員（剣道担当）に教育委員会より任命され、専ら少年剣道クラブの育成と拡充、協会の設立、その事業運営に盡力。多くの指導者、父兄、行政、支援団体の協力の下、徳島県剣道連盟の支部組織にも合一して、一体の中で、

斯導振興の為に少年剣道指導の同志と共に歩んできたのである。現在活動中の少年剣道教室は以下の通りである。

1 新開剣道クラブ

大林町字中津三〇（加林恵裕、蝦名久作）

2 和田島剣道クラブ

和田島町字山のはな三

（篠原誠一、株木芳夫）

3 立江少年剣道教室

立江町字松本一三（山越 徳、松本次美）

4 小松島少年剣道クラブ

神田瀬町三三六三（堀金 實）

5 坂野少年剣道クラブ

坂野町根上り（飯沼 日、櫻福 稔）

6 直心館剣道場（昭和五十二年四月創設）
田野町字赤石南二九七

（田村直一、松田敏弘）

（ ）は、主な現在の指導者名である。



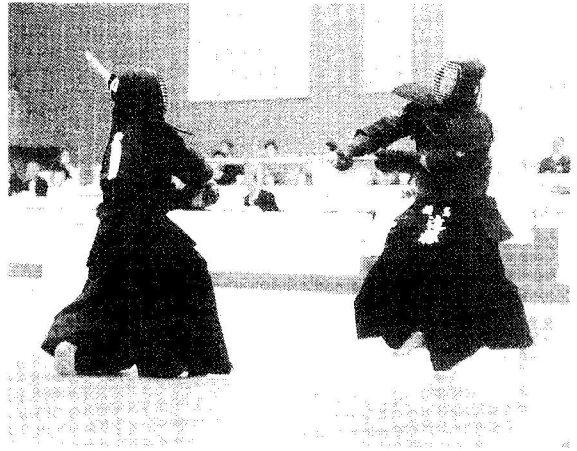
直心館剣道場にて

二 東四国国民体育大会小松島剣道大会

東四国国民体育大会剣道大会の会場地選定並に施行についての委員の一人として、小松島市に於て開催されることを強く各方面に働きかけてきた私としては、日夜頭か

ら離れることのできないものであった。管掌する文教厚生委員として市立武道館の建設が急がれた。各地の武道館を視察して企画。議会を通過。いよいよ日が切迫するなかで、剣連の皆様のご配慮で少年の部の小松島市に於て開催が決定した時は、我子の誕生のように嬉しかった。徳島県国体実行委員としても、各方面に出向き勉強したことが、つい先日のように思い出される。小松島支部内の先生方を始め、ご父兄の皆さんにご協力頂き、晴れの大会を終了した平成五年十月二十六日の記念の閉公式。数々の歴史がぎざまれて終了することができたことを「ヨカッタ」という想いが今も消え去ることなく脳裡にあります。

管内少年剣士の多くの目の輝きをみるこ
とができた、国体剣道大会。宮城県の宮沢
八段教師監督以下、七人の選手の民宿を直
心館道場が担当。父兄の応援、近所の人々
の暖かいご援助を頂き、いつまでも心に残
る交流の中で数日間を楽しく語りあった。
その心のつながりは今もつづいております。
宮城は、昨年の剣道大会に於ても大いに活



徳島県チームが少年男子で2位入賞

躍されたので、今年もきつとよい成績であ
ろうと期待と声援をみんなまで送っておりま
す。

それにつけても、最近の小学生の筋力が
弱く、走力や幅とびの力が劣っていること
が文部省から発表された。このことについ
て、官民あげての関心がよせられており、
剣道人として憂慮しています。日本を背負
う子供の体力、気力、意志の心の啓発につ
いて強く関わってゆくことが大切だと思っ

ものです。日本体育社の「みんなのスポー
ツ」という体育雑誌の記事にも大学生が運
動を嫌いになりつつあり、体育科を嫌がり、
運動会などは殆ど無いそうです。若い国民
の強い力がなくなった時、社会はどうなる
のだろうかと思う時、「年寄りのなんとか」
ですが、皆さんもともに対策を考えようで
はありませんか。

三 義経上陸八百年記念県下少年剣道大 会

平成六年十二月十八日は、かねて計画し、
予定していた大会の日であった。剣連のご
指導を頂き小松島支部をあげて取り組んで
きた県下小・中・高と三種別の選抜少年大
会。当日午前八時には、さしもの広い駐車
場も一ぱいになった。立江川の橋にかかる
狸の剣道像も満悦。大会場に掲額されてい
る「寂然不動」の哲学の心を、参会者一同
がこの地に上陸して阿讃の山を越えた屋島
に馳せた、英雄義経の心と共に剣士の皆さ
んに注目され、理解されたと思う次第です。
私にとっては「剣と書は」自己啓発の夢
でありました。これからも皆々様のお導き

により、体育指導委員として剣道の振興に努めたいと存じます。

去る平成七年十月二十六日、社団法人全国体育指導員連合の大阪大会の折り、斉藤斗志会長より勤続三十一年の表彰を享けたことは、私の栄光と喜びであり、多くの師に恵まれたお蔭と深謝申し上げる次第です。

小松島支部長一覽

初代	橋本 正吉	小松島町
二代	笹倉 太郎	赤石町
三代	早川 一也	櫛渕町
四代	田村 直一	田野町
顧問	蝦名 久作	大林町
理事	堀金 實	江田町

〈美馬西支部〉

剣連理事 大川 功

私の所属する美馬西支部を紹介します。当支部は徳島市より西へ約五十km程の処で南は剣山、北は阿讃山脈に挟まれていて吉野川中流域に位置します。支部内の町村は四カ町村あり、吉野川の兩岸に広がる美馬町、貞光町、半田町、宇村で構成されており、支部員は、香西虎夫支部長を筆頭に総勢三十八名であり老若男女が入り交じっており最高齢者は八十五才の小野寺恒義先生（教上七段）です。当支部は水と緑に囲まれ稽古を勤しむ者には環境の良い処であると自負しています。

次に当支部を支えている支部の概況を説明します。各町村にはそれぞれに活動している団体があり、その代表者と名称を紹介いたします。

- ・香西支部長率いる美馬町剣道教室
- ・佐藤藤太前支部長の貞光町子供会連合会

剣道部

- ・桑原紀先生の一字村少年剣道クラブ

- ・西尾武明剣連評議員の半田町剣道教室

私は半田町で所属しております。又、美馬・貞光・半田の各中学校にも剣道部があり日々活発な稽古が行なわれています。剣道教室では指導者の交流稽古も実施しており、親睦を図ると共に剣道人口の減少している中で底辺拡大に御尽力を頂いております。当支部の活動として、主な例を上げると青少年の健全育成を目的に貞光警察署主催の美馬西部防犯少年剣道大会と県民スポーツ祭美馬西部少年剣道大会の二大会があります。各大会共、小中学生合せて百余名の参加が毎年継続され盛会に実施されています。

又、その大会に於いても支部員が協力しつつ実行し、若い支部員の育成にも役立つ大会であると思えます。その他には毎年秋に開催される県剣連主催の社会人大会に参加すべく、真夏の八月より稽古会を実施しており支部員の技術向上と交流を深める為、毎週二回、汗を流しながら切磋琢磨する姿があります。

残念ながら大会には参加するものの戦果は良好ではありませんが、一つの目的に向けて一人一人が稽古に励む事が支部員の団結にも繋がっていると思います。

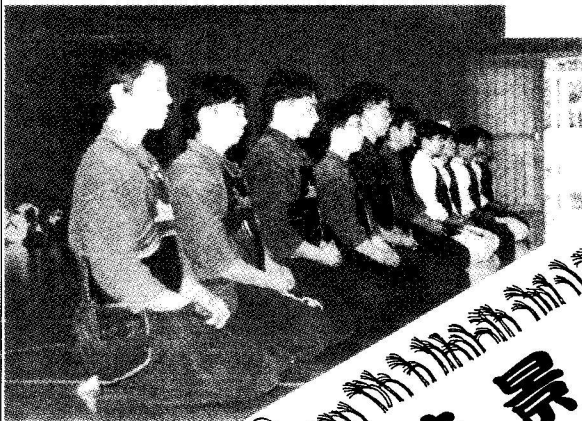
また、今年は美馬西支部の半田町日浦小学校に鳴門教育大学剣道部が夏合宿に来てくれ、好評でした。

最後になりましたが、当支部が発展して行く上で県剣連の先生方にはご迷惑をお掛けするかと思いますが、今後共ご指導、ご鞭撻が頂けます様お願い致します。

日浦小で夏期合宿

鳴門教育大学剣道部（木原資裕監督）の部員など13名が、8月22日から25日までの4日間、今春から休校となっている日浦小学校校舎を利用して、夏期合宿を実施しました。これは、かねてから合宿先を探していた木原監督が、本町の少年剣道教室の指導者から、日浦小学校を紹介され、実現したものです。

「施設もきれいで、周囲の環境も素晴らしく、本当にいい所です。費用も安上がりで助かりました。来年もぜひ、利用させていただきたいものです。」と木原監督。合宿終了後、部員たちは広島県で開催される「中四国学生剣道優勝大会」に出場するため出発しました。



▲練習前に精神統一する部員の皆さん。日浦小体育館で。



▶「メイン」の基本練習のまよう。一日三回厳しい練習が続けられました。

●広報はんだ 1995年（平成7年）9月号

「広報はんだ」1995年9月号より

各種大会に参加して

全日本居合道大会観戦記

居合道部長 原 田 勝



平成七年十月二十
二日、尚武の国、熊
本の地において、第
二十回全日本居合道

大会が盛大に開催され、各都道府県、四十
七チームが参加し、熱戦を繰り広げました。
本県からも七段の部に監督を兼ね高橋憲司
選手、六段の部に吉岡修一選手、五段の部
に福井勝選手の精鋭三名が参加しました。
三選手とも一回戦は見事な試合運びで勝ち
上がり、好調な出足見せたが惜しくも、三
選手とも二回戦、又は三回戦で敗れる残念
な結果となりました。三部門とも、僅差で
伯仲した試合であり、次回大会に期待の持
てる良い内容であったと思います。徳島県

の全国順位は二十位であり、ちなみに優勝
は地元熊本でした。

試合内容を全般的に見ると全剣連居合に
於いては、講習会が、中央、地方とも二か
所で開かれるようになり、より密度の濃い
指導が受けられるようになった事に伴い、
伝達講習も充実してきたように思います。

各選手とも全体的に教本どうりの正確な技
が多かったが、その分だけ全剣連居合ふう
の占流が多々あったようにも感じられまし
た。又、観戦中ある先生のお話の中でこの
大会で上位に入賞するためには、切る居合、
そして、切れ味のよい手に内、間と間合の
良さに加え、歩き方、座り方、礼法、等の
所作の中にも修養の深さの中よりおのずか
ら生ずる、その段位に合った、位、品位、
風格といった真似ごとでは身につかないも
のが要求される、と言う教えを頂き大変勉
強になり有難く思うと共に自分にとって、
それは遙かに遠い日の事のように感じられ
ました。

来たる平成八年度の三十一回大会に望ん
では、年度当初に選手の選考を行い、強化

練習等の綿密な計画を立て本県チームの上
位入賞を目指し、共に練習に専念すべく気
持ちも新たに熊本の地を後にしました。



第十七回全国スポーツ少年 団剣道交流大会に参加して

大野小学校剣道部 大 西 雅 照



平成七年三月二十
七日から二十九日ま
での三日間、山口県
スポーツ文化センター

で行われた全国大会に参加しました。参加した選手は厳しい徳島県の子選を勝ち抜いた、小学生五名と中学生二名の計七名でした。僕は剣道を始めた時から、スポーツ少年団の全国大会に出場するのが夢で、今までがんばってきました。そして予選の五・六年生の男子の部で優勝することができ、団体戦の大将として全国大会に出場できて、とてもうれしかったです。全国大会までの二か月の間、週一回の強化練習を行いました。警察学校の練習では、剣道連盟の堀江会長先生から『一生懸命、全力で試合をしないさい。そして、ほかの県の選手の人達と交流を深めてください』と励ましのお言葉

をいただきました。選手全員が『徳島県の代表としてはずかしくない試合をするんだ』と誓い合って全国大会に参加しました。

大会初日は、入場行進と開会式、選手全員での基本錬成や山口県と各県の監督の先生方のご指導を受けました。また、体操服に着替えての、ゲームや各県の郷土民芸品の交換会が行われ、僕たち徳島県は、阿波踊りの竹細工の人形を交換しました。

大会二日目、いよいよ試合が始まり予選リーグ第一試合、群馬に四対〇で勝ち、第

二試合日の愛知戦も二対二の本数で勝ち、予選リーグを突破して、明日の決勝トーナメントへ進むことができました。特に愛知との試合では、副将まで二対一でリードされていましたが、僕のコテとメンの二本勝ちで逆転勝ちになり、僕は大将の役目をはたしたのでほっとしました。

大会最終日、勝ち残った十六チームのトーナメント戦が始まり、一回戦は香川県と対戦しましたが、結果は二対二の苦しい試合でしたが、本数勝ちしました。二回戦は、過

出 場 選 手

団体戦 (小学校)

監督	中山 繁輝	(至誠館)
先鋒	中山 希実子	4年 (至誠館)
次 鋒	北川 希依	5年 (鴨 島)
中 堅	楠原 光謹	6年 (阿 南)
副 将	樫本 美紀	6年 (延 野)
大 将	大西 雅照	6年 (大 野)

個人戦 (中学校)

男 子	儀宝 正志	(相生中)
女 子	遠藤 律子	(阿南第 中)

団 体 戦 試 合 結 果

予選リーグ

徳 島	4 (9)-(4) 0	群 馬
徳 島	2 (5)-(3) 2	愛 知

決勝トーナメント

1 回 戦

徳 島	2 (5)-(4) 2	香 川
-----	-------------	-----

2 回 戦

徳 島	1 (4)-(5) 3	岡 山
-----	-------------	-----

去に優勝三回を誇る強豪岡山県との対戦でした。副将まで二対一でリードされ、僕が二本とれば本数勝ちになるので、全力で攻めて戦いましたが、出コテを取られ一本負けをしてしまいました。くやしかったけれど、全力で戦ったので悔いはありませんでした。監督の中山先生からも『負けはしたが、良く攻めて戦った。よかった。』とってもらいました。ベスト四はのがしましたが、ベスト八のチーム選手全員に敢闘賞の賞状をもらうことができて、とてもうれしかったです。

この大会に参加して、たくさんの方々ができたり、大将として責任を感じたことや予選リーグを突破してうれしかった事、そしてチームワークや試合での一本の大切さなど、多くのことを学ぶことができました。これからもこの経験を生かして、人並み以上の努力をして、数多くの大会に参加したいと思います。また、来年この大会の中学校個人戦に出場できるようにがんばります。

全日本都道府県対抗剣道

大会に参加して



大将 近藤 亘

全日本剣道連盟三
大行事の一つ、全日
本都道府県対抗剣道
優勝大会が、五月三

日、京都市立体育館で開催されました。
今年の徳島県選手は、

先鋒 長井 薫 三段（城東高校）

次鋒 福多雅英 六段（城北高校）

中堅 吉田茂生 五段（機動隊）

副将 白木 崇 六段（中央武道館）

大将 近藤 亘 七段（機動隊）

と、粒ぞろいのメンバーで、私も「上位入賞できるチャンス」と意気込んでの出場でした。

試合は、初めに三県による予選リーグ、これで勝てば、決勝トーナメント進出となります。

徳島は、予選リーグで、鳥取、栃木と対

戦いたしました。

鳥取戦では、福多、白木選手が勝ち、他の三名が引き分け、二一〇で徳島の勝ち。

栃木戦では、福多選手が勝ち、白木選手が負け、他の三名が引き分け、一一一で引き分け。

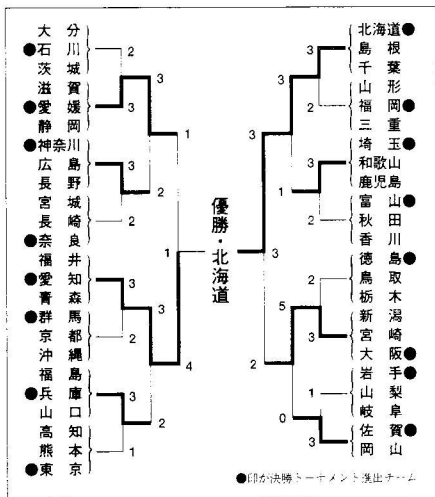
トータルすると

徳島 1勝1分け

栃木 2分け

鳥取 1敗1分け

で、徳島が決勝トーナメント進出を果たしました。



決勝トーナメント。回戦は、強豪、大阪との対戦です。ここに勝てば上位入賞も夢でないだけに自然と気合が入ってきました。先鋒、一本負け、次鋒、一本勝ち、中堅、一本負け。副将、一本勝ち。

と、白熱したシーソーゲームが展開され、いよいよ大将戦となりました。

相手は、全日本選手権者の大阪府警、岩堀七段です。岩堀選手は、豪快なメンを打つ試合巧者の選手です。

岩堀選手の子選での試合を見ると、動きは悪く、もたついた試合内容であり、自分の力を出し切れれば勝てると考えていました。

しかし、試合が始まると違っていました。私が攻めて打とうとして、一瞬身体に力が入り硬くなったところへ、岩堀選手の面が飛んできたのです。

「しまった。」と思いましたが、どうすることもできず、豪快な出頭面を打たれてしまいました。

自分の欠点を思い知らされた見事な面でありました。

私が大将戦で敗れたため、結局、ベスト8進出はなりませんでしたが、手に汗握る本当にいい試合内容であったと思います。特に、福多選手、白木選手の健闘を称えたいと思います。

今回の試合で、実力は紙一重ということをもっと感じました。今後とも一層精進を重ね、次回は是非とも上位入賞を果たしたいと思います。



岩堀(大阪) 対 近藤(徳島)の大将戦 (「剣道日本」1995.6月号より)

全国警察剣道選手権大会に 出場して

警察支部 吉岡茂生

去る平成七年八月二十五日、警視庁術科センターにおいて、全国警察剣道選手権大会が開催され、私は本県代表、又警察庁指定選手として出場しました。小学校一年生から剣道を始めて以来、二十一年目にして初めて全国の個人戦に出場できることに大きな喜びを感じていたとともに、三月に出場が決まってから当初開催予定とされていた五月二十九日までの間、一生懸命稽古に取り組むことを決意しました。しかし昨年一月十七日に阪神大震災があり、以来四月末まで災害警備のため、神戸へ行ったり来たり生活が始まり、そのうえ警察庁長官狙撃事件、オウム事件等、警察を取り巻く情勢は厳しくなる一方で、練習もできないばかりか、本大会まで無期延期となり、「これで警察庁指定選手も幻に終わるのか。」とほとんどあきらめの境地になっていまし

た。しかし六月末、再度大会日程が八月二十五日に決定し、気持ちを入れ替えて稽古に励みました。そして大会一週間前から、会場の雰囲気、スピードに慣れるため、警視庁で合宿を行い、試合に臨みました。

以下大会結果、

予選リーグで二人が二勝一敗。抽選負けで決勝進出ならず。

(吉田、岐阜・渡辺、広島・松浦、山

梨・松田)

第一試合(対渡辺戦)

初の全国個人戦であったせいか、緊張して体と思うように動かない。ただひたすら身体を前へ持っていくことを心掛けた。お互い有効打なく五分間で決着つかず。気持ちだけでも前にあったことが幸いしてか判定勝ち。

第二試合(対松浦戦)

体が少しずつ動き始め、本来の調子を取り戻しつつあるが今一つ。結局時間切れのため判定になり、負けを喫した。

第三試合(対松田戦)

不戦勝ち。

本大会を振り返っての感想は、大舞台の試合で勝つことと、平常心で戦うことの難しさを知ったというのが正直な感想であります。

私は今後、次の二つのことを課題として、稽古に励みたいと思います。

その一つは、自分の得意技を作ることです。警察では特に判定試合が多く、時間内に一本を取ることは難しいのです。そこで自分に得意技があると、マイペースで試合を運ぶことができ、時間内のワンチャンスを生かすことができると思います。そのために、稽古では思いきった技を出すよう心掛けたい。その中で得意技を見つけ出した

い。

その二つは、試合では常に○○パーセントの力を発揮できるようにすることです。これにはメンタルトレーニング、呼吸法などありますが、やはり常の稽古とその量だと思えます。稽古では研究心を持ってやるとともに、○○パーセントの力を出してやっっていなければ、試合で○○パーセント出せるわけがありません。全力で稽古

することによってそれが自信につながり、心に余裕ができ、無駄な力が入ることなく、常の自分を発揮できるのではないのでしょうか。

また、本大会で抽選負けをしたことで、常日頃からの神頼みも必要だと思いました。

以上のことを念頭において稽古に励み、自己のレベルアップを図りたいと思います。



全国家庭婦人剣道大会に

参加して

白木修子



平成七年八月一日、
日本武道館に於いて
全国家庭婦人剣道大
会が行われました。

監督として同行して下さる手塚先生は、六段を取得された早々、本大会の審判に抜擢された為、大将の中尾さんが監督兼任で試合に臨むことになりました。

前日から会場近くのホテルに宿泊させて頂きましたので、当日は、開場時間に合わせて武道館を目指し、九段下の坂を意気揚々と登りました。

夏休みということもあって、ちびっこ応援団の姿が多く、本大会ならではの光景でした。

我が徳島県チームは、先鋒・岩見さん（鍊心館）、次鋒・白木（名西）、中堅・田中さん（阿南）、副将・有松さん（小松島）、

大将中尾さん（小松島）、というメンバーでした。

栃木・三重・徳島三県のリーグ戦では徳島は二敗で、トーナメント戦に勝ち残ることはできませんでした。しかし、今回の試合の反省も含めて、各々が新たな目標を持ち、今後の稽古の課題を見つけることができました。

本大会は先鋒から順に、二十才代一名・三十才代二名・四十才代二名という選手構成です。県予選に出かけたところ、三十才代の参加者が私を含めて三名でした。この時点で、試合をせずに二十才代を兼ねて三名の全国大会出場が決定しました。あとの二名はお願いして出場して頂いたようです。他県では何十倍という予選を勝ち抜いての出場という人も多く、試合巧者という印象を受けました。また、学生時代に名を馳せた方々も沢山参加されており、家庭婦人大会とはいってもコートに入れば、僅かな隙も逃さない厳しい攻め合いや、理に合った適切な打突等、日々の修練の成果を十分に発揮した技が多く見られ、あちこちで歓声

が上がっていました。

勝ち残ったチームの観戦をし、日頃お世話になっていた道場の方々や、家族へのお土産を買って私たちの家庭婦人大会は終わりました。

本大会の前に、七月二十九日と三十日の両日、全剣連主催の女子講習会があり、私はその講習会と昨年に引き続き家庭婦人大会に出場させて頂いたことは、大変貴重な体験となりました。稽古もろくにできていない私が参加させて頂く事は、自分自身ためらいがありました。しかし、お断りしたのでは何も始まらないと考え、心身共に負担である事を承知で行かせて頂きました。

今は思うばかりで行動が伴いませんが、時間に余裕がありパワフルに活動できる若い人々や、地道に稽古を続けていらっしゃる家庭婦人の方々にもどんどん色々な催しに参加して頂けるよう、おこがましいようですが、役割を果たす義務があると考えております。その為にも、細々々でも稽古を続けて自分が成長しなければなりません。

私事ですが、一週間に一度の稽古を持続

する事がなかなか困難です。勤務が退けて実家に子供を迎えに行き、帰宅すると稽古が始まる時間。手抜き夕食を子供たちに食べさせ、宿題を抱えた子を家に残して鍵をかけ、気遣いながら稽古に駆け出して行く。片手に防具、片手に子供を抱え、道場をやっとたどり着きます。その上、基礎体力も目に見えて衰えていますから、翌日は足腰が立たないと言っても過言ではありませんでした。十年ぶりに竹刀を握ってみて、体力や年齢に合わせた稽古や試合をする必要があると強く感じました。イメージ通り行おうとすると、無理が生じます。

主婦であり、妻であり、母であり、或いは職業婦人である私たちが家族の負担にならぬよう稽古を続け、修練を重ねていく為には、如何に時間を生み出すか、如何に求める気持ちがあるか、如何に合理的な稽古をするかが課題です。

最後になりましたが、全国大会に出場する為の様々な手続きや、交通・宿泊等過分なる配慮をして頂き、本当にありがとうございました。

インターハイ三位に

入賞して

富岡東高校二年 坪 井 さくら



今年のインターハイから一年。先生や選手たち全員が「全国制覇」を目標にこのためがんばってきた。

まず予選リーグ第一試合は山形の左沢高校とだった。そして今大会最大の山場だった。みんな体も気持ちも緊張しきっていた。その状態でどれだけ練習の成果が発揮できるかが勝負の決めてだった。

試合が始まった。ところがいつもの勝ちパターンにならず、リードされたまま中堅戦を迎えた。ここで流れを変えたいという気持ちが一つとなり、結果は三勝一敗で、見事な逆転勝ちをおさめた。チームワークで最初で最大の難関をのりこえた。つづく第二試合目も本数勝ちで接戦をものにした。そうして、一步一步目標に近づいていった。

決勝トーナメントは予選リーグとは違ってかわって、のびのびと自分たちの剣道ができた。一回戦は選抜大会準優勝校の佐賀学園、準々決勝は昨年の総体三位の東海第四との対戦を勢いでのりきった。

いよいよ準決勝。ここまできたらどの学校も実力伯仲である。「勝負は時の運」という言葉もあるように、どこが勝つかはやってみなければ分からない。試合前、みんなは不思議と冷静だった。もうここまできたらやるしかない。みんなが一丸となって阿蘇高校との試合に臨んだ。だが相手は試合がうまく、思ったような試合はさせてもらえなかった。いくつかわ惜しい場面もあったが、左沢戦のときのようにはいかず、悪いムードをひきずったままでの試合が続いた。そして結果は四敗一分けで、惜しくもここで「全国制覇」の夢は絶たれた。けれども今まで越えることのできなかったベスト八の壁を初めて越えれたことは大きな喜びとして我々の心に残った。とくに準決勝戦前の場内アナウンスで、「徳島県立富岡東高校。」

と呼ばれたとき、なんとも言えない気持ち良さだった。そしてもう一つに閉会式での念願の表彰台に上がったこともあげられる。

この大会中、ある男性が私たちのところに近寄ってきてこう言った。

「私はあんたらの剣道が一番力強くて、一番好きだ。だからがんばれよ。」

試合で勝つこともうれしいが、こう言ってくれる人がいたこともまた違った意味でうれしかった。やはり先生の正しい指導があったのこの言葉に今までの苦勞が少しむくわれたような気がした。

いろんなことがあっての三位入賞だったと思う。それは保護者のみなさん方の応援であり、先生の厳しく熱心なご指導でもある。本当によい経験ができたと思う。そして今度は決勝戦という舞台に向かいがんばっていききたい。

全国教職員剣道大会に

参加して

大将 中尾 誠



教職員大会の選手
団の構成は、個人試
合出場者「幼稚園・
小学校」の部一名、
「中学校」の部一名、「高等学校・高専・
大学・教育委員会」の部一名、女子の部
名の計四名と団体試合出場者五名からなっ
ている。

例年それぞれの部や位置で予選をおこな
い選手決定をしている。今年度も若い年代
では実力伯仲で厳しい予選会の展開となっ
た。ただし、団体戦の大将については、今
年から新たに四十五歳以上の年齢制限が導
入されたことにより、該当者の幅が狭まり
予選の実施が難しくなったため推薦制が採
用された。そのような経過で適格者ではな
く適齢者として私と藤本雅史先生が候補と
なり、監督と大将を分け持つこととなった。

選手決定後の強化練習については、藤本監督の指示に従い県連の稽古場にできる限り参加するようにした。警察関係の先生方には常に稽古相手となっていたべく共に他府県の強化チームの来訪時には声をかけてくださるなど手厚いご配慮をいただいた。

大会前日の八月十日東京入りし早速、開場に向かった。綾瀬にある東京武道館の外見は幾何学的な近代建築であるが内部は黒を基調とした落ち着いた純日本風の仕上げである。ほどよく空調のきいたサバ道場で快適に最終調整の汗を流した。全体的に順調な仕上がりを感じながら宿舎に帰りミーティングを兼ねて夕食をとる。明日のことを考えてか誰も嗜好品は、心なし控えめであった。いよいよ当日を迎える。若い選手は、はりきって早朝から近くの練習開場で稽古に励むも肝心の武道館が開館しない。結局炎天下九時まで待たされての入場であった。開館時刻の不手際もあり開会行事もそこそこに試合開始となった。試合は八コートで個人団体同時進行で行われたので自分の試合に出たり、応援に駆けつけた

り多忙であった。試合結果は左記のとおりで上位進出は果たせなかったが団体強化選手の白木、玉田を核として若い選手が内容のある試合を展開した。それぞれ個性的な剣道で確実に地力をつけており、将来に大

個人戦

○高・大・教の部	1回戦	志田⑦(兵庫)	⊗	-延長	山田⑤(徳島)
○中学校の部	2回戦	青木⑥(宮城)	-	⊗⊗	玉田⑥(徳島)
	3回戦	小林④(和歌山)	⊗⊕	-	玉田
○幼・小学校の部	2回戦	福岡⑤(滋賀)	⊕⊕	-延長	兼松④(徳島)
○女子の部	1回戦	長谷川⑤(岩手)	⊗	-延長	上藤④(徳島)
	2回戦	戸山④(和歌山)	⊗⊕	-	上藤

きな希望を繋げた。

大会終了後は新宿歌舞伎町にて反省会、「黒鳥の湖」の異様な世界を体験した。山田選手などはこの世界に魅せられてしまい今だに抜け出せないそうである。翌日、帰徳は午後の便であったので自由行動となる。それぞれグループで分散したが取り残されたのは、やはり私と藤本監督でさみしい思いをした。傷をなめ合うように二人で渋谷へ行く。「こんなにようけの人間が、どこへいきよん。」としきりに首をかき上げる藤本監督。不夜城の新宿、活力の渋谷など東京ならではの貴重な見聞を広めるとともに互いの親睦を深めることができた。

閑話休題 今

回の結果が示すとうり私たち教職員に必要なことは稽古量の確保である。三木只雄先生がよく

団体戦 1 回戦

静岡	先	次	中	副	大	1 (3)
	板垣	和泉	中野	鈴木	曾根	
徳島	⊗		×	⊕	⊗ ⊗	3 (4)
	長井	佐々木	白木	中山	中尾	

団体戦 2 回戦

山形	先	次	中	副	大	3 (7)
	武井	柏倉	小松	松井	渡辺	
徳島	⊗ ⊕	⊗	⊗ ×	⊗ ×	⊕ ⊗	0 (2)
	長井	佐々木	白木	中山	中尾	

言われる。暇はつくるもの一の言葉に尽きるところと思う。多忙を極める毎日であるが、工夫して時間を生み出し稽古の質を高めなければならぬ。更に本来の任務である指導面においては、生徒の育成を通じて剣道人口の底辺の拡大に努めてきたが近年急速に部員数が減少している。青少年の剣道離れの進行をくい止めるべく、その対応策を真剣に考えねばならない時にきている。日本古来の伝統文化として良さを生かしながら発想の転換等、新しい取り組みでの対処も必要と思われる。以上簡単ですが反省並びに報告とします。

第二十五回全国中学校

剣道大会に出場して

阿南第一中学校三年

横 坂 幸 憲

平成七年八月二十二日、群馬県前橋市民体育館で行なわれた全国大会に出場しました。

開場の雰囲気盛り上がっていく中を緊張しながら二校行進していきました。その間、この日のために苦しい練習を重ねてきた二年半の出来事が頭の中にかんできました。三年生は五人いたが団体のメンバーは、三年生が三人と二年生が二人のチームだった。なかなかチームがまとめられず悩んだ時もあった。そんな時、立川先生は陰から僕たちを優しく見守り、時には厳しく指導して下さいました。先輩たちは四国大会にも出場し数々のよい成績をおさめていた強いチームでした。その先輩たちにおいつこうとがんばってきたのですが、あと一歩のところまでいつも負けていました。それ

が、中学校最後の試合で優勝することができ、全国大会へ出場することができました。

「舞い上がれ、青春の熱気、群馬の空に」をスローガンに開催された全国大会の開場は、ほんとうに選手の熱い闘志がぶつかりあうような雰囲気盛り上がっていました。僕たちも、緊張して入場行進し、あらためて県の代表ということを実感し、来られなかった剣道仲間の分までがんばらなくてはと思いました。

そして、いよいよ試合が始まりました。みんな、大舞台で緊張しているのがよく分かりました。肩に力が入ってしまっと思うように自分の試合ができないまま終わりました。やはり「全国の壁は厚かった。」自分たちの力を思い知らされたようでした。しかし、僕たちはベストをつくしたので悔いはありませんでした。

思えば、ここまでこれたのも、毎日の厳しい練習、休日には遠征に行くなどして技術ともってきたえて下さった立川先生、つきそって下さった保護者の方々に感謝しています。大勢の皆さんの協力の基に勝ち取っ

た全国大会出場は僕の中学時代の最高の思い出です。

僕は、高校に行っても剣道を続けていこうと思っています。これから大きなスランプにおちいるかもしれませんが、この全国大会で得た貴重な体験を生かして、乗りきっていこうと思います。



全日本女子剣道選手権に

出場して

富岡東高校三年 敷田 美紀



高校三年間で一度は出場してみたいと思っていた全日本女子剣道選手権大会の出場権をかけた試合が、徳島県警の体育館で行われました。一戦一戦、気の抜けない試合ばかりでした。苦しいながらも決勝まで進むことができ、決勝では、勝負がなかなか決まらず、延長のすえ、出場権を手にすることができました。

平成七年九月十日、愛知県武道館において、全日本女子剣道選手権大会が行われました。いつもいっしょに練習している陶木さんが防具を持ってきてくれたので、練習相手になってもらい、汗が流れる程度に軽く練習しました。この大会は、三人一組で予選リーグを行い、それから決勝トーナメントという試合形式でした。私の対戦

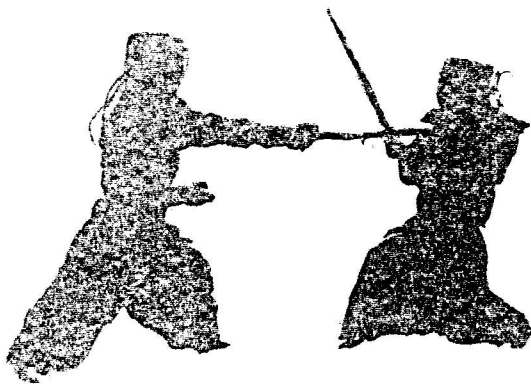
相手は、この大会に何度も出場している神奈川代表の川保選手と、大阪代表の松田選手とでした。試合が開始され心の中では、さまざまなことを考えていたように思いますが、試合が近くなり、試合開場に入った瞬間、緊迫した空気に、のみこまれそうになりました。

試合日は、大阪代表の松田選手と対戦しました。自分の体が思ったように動かず、気持ちと体が、からまいして、一瞬のスキをつかれて面を打たれ、二本目は、一本先取されたことであせってしまい、打とうとしたところを先に打たれました。試合目と二試合目に時間があつたので、もう一度気持ちを入れなおし、あと一試合、全力でぶつかっていかうと思いました。

二試合目が始まり、終了時間まぎわに小手を取られ、取りかえすことができないまま敗れてしまいました。

自分の試合が終わわり、他の選手のすばらしい試合を間近で観戦していて、間合いの攻防や、一瞬でも気を抜くことなく、気迫を充実している姿を見て、感激しました。

結果は二敗で、予選リーグ突破することはできませんでしたが、この大会をきっかけに、もう一度努力し、練習をつみかさねようと思いました。



全国郵政武道大会に

優勝して

徳島支部 木下文江

先ほど、世界柔道選手権大会がこの千葉の地で開催されたばかりで、武道に対する関心と余韻もさめやらぬところで、平成七年十月十四日、千葉県立総合運動場で第二十七回全国郵政武道大会が開催されました。剣道、柔道、弓道合わせて総勢六七〇人の郵政職員が全国各地から、この千葉の地に集まりました。

今年で三十七回目を迎えた今大会。昨年の団体戦は、北海道郵政Aチームが接戦をものにして、四年連続の優勝を果たしていました。四国郵政チームにおいては昨年の成績は、ベスト八に終わっていたので、今年は、是が非でもベスト四進出を果たしたいところでした。

一回戦、二回戦は、なんとか勝ち進むことができて、好スタートを切ることでできました。三回戦は、東北郵政Bチームと対戦

し、二―一と辛うじて勝ち上がることができました。こうして、第一関門を突破し、このまま波にのって、昨年の雪辱を期すべく、ベスト四をかけた試合に挑みました。しかし、対戦した関東郵政Cチームに先行を許し、反撃の糸口をつくる流れを変えるまでに至らず、終ってみれば四―〇の大差で上を付けることとなりました。結局今年も五十二チーム参加した中、ベスト八止まりとなっていました。

しかし、個人戦では心機一転し、順当に勝ち進むことができて、決勝戦進出を果たすことができました。決勝では、関東郵政の畠山選手と対戦し、中盤過ぎ、コテが決まり結局この一本を守り切り優勝することができました。昨年は二回戦で敗退していたので、優勝することができ、とてもうれしく思いました。

結果は、良い成績を修めることができましたが、この大会に出場し、たくさん課題もできました。今、一番注意して直そうと思っているのは、攻め込まれた時つい竹刀を抱えてしまうこ

とです。例えば、避けるにしても避けっ放しで後の技が出ないので、なんとか応じ技を身につけたいと思っています。攻めが伴っていないまま、技だけで応じようとせず、基本打ちでやっている時と同じ技が出せるよう努力したいです。

今や武道は、単に武技を競うためだけのものではなく、技や心の鍛練を通して広く人間形成を目指すものだと思います。最後に、武道を通して培われた心身の力をもってそれぞれの職場で、地域社会の発展に大きな貢献ができるようこれからも精進していきたいと思えます。



第五十回国民体育大会（成年二部）・第16回四国ブロック大会剣道競技に出場して

大将 佐藤 吉邦

四国ブロック大会は、平成七年七月十六日愛媛県武道館で開催され、少年男子・女子と試合が開始され、我々成年二部の試合となり第一試合は、強豪香川県戦である。先鋒北村仁志選手（刑務官）対亀田選手（警察官）は北村選手の一本勝ち。中堅白木洋一選手（教員）対西木選手（会社員）は延長戦でひき面で勝ち。大将佐藤吉邦対國重選手（教員）は延長戦で國重選手の勝ち。私は負けたものの二対一で対香川県戦を制した。この一勝は大きな勝ちであった。二試合目、対高知戦、先鋒北村選手敗け、中堅戦白木選手勝ち、大将佐藤延長で勝ち、対戦成績二対一で勝った。チームとしては二連勝である。三試合目、対愛媛戦、地元・愛媛もここまで二連勝である。先鋒北村選手敗け。中堅戦白木選手勝ち。大将佐藤勝

ち！この瞬間徳島県としてはブロック大会（成年二部）初優勝し、国体出場権を得た感動の一瞬であった。柏原監督も思わず立ち上がった。

初戦の香川戦で先鋒・中堅と連取し制したので、私自身後の試合は楽な気持ちで臨めた。（応援団はヒヤヒヤ思っていたかも……？）ブロック予選を制するには香川県



四国ブロック予選を制して

に勝てば……！と昨夜話したところである。一生の思い出となった。

第五十回国民体育大会（ふくしま国体）友よほんとうの空にとべ！のスローガンのもと、二本松市城山総合体育館で開催された。七月から十月まで九州遠征・近畿遠征等と成年一・二部合同で強化を積み重ね本番に臨んだ。十六日大会当日、あだたらの空は澄みきっていた。初戦は対和歌山県。先鋒北村選手対金田選手、互角の戦いで延長に入って北村選手攻めて入り鮮やかな小手を決める。中堅戦白木選手対秋山選手、教員同士である。終始白木選手優勢であったが、延長二回目、秋山選手の面に旗があり対になる。大将佐藤対里選手、開始早々小手を先取したが、時間終了まぎわに小手を決められ、延長に入り延長四回目、面！を決められた。非常に悔やまれた試合であった。

本年は、人生の中での岐路と言うか大きな節目の通過点であった。ブロック大会。週間後、父親との別れがあり、国体出場を辞退しようかと悩んだが、家族の励まし心

援もあり、父にも生前励まされ期待されていただけに出場を決心した。

不安・緊張・精神面等でいろんな状態があったが、この国体に出場として出場出来たことに誇りを持ち、貴重な体験を生涯忘れる事なく大切に、今後の剣道修行に生かしていきたいと思う。



全日本東西対抗剣道

優勝大会に参加して

西軍大将 大澤 孝 彰



西軍大将に推せんされた時、私の剣道人生でこんな名誉な事は無いと思いましたが、果してこの大役を全う出来るかどうかほんとうに不安でした。しかし、とにかく精進して自分の精一杯の力を発揮すれば良いのだ、頑張ろうと決意し参加しました。

まず、会場の盛岡の岩手県立武道館の立派な事に驚きました。大きさもさる事ながら、この道場で立派な剣道をやろうと言う気持ちにさせる雰囲気を持ったものでした。東北人（岩手県人）の心意気とねばり強さをまのあたり見たように思いました。観衆は、学生が中心でしたが大道場、ばいの人数でした。マナーも良く済済と試合は進行了しましたが八段戦が始まると試合に見入られるように一刀一打に溜息が漏れていま

た。試合は三将戦で西軍の優勝が決まり、私は比較的楽な気持ちで試合にのぞむ事が出来、勝負運が私にあり勝ちを収めました。勝敗は別として充分力が出し切れたように思います。

何百回と言う正式の試合のこれが最後となると思いますが、何とも言えない気持ちですが、又新しい気持ちで剣道に精進したいと思っています。

— 剣道日本11月号 — より抜粋

大将「西」大澤(徳島)◎ 「東」原(東京)

▲明治村大会で2位2回、3位1回の実績のある大澤と、2位1回、3位2回の実績を持つ原。大将戦らしい静かな立ち上がりから、最初に攻めたのは大澤で、中心を攻めてから打突を繰り出す。二太刀目、大澤がメンを打つと見せてからコテに変化すると、これが見ごとく決まる。二本目開始後、今度は原が跳び込みメンに伸びるが、大澤はこれを切り落とし、振り向きざまに

ひきメン。決まりはしなかったが、大澤が技の多彩さを充分示す展開を見せる。さらに、大澤が一足一刀の間合から大きく跳び込みメンに伸び、原もメンを合わせた。大澤のメンがとらえた（写真）、ように見えたが旗は一本のみだった。このシーンに会場はしばらくの間どよめきが収まらなかった。ほどなく時間切れとなったが、品格も充分に感じられた大澤の試合ぶりが大会を締めた。



第四十三回全日本剣道選手権大会に参加して

警察本部 吉田博文

「テレビに映るまでがんばれ。」
これが、大方の人からいただいた激励の言葉だった。

テレビに映るといふことは、準々決勝まで勝ち上がらなければならぬ。私はその言葉を自分の目標とし、大会に臨んだ。

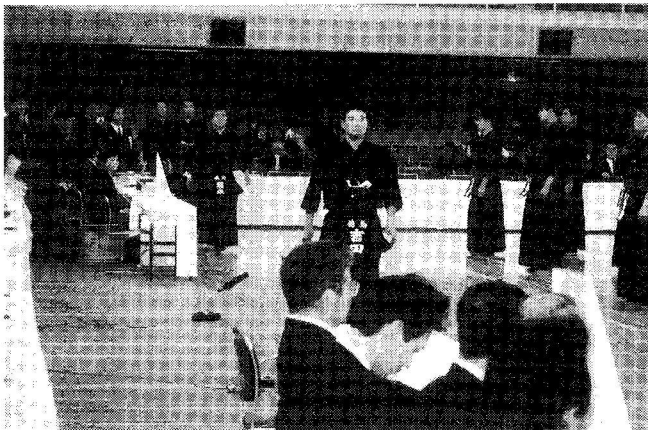
私の一回戦の対戦相手は、奈良県警の田口六段。彼のどっしりとした構えから繰り出すオーソドックスな剣道は全国でも定評があり、まさに「柳生の中し子」という感じだ。奈良県警と言えば、カ月前の十月に行われた全国警察剣道大会で悔しい思いをさせられている。「よし、今度こそ！」とばかり私は、奈良漬けをたらふく食って「相手を呑む」という戦略をとることにした。

十一月三日、この日は全国的にも一番晴れる確率が高い日だ。その統計どおり、東

京の空は地球の外側が透けて見えそうなくらい晴れ上がっていた。

「ドーン、ドーン、ドーン、……」

午前九時三十分、武道館いっぱい響き渡る太鼓の音で入場行進が始まった。第四十回、第四十二回大会に続いて三日目の出場となる私は、電光掲示板に映し出される自分の顔写真を見上げながら落ち着いて行進することができた。



徳島代表として入場行進

昭和五十九年から始まった段位による出場資格制限が終わりを告げ、試合規則も新しくなった。その意味で、誰が勝つか以上に、試合の内容がどうなるかが注目されるこの大会。試合を前にしての選手たちの顔は、闘志に満ちあふれていた。

私の試合は第二試合場の第四試合である。開会式を終えるとすぐ、試合の準備をして会場に入った。

「はじめっー！主審佐藤成明範士の声で試合が始まった。

赤・奈良県田口六段×白・徳島県吉田六段。田口選手は、剣先をやや低めにして、多彩に技を繰り出してくる。私はとにかく手元を上げないようにして機会を狙おうと、妙に落ち着いていた。試合開始四分、それまで小手を中心に攻めていた私は、思い切った面に出た。私の竹刀は田口選手の面金を捉えたが不十分、有効打突にはならなかった。試合は五分を経過し延長戦へ。延長二回、開始間もなく田口選手は遠間から大きくかついで面に来た。虚をつかれた私はこの面をのけ反って躲そうとしたが、釣竿の

ように伸びてきた相手の竹刀は、私の面金を痛打した。赤旗三本。この時点で、私の目標はもろくも崩れ去った。

私は、結果を意識し過ぎていた。私は、負けることを恐れ、また、勝つことをも恐れていたのだ。私のこの試合で、徳島の剣道のレベルを問われることになるかもしれない。恥ずかしい試合はしたくない。そんな思いがプレッシャーとして私の肩にズシりと重くのしかかっていた。精神的にもっと強くならなければ……。一試合を振り返りながら、私はプレッシャーがとれて軽くなった身体をシャワーで洗い流した。

大会は、大阪府の石田七段が、三年ぶり二度目の優勝を飾った。

閉会式が終わって会場を出ようとする時、何人かの少年剣士から「ここにサインしてください。」と面タオルを差し出された。不甲斐ない試合をした後だっただけにどうしようかと迷ったが、少年たちの真剣な顔付きを見て、自分の名前を書かせてもらった。名前を書き終えると、一人の少年が「僕も大人になったら、絶対選手権大会に

出ます。その時は僕と試合してください。」と健気な言葉を投げかけてきた。全日本剣道選手権大会。剣の道を志す者なら一度は出場してみたいと思うだろう。打ちひしがれた気持ちになっていた私は、この少年にムチを打たれた。私は、この少年の願いをかなえてあげることができないにしても、また来たい！十一月三日、もう一度日本武道館で試合をしたと思った。

自分の可能性を信じて……



第十七回全日本高齢者 武道大会

徳島県高齢剣友会理事長

西野 四郎



平成七年六月五日
(月) 日本武道館に
於て、第十七回全日
本高齢者武道大会が、

剣道二九四名・銃剣道一六名・なぎなた
二八名・計六三八名が一同に会し、太
鼓の合図で華々しく開幕された。

開会式典が終了し、演武の先陣を担い、
図らずも全日本高齢剣友会からの要請を受
け、徳島県より日本剣道形を、打太刀勝浦
守範士七段・仕太刀西野四郎教士七段が、
日本武道館の檜舞台で晴れがましくも披露
する機会を得、恙なく演武することが出来、
感慨無量のものがありました。

日本剣道形はさきに、昭和五十八年六月
の第五回大会で打太刀故清原栄教士七段と
仕太刀中川虎雄教士七段がご披露されてか



第17回全日本高齢者武道大会 日本剣道形
打太刀 勝浦 守 範士七段
仕太刀 西野 四郎 教士七段

ら二回日のことであります。

これまでの主な戦績としまして、昭和六
十三年第十回の記念大会でA組の勝浦守七
段が決勝戦で京都杉本茂七段(第七回大会
の優勝者)を一对一のあと二本目を得意の
メンを決め、初の全国制覇を遂げました。

また、平成四年第十四回大会では特組平岡
竹雄七段が千葉県の二刀流押本孝一七段を
二度の場外反則を誘う、技らしい技の無い
まま時間切れ反則勝ち、大会初の反則勝優



第17回全日本高齢者武道大会
A組優勝 遠藤一美

勝を飾りました。

以来三年目の本大会で遠藤一美七段がA
組で埼玉県高崎慶男七段と決勝戦で対決し、
メンとコテ鮮やかなストレート勝ちで三人
目の全国覇となり、徳島高齢剣士の名声を
博すことが出来ました。また同じA組で早
川一也七段が四コートで一位となり、準優
勝高崎慶男七段と決勝進出にかけて、喰い
つ喰われつの大接戦の末、惜しくも敗れ三
位となった。(注 高崎先生は毎年徳島大

会にお越し下さって深く親交のある方)

尚、A組吉田租七段は一コートの決勝戦で東京の伊藤隆一先生に敗れたが、A組の最高齢者として敢闘賞に選ばれました。

残念ながら、寿組・特組・B組では十分な成果をあげることが出来なかったが、過去には昭和五十九年第六回大会では今は亡き清原栄七段がA組で、そして遠藤一美七段が平成四年第十四回大会で平岡先生が優勝した本大会で、それぞれ準優勝している。

三位入賞者には故阿部国太郎(当時八十八歳)・熊本淳一・蝦名久作・西野四郎の各七段が入賞している。

このように、徳島高齢剣友会が大いに活躍している陰には、東京大会に備え有志五六名が必ず大会前日二日位には上京し、野間道場・三菱道場・西山道場へと出稽古に参加し、多くの先生方と剣を交えご指導を受けているが、今では試合もさることながら各道場を訪れ稽古することを生き甲斐にしていることが大きい。

第八回全国福祉祭

島根大会に参加して

名誉会長 三木 只雄

ねりんピック95しまねは「ひろげよう 神話の里から 長寿の輪を」をテーマに十月二十一日より二十四日まで行われた。競技種目はスポーツの部で十七種目、その他囲碁将棋等、三種目にて、参加団体は四十七都道府県と政令都市の十二市にて、参加選手凡そ七千三〇〇名、外各役員係等を加え八千名余りで構成されている。一般の国体に近い人員で盛大に開催されており、このような催しに参加出来て光栄に存ずる次第であった。

本県では十月二十日十時より、県庁の講堂にて結団式が行われた。十一時、役員選手外連絡員等にて構成された一五〇名余りが、四台のバスに分乗、一路神の国島根へ出発、夕六時頃着、一同皆生温泉東光園にて宿泊、温泉につかり、明日よりの活躍に備えた。



二十一日十二時より、総合開会式には国体に準じた式典が行われ、常陸宮御臨場により厳粛盛大に挙行され、感銘した。総合開会式終了後は、各競技種目の競技場へ向い、吾々剣道は会場が東出雲町立体育館のために、宿舎は玉造国際ホテルで宿泊した。剣道の参加チームは各都道府県と政令都市にて五十八チーム(島根は二チーム)、人員は約三七〇名であった。明二十二日よりは交流試合が行われた。試合方法は第一

回予選はリーグ形式で始まり、本県は島根Aチームと北九州市チームで試合が行われ、第一試合は北九州市チームと対戦、各選手ともに良く健闘されたが、一ポイントの違いで残念ながら惜敗の憂き目を見た。

二試合目は地元島根Aチームと対戦、三名が引分けであったが、この試合もまた僅か一本で残念ながら惜敗。島根Aが決勝トーナメントに進出し、結局島根Aが優勝された。いずれの選手も流石長年の間修練された方ばかりで技倆は紙一重の違いの様に受けられた。小生の感じたことは、何れの試合も失礼な見方が負け惜しみではないが、いわゆる様に審判負けであった様に感じられたが、仕方のないことであつた。

いずれに致しましても選手各位は大変健闘して頂き敬意を捧げ、重ねて感謝する。会場の設営なり運営には島根県の大変な努力をさ

れていて立派な交流大会が出来たと感じした。いつの口かまた本県でもこの大会が廻つて来るであろうと存じ大変だと思ふ次第である。

終わりにりましたが、剣道連盟より多額の御芳志を賜り厚く御礼申し上げます。報告の一端と致します。また、小生剣道開始式典に特別表彰の次第があり、望外にも高齢者賞の筆頭で受賞し感銘致したことも申し添えさせていただきます。



高齢者剣友会報告

徳島県高齢者剣道交流大会

株 木 芳 夫



平成七年度に徳島県下で行われた高齢者関係行事を以下に報告する。

一 第十回高齢者剣道交流大会

(平成七年四月十五日)

- (一) 日本剣道形
打太刀 早川 一也七段
仕太刀 株木 芳夫六段
- (二) 居合道
英信流 平尾 勝美八段
英信流 野口 直之七段
- (三) 宣誓
中山 啓男七段
- (四) 団体試合
優勝 阿南支部B
準優勝 徳島支部B
三位 徳島支部A
〃 海部支部

(五) 個人試合

A組優勝 早川 一也

準優勝 吉田 租

三位 前林 利雄

〃 松本 英雄

B組優勝 株木 芳夫

準優勝 南 充美

三位 高田 豊

〃 菱田 晋

C組優勝 中山 啓男

準優勝 佐々木武夫

三位 雄西 義春

〃 森川 澄

午後三時終了し、四十分間の稽古会、五時より懇親会、東京・高知の先生方も交えて交流、七時にお開きとした。

二 第三回健康福祉祭

(平成七年十一月十一日)

九時から吉野川運動場で開会式を催され、徳島支部より参加していただく。大会の準備は他会員によって行う。吉野川での開会式が終わってから、剣道の開始式、大会長の挨拶、団体試合、個人試合とつづく。宣誓は阿南支部の中山選手。日本剣道形は阿

南支部の若手有賀六段と西

岡五段。団体試合で優勝は

阿南支部コスモス、準優勝

は阿南支部さくらと例年の

通り、三位は徳島支部A・

徳島支部B。個人試合はA

組、優勝遠藤一美先生、準

優勝早川一也先生、第三位

浜田逸郎先生、同蝦名久作

先生。B組優勝中山啓男先

生、準優勝高下正義先生、

第三位橋本武先生、西岡侃

先生。

午後三時すぎ、全日程を

終了した。

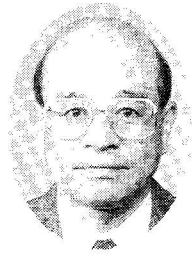


大会所感

眉山杯に想う

徳島大学剣道部顧問

馬場紀臣



大相撲ファンは、九州場所になりますと、「ああ、いよいよ今年ももう僅かだ

な」と年の瀬の到来を感じますが、私たち徳島の学生剣道界にとりましては眉山杯大会がこれに当たります。ご承知のように、この大会は、当時医学部剣道部の顧問であられた勝沼先生が、大学院も含めて徳大学生ナンバーワンの剣士の座を目指して競うようにと、医学部剣道部OBの方々のご協力のもと、始められました。昨年で早14回を数えます。徳大医学部は、普段は威本と常三島の二つのキャンパスでそれぞれ「医

学部」、「全学」剣道部として活動しており、したがって私は実質的には「全学」のみの顧問です。剣道は全くの素人で、観戦も四国インカレが時々程度ですが、眉山杯大会だけは会場が常三島ですので毎回欠かしておりません。

第5回までは設立の趣旨通り、徳大生だけで争われました。記念すべき最初の覇者は達富君と林さんの全学コンビでした。達富君はユーモアを解し、今年の年賀状には「本年もますますいい男に成長いたしますのでご指導お願いいたします」とありました。林さんは山陰出身の優しいお嬢さんでした。第2・3回連覇の倉都君（医）は、

同学年の達富君等とよきライバルで互いに競い合い、彼らでひとつの時代を築きました。第4・5・6回三連覇の久保君（医）の決勝戦の相手はいずれも全学の主将を勤めた強豪で熱戦でした。特に、最後の西山君との激戦は、大会史上最も強く印象に残っております。

女子は男子と同様第2回から第5回まで医学部勢が連勝します。第6回から文理大、

四国女子大（現・四国大）が加わり、文理大の住友さんが優勝、以後第11回の糺谷（医）さんを除いて女子は文理大が独占します。なかでも第9・10回の八幡さんの連覇が光っています。

第7回から鳴門教育大も参加し、徳島県大学剣道選手権大会と併称するようになります。この年、女子の阿部さんと並んで男子も文理大の兼近君が制し、14回中唯一の徳大以外の男子優勝者となりました。第8回以降男子は第12回の山本君（医）を除いて全学勢が独占。第11・13・14回の覇者川上君（現・院生）は、最後となる今年、三連続四度目の優勝を賭けます。

振り返って第一に感じますのは参加者の増加とそれに伴う各大学の充実です。昨年は実に男子59名、女子33名、特に文理大男子の着実な増加傾向には目を見張りました。四国大女子は元々伝統があり強いですが、共学化から5年目、男子も今後大いに期待されます。鳴教大も木原先生をお迎えして男女ともますます精悍さと勢いが感じられます。素人の興味本位の観点からですが、

男女それぞれ徳大と文理大の長い連覇を是非打破して欲しいものと念願しております。

合同稽古後の懇親会は毎回文字通り賑やかな楽しい雰囲気です。宴たけなわの頃

「先生、○○大の△△君と□□大の◇◇さんは交際中ですよ」などのニュースを耳にしますと、ヘルマン・ヘッセではありませんが、まさしく『青春は美し』を実感いたします。

将来、会場を持ち回りにし、4年に一度各大学が主催すれば、在学中に全大学の大会に参加できますので、学生にとって、卒業後の「眉山杯」の思い出も一層多彩化し、深まるであろうと夢想しております。

富岡東高校の監督として

——女子剣道部を導いて——

監督 河田 清実



私が富岡東高校へ赴任して、はや十二年間が過ぎた。この十二年間に、女子剣

道部が出場した、四国大会、インターハイ、全国選抜大会、全日本女子選手権大会と監督として出場した国体について、それぞれに試合の内容と結果について、振り返ってみたいと思う。

〈昭和五十九年度〉 年日の県高校総体で、

一・二年生だけでチームを組み、とても優勝できるとは思っていなかったのだが、運よく優勝することが出来た。しかし、四国大会の初日に、他県の二位・四位校に敗れ、勝二敗で予選リーグ落ち、この時は大変悔しくて、四国の壁の厚さをしみじみと感じた。しかし、この敗北で四国大会で優勝するという大きな目標が生まれた。またその年の秋田県で行われたインターハイに初

めて出場し、生徒達と試合会場の畳の上に戻り、生徒の試合を見ながら、私自身もすごく緊張した。果たして、自分の生徒の打突に審判が旗を上げてくれるのだろうかという不安でいっぱいだった。最初の一本の旗が上がった時の感激は今でも忘れる事ができない。結果は二校が、勝一敗で並び、

資料1 女子四国選手権大会成績（昭和59年～）

年度	団体	個人		
		1位	2位	3位
昭59	予選リーグ			
60	第3位			
61	予選リーグ			
62	優勝	楠 正代		
63	連覇達成			近藤加奈子
平元	連覇達成	近藤加奈子		山上 陽子
2	連覇達成			小籾 香
3	準優勝			小籾 千鶴
4	優勝			
5	準優勝			大城 夏子 猪尾 満紀
6	優勝	猪尾 満紀	陶木 りえ	敷田 美紀
7	連覇達成	坪井さくら	敷田 美紀	

※四国大会で3連覇すると四国高体連の会長より表彰される。四国大会で男女を通して3連覇を成し遂げているのは、富東の女子1校だけである。

資料2 富岡東女子インターハイ成績（昭和59年～）（12年間）

年度	団体	個人		備考
		県1位	県2位	
昭59	予選リーグ			
60	(川島高出場)			
61	ベスト16	林 1回戦	国見 1回戦	
62	ベスト8	林 第3位	河野 1回戦	優秀選手 林 美枝
63	ベスト16	近藤 2回戦		
平元	ベスト8	田上ベスト16		
2	予選リーグ	小籾香 3回戦	浜田 1回戦	
3	(富岡西出場)		小籾千ベスト8	
4	ベスト16	小籾千ベスト16	山崎 1回戦	
5	ベスト8	大城 3回戦	酒巻 2回戦	優秀選手 大城 夏子
6	ベスト8	猪尾 3回戦	陶木 3回戦	〃 坪井さくら
7	第3位	坪井 3回戦	敷田 3回戦	〃 敷田 美紀

※優秀選手は女子で団体、個人の出場選手から10名選出される。

本数差でトーナメントへ進出できなかった。
 〈昭和六十年年度〉総体では、前年度と同じメンバ―で臨み、ライバルの川島高校と引き分けになり勝者数で二位になり、生徒と共に悔し涙を流した。しかし四国大会では、二連覇した高松第一に大将戦で敗れたもの

の三位に入賞することができた。最初の数年間は川島高校が最大のライバルであり、川島高校に追い付け、追い越せの信念でやっていた。また全国大会がインターハイのみだったので、県予選の十日ぐらい前からは緊張感が増し、大会期間中は、市内の松鶴という旅館に二泊するのだが、何度も目がさめて眠れない夜があった。インターハイへ出場するというのは、生徒のみならず指導者にとっても最大の目標であり、夢だと思ふ。

〈昭和六十一年年度〉インターハイでは、予選リーグ一勝一敗であったが、勝者数でベスト16に進出することができた。大会の二日目に出場する事が出来るということで、生徒と共に感激して宿舎に帰った事を思い出す。決勝トーナメントでは、前年度優勝のPL学園に5対0で完敗した。しかし、四国の他の三チームは予選で敗れていたもので、初のベスト16という成績に胸を張って徳島へ帰ってきた。

〈昭和六十二年年度〉四国・全国大会で、富岡東の名を知らしめるための口火を切った年であった。地元開催の四国大会では、大

將に巧者・林美枝を擁し、念願の初優勝、県勢としても、第三回大会の脇町の優勝以来十八年ぶりの優勝であった。決勝戦では、強豪・高松南と対戦し、一対二とリードされ敗色の濃くなった副将戦で2年生の桶がみごとに二本勝、大将戦でも林が二本勝ち、最後の引き面が決まった瞬間の感激は今でも鮮やかに思い出す事ができる。講師で赴任していた上田先生と、監督席で手を取り合って感涙した。

資料3 全国選抜大会成績

年度	回	団体	備考
平3	1	(川島高出場)	
4	2	第3位	優秀選手 酒巻 裕美
5	3	第3位	〃 陶木 りえ
6	4	ベスト16	〃 坪井さくら
7	5	予選リーグ	優勝校 熊本・八代白百合高に惜敗

※平成3年3月に第1回大会が開催された。
 ※優秀選手は全出場選手の中から10名が選出される。

個人戦でも桶正代が優勝し、忘れられない大会となった。また、北海道の砂川市で開催されたインターハイでも、関東の強豪・埼玉栄などを倒し、初のベスト8入りを果たした。個人戦でも、林が見事に三位に入賞し、十人しか選ばれない優秀選手に選ば

資料4 国民体育大会の成績

年度	団体成績	出場選手数5名中	四国順位	備考
平成2	2回戦	4名	2位	監督として出場
3	1回戦	3名	1位	〃
4	第5位	3名	2位	〃
5	2回戦	4名	2位	〃
6	第5位	5名	予選なし	〃
7	第3位	4名	1位	〃
8	2回戦	5名	1位	〃

※平成元年より少年女子の団体が開催された。
 ※四国ブロック予選を実施し、上位2県が出場できる。
 7回連続でフル出場している。

が相手の大将を攻め込んで、惜しい打ちを何本も出したが、惜しくも敗れてベスト16にとどまった。またこの年から全日本女子選手権大会の県予選に高校生の4人の参加が認められ、県総体のベスト4の生徒が出場できることになり、三年生の楠正代が見事に代表権を手にした。本大会では、4人1組のリーグ戦でリーグ一位が決勝トーナメントに出場できるが、トーナメント進出はならなかった。さすがに、各県、各分野

れた。
 〆昭和六
 十三年度〆
 四国大会
 で連覇し、
 赤穂が開
 催された
 インター
 ハイでは、
 強豪・高
 千穂高校
 と大接戦
 になり、
 代表戦で
 大将の楠

のトップ剣士ばかりの大会で、レベルの高さを痛感した。
 〆平成元年度〆四国大会で、男女を通じてまだ達成されていなかった三連覇を達成した。ライバルの高松南との決勝戦で、先鋒が二本負け、次鋒が一本先取された時は、もうだめかなと思った。しかし時間前に取り返し、逆転勝ちし、中堅・副将と勝ち、念願の三連覇を達成した。個人戦でも、近藤が優勝、田上が三位に入賞した。丸亀で開催されたインターハイでは、順当にベスト8まで勝ち上がったが、この年三連覇を成し遂げたPL学園に、歯がたたなかった。個人戦では田上がベスト16に進出した。また、この年から、団体に少年女子の部が設けられ、ブロック予選が徳島で開催され、富東生4名と富西の吉岡でメンバーを組み二位で出場権を取り、北海道の国体へ出場したが、2回戦で惜しくも敗退した。全日本選手権も、田上陽子が出場したが、予選リーグ突破はならなかった。
 〆平成二年度〆四国大会で四連覇を達成した。個人では小籾香が三位に入賞した。インターハイでは、予選リーグの初戦で、副将がコテを打って倒れた。女子の場合は倒

れた時点でヤメをかけなければならなかったのだが、主審がそのコテに旗を上げ、そのまましばらく上げていたのを、副将が見て、一本になったと思い、起き上がって開始線に帰っていたところを、横から面を打たれ、不運にも三対二で敗れ、予選リーグで敗退した。国体ブロック予選では、大接戦になり、香川との代表線で小籾が勝ち、一位で出場した。

〆平成三年度〆平成五年に開催される東四国国体の強化指定校を受けて、国体候補選手が入学してきて、二年半後の本番に向けての強化のスタートを切った。四国大会では、決勝戦の高松商業戦で、対二とリードされた大将戦で、逃げ切ろうとする相手の大将を小籾香が追い詰め、苦しまぎれにコテを打って来た所を、見事に打ち落とし、面を決めたかに見えたが、主審が取り消し、それにつられて副審も上げかけていた旗を降ろし、もう一人の副審の旗一本に終わり、惜しくも五連覇を逃した。あの打ち落としは、今思い出しても、見事な打突であったと思う。インターハイ予選では、個人戦の準々決勝で大黒柱の小籾香が負け、団体戦でも決勝リーグの初戦で富岡西に敗れ、

資料5 全日本女子選手権大会出場者

年度	出場選手名	成績
昭63	楠 正 代	予選リーグ
平元	田 上 陽 子	〃
2	(楠 正代) 大阪体大	
3	小 籾 香	予選リーグ
4	(吉 岡 久美子)	
5	大 城 夏 子	予選リーグ
6	坪 井 さくら	ベスト16
7	敷 田 美 紀	予選リーグ

※昭和63年度から県予選に高校生4名の参加が認められるようになった。平成6年度からは総体の個人ベスト8クラスの生徒の参加が認められている。

6連覇ならず。悔しい年であった。しかし、インターハイの個人戦で小籾千鶴がベスト8に進出した。また、この年から全国選抜大会が開催された。この大会が始まるのを心待ちに待っていたが、県予選で川島高校に敗れた。国体では、小松島の谷本、富西の吉岡がメンバーに入り、北海道・富山を敗り、初の五位に入賞した。監督として、全国大会で表彰式で表彰されるのは初めてだったので、感激を味わった。全日本女子にも小籾香が出場した。

〈平成四年度〉四国大会で五回目の優勝を飾ったが、個人戦は上位入賞は成らなかつた。

た。東四国国体の前年だけに、ブロック予選突破に不安を感じた。高千穂のすばらしい武道館で開催されたインターハイでは、埼玉栄・作陽を倒してベスト16に勝ち上がったが、準優勝校の鹿児島県の神村学園に敗れた。国体のブロック予選では、来年の国体選手候補の大城や一年生の猪尾を加え、何とか二位で出場を果たした。新メンバーとして出場した第2回の全国選抜大会では、国体強化選手で臨み、前年度インターハイ・国体・選抜と三冠を達成していた山形の左沢高校などを敗り、全国大会で初の三位に輝いた。国体を半年後に控えて、いろんな意味で価値のある入賞であり、喜びも大きかった。優秀選手に酒巻が選ばれた。

〈平成五年度〉四国大会では、選抜大会三位のメンバーで臨んだが、あと一歩で優勝を逃がした。個人戦で、大城と猪尾が三位に入賞した。インターハイでは、決勝トーナメントの一回戦で強豪・高千穂と対し、先鋒、次鋒と敗れ、負けを覚悟したのだが、後ろ三人が勝って、大逆転勝ちをした事だと思ひ出される。あの試合の感激は大きく心に残っている。優秀選手に大城が選ばれた。地元開催の国体では、打倒阿蘇を目標に優

勝だけを目標に生徒達と共に頑張ってきたのだが、不運な事故もあって五位にとどまった。しかし、総合優勝をすることができて、ホッとしたところもあった。新チームで出場した全国選抜大会では、予選リーグで昨年度三冠で無敗の阿蘇と対し、一対一の本数勝ちで勝った。九十九%負けると思っていたので、喜びも大きかった。二回連続出場したこの大会で、前年度、選抜・インターハイ・国体の三冠を達成しているチームを連続で敗ると言うジンクスのようなものが出来た。昨年度に続き三位に入賞し、陶木が優秀選手に輝いた。全日本女子選手権には大城が出場したが、二勝一敗で惜しくもトーナメント出場を逃した。

〈平成六年度〉次鋒に一年生の坪井を擁し、圧倒的な強さで四国大会では他を寄せ付けなかった。決勝戦は選抜で三位の高松南と三位同志の対戦となったが、四対一で完勝した。個人戦でも、優勝・猪尾、二位陶木、三位敷田と富西の大坂と上位を独占した。インターハイでも順調に勝ち進み連続でベスト8まで進んだが、優勝校の長崎西に惜しくも敗れた。優秀選手に坪井が選ばれた。国体のブロック予選も富西の大坂を加え庄

勝し、本大会では強敵、福岡などを敗り、三位決定戦ではその年の選抜の準決勝で長崎の大村に敗れ、インターハイでは長崎西に敗れていたもので、その合同チームの長崎に四対一で勝ち雪辱を果たした。また、前年度の地元国体の無念を晴らす事が出来て、コーチの本田先生と感涙した。全日本女子選手権大会では坪井が出場し、強敵を大接戦の末下し、三戦全勝でベスト16入りを果たした。決勝トーナメントでは惜しくも敗れたが、高校生としては、すばらしい活躍であった。

〈平成七年度〉四国大会が地元徳島で開催され、連覇を果たした。個人戦でも、優勝坪井、二位敷田と独占した。インターハイでは、予選リーグで強敵左沢高と対戦し大接戦の末、逆転で勝利した。その勢いでベスト4まで圧倒的な強さで勝ち上がったが、準決勝で、阿蘇の試合運びのうまさによられた。中堅戦での、一本の判定の不運もあったが、完敗した。しかし、インターハイで初の三位に人賞でき、表彰台に上がった時の感激は大きかった。優秀選手に敷田が選ばれ、選抜大会と合わせ、三年間に連続し



て六名が優秀選手に選ばれた。国体では、単独チームでブロック一位で出場し、初戦で、優勝した熊本チームに、先鋒・次鋒と勝ち、中堅戦も終了間際まで一本先取して、九分九厘勝ったと思ったが、取り返されて、二対三の大逆転で敗れた。あの時の悔しさは、その後何日間忘れられなかった。全日本女子選手権は敷田が出場した。この年は出場選手の総数が増加したのに伴い、三人一組の予選リーグに変わっていた。

以上この十二年間の女子の試合の結果と

内容を振り返って書いたが、監督として多くの大会に出場し、たくさん人の感激や、悔しさを味わった。そして、この次は、この次こそという思いで、生徒達と共に稽古に励んできた。指導の基本方針としては、気剣体の一致に重点を置き、特に、足さばきと、左手の使い方を特に強調して指導してきた。練習試合に行っても、そのことしか言わない。そこが出来れば自然に勝てるんだと。もう一つは、生徒と共に汗を流すこと、間合、攻め、防衛、打突の機会等、一対一で生徒に伝えた。薄い紙を毎日一枚一枚重ねているんだというつもりで一人一人と稽古を続けた。

これから先も、より一層稽古に励み、さらに上を目ざして頑張ろうと思っている。この原稿を書いている時も、二週間後に出場する選抜大会の事で頭がいっぱいである。最後に、これまでやってこれたのも、多くの先生方や指導者の方々、また生徒の保護者の方々のはかり知れない御指導と御援助があったことは言うまでもない。改めてお礼を申し上げる次第である。

随 想

剣道あれこれ 若人へ

・ 剣連副会長 高 下 正 義



教職を去って十年、今年で七十歳になりますが、農林業、地域の世話役、剣道と

案外忙しい日々を過ごしております。長い間の職場での雑事や周囲の環境の変化もありましたが、剣道を続けておって良かった、と痛感しております。次々と展開される新しい剣道行事とかかわり、本当に生涯を通じて、人生を楽しく、気持ちの上で豊かなものにしてくれたと、剣道に感謝をしているこの頃です。

私は昭和十四年、旧制麻植中学に入學し、横田武文先生の指導を受け、剣道を始めました。戦時中でもあり、毎日練習に熱中し、

県大会では低学年高学年共に団体優勝し、当時の仁科校長が校長室で親子井をご馳走してくれた事を覚えております。同級生には美馬政雄先生が、今も尚、剣道の現役で頑張っております。

その後進學し、昭和二十年敗戦、剣道禁止され、二十七年撓競技として復活、阿北高校在任中、余暇を見ては校庭の片隅で、稽古着に運動靴で練習を始めました。三十年頃、川島高校の旧剣道場が阿北高校へ移転され、その落成式に森本義男先生がよく切れる貞剣で剣道形をし、手に汗を握る思いをしたことがありました。地元の坂本裕二先生から、八幡道場への稽古会の案内をいただき、時々参加しましたが、阿波郡の古老の先生が「高下君は剣はよく遣うが、右手が外向になっている。誰も言ってあげる人はいんかのー」と言っていたと言うことを聞き、それからの稽古には手を内にしぼり、左腰を前に出すよう注意して、自分の欠点をなおすよう努力しました。

約十年余り、毎日四時には仕事をやめ、部活動の稽古に専念しました。分校のため部員は少なかったのですが、広島での全国高校大会に男女個人戦に出場、四国高校大会では男子個人三位、女子団体戦に二回出場の成績をおさめたこともあります。

次に学校剣道連盟とのかかわりでありましたが、四十七年頃から五十五年頃まで徳島県学校剣道連盟の理事長として、教職員の練習会の開催（毎週土曜日、徳農か徳商で）、教職員全国大会・四国大会の予選会の開催などの行事を行いました。選手並びに監督として、全国教職員大会に十回、鹿児島から青森まで全国各地へ参加し、県内外の教職員の方との交流が出来、懐かしい思い出となっております。

また最も感慨深く、今尚、体が引き締まる思いがするのは、高校全国大会の審判に参加しての思い出であります。滋賀、愛知、高知、鹿児島、秋田の大会に参加しましたが、大会前日は審判講習、第一日から四日間、朝は六時から七時まで審判員の朝稽古、八時宿舍出発、夕方五時まで審判、八月上

旬の暑い時であり、汗が顔から手の先まで流れるのを覚える時がありました。全国各県から団体一位、個人一・二位が参加しているのです、正確な審判をするには、本当に緊張の連続で勉強になったと思っております。審判員相互の親睦、関係者の方々との懐かしい思い出が脳裡をかすめます。

次に、若い人へのメッセージとして、

一、成長する若い時に鍛えれば強くなる
私は稽古がよく出来たのは、三十八歳からで、剣道が充分できなかった時代が惜しまれます。四十歳になって、剣道のできない日は木刀で三〇〇回素振り、また腕を強くするため、毎夜寝る前には腕立て三〇回、必ず実行しました。腕の力は強くなり、当時七〇〇gの竹刀を使って重いとは思わなかった。中学・高校の若い間は、体も成長すると同時に、剣技の上達も速い。剣技と共に基礎体力の強化にも力を入れてほしい。

二、剣道を楽しむ勉強すること
剣道即スポーツではないが、スポーツ良いところは、規則を守って精一杯力を尽くし勝敗を決することです。剣道も勝敗があ

るから興味が湧く。勝つから面白い。苦勞も勝てば消える。そうかと言って、試合に勝つことのみがすべて、との考えでは剣道の本質から外れます。楽しく稽古するうちにも、常に剣技の錬磨を通じ、立派な人格向上を目ざすことを忘れてはいけません。

三、生涯剣道を忘れない

人間は本業以外に興味とは、スポーツなど何か自分を集中できるものを持ちたいものです。幸い皆様は剣道に志を持っておられることでもあり、進学しても、就職しても、周囲の事情が許せば剣道を続け、強い体力と、清々しい気持ちで、勉強なり仕事に取り組んでほしい。毎年高知で西日本勤労者大会が開催され、広い地域から多くの若い剣士が参加しておりますが、県外・県内の行事には進んで参加してほしいものです。「継続は力なり、能力は努力にあり」と言われておりますが、余暇には剣道を続け、心身共に健康で、豊かな人生を築いて下さい。剣道を愛する皆様一人一人の心の中に剣道への情熱を絶やさないうよう願ひてやみません。

東四国国体を剣連の宝に

剣連副会長
県議会議員

遠藤 一美



平成八年度を迎え、徳島県政も二十一世紀に向けて力強く歩み初めました。

ここで、私達の忘れてはならない、そして、まだ心の奥深く、きざみ込んでいるのは、あの第四十八回国民体育大会（東四国国体）秋季大会であります。一九九三年十月二十四日、天皇陛下をお迎えして、鳴門市総合運動公園陸上競技場で、華やかに開幕されました。各種目の競技会場へと参加された全国のひとのふれ合いの喜びと、スポーツの感動を胸に、そして郷土の名譽をかけて頑張ってきました。この思い出は終世忘れることの出来ない貴重な財産として、これからも更に次代の皆様に申し伝えなければならぬと思います。

そこで我が徳島県剣道連盟の剣道を取り上げても、徳島県の特技でありますだけに、

剣 風

徳島支部長 馬場 力

小・中・高校生の皆様に充分受け継いで頂きたいものです。あの剣道総合優勝は、徳島県剣道界、先輩の方々の偉大な財産であります。県教育委員会、県体育協会の取組と指導を持続してきたことが、この栄に輝いた大きな要因であると思います。そして八十三万県民の合言葉、『出合 競い そして未来へ』のスローガンに答えられるものを残せたと確信しています。厳しい練習に耐え、男女総合優勝に輝いた選手、監督、役員の方々、集団演技や競技運営、民泊、交通案内と一致団結して国民体育大会を成功させて頂いた皆様に感謝しつつ、また、さらに新しい時代への原動力となって、二十一世紀に向けて躍進する徳島県の貴重な宝を守って行かねばと、いつも心に決めています。

皆様と共に語り継ぐことで私達剣道界に気力がもえ、平常心と成って社会の発展に貢献することとなると確信し、筆をおさめます。

私は少年時代に吉川英治の宮本武蔵を愛読、その頃より剣道に深く憧れたものでした。生活環境から竹刀を本格的に執って稽古を始めたのは友人の紹介で、城南町の徳島錬心館剣道道場に入門してからです。その時すでに四十不惑と言われる年齢に達しておりました。錬心館々長・大沢善二郎先生という良き師につき、稽古日には先生のご指導を願うと共に、先輩各位にお願ひし無我夢中稽古に没頭したものです。先生亡きあと現在の館長大沢孝彰先生より、親しく薫陶をうけるようになり、その間に沢山の剣友と交わる機会も出来、稽古の場所も次第に増え、益々剣道に対する情熱が湧きその視野も広がり、同時に剣の道の深さを体で感ずるようになり

ました。大沢館長から県立武道館での朝稽古を奨められ、下手な剣道にご迷惑とは思いつつも、出席するようになりました。特に堀江先生に一日一回は基本技の面打ちを、体力の続く限りお願いしました。稽古の後には決まって精神面の一連のつながりと申しますか、心技一如の素晴らしい理合を数年間拝聴させて頂き、一段と目覚めるものが多々ありました。月日が経つにつれて、益々剣道の醍醐味を味わうことが出来るようになり、稽古を重ねるたびに本当の剣道が自然と理解出来、同時に精神面の充実の必要性



を愈々感ずるようになりはじめました。

兵法とは人を斬るものに非ず

我が非心を切るものなり

と訓えている。そこに悟道の境地があり、
剣道極致の醍醐味が窺われるのでしよう。

昔から剣道は実践倫理と言われ日本人の精神的支柱として信頼されたゆえんのもは、宮本武蔵の言うように、剣の理は天の理であり、剣道を通じて人生を磨くこの一連のつながりが理解されてこそ、剣道が教育として成立し、今日に栄ゆる訓育的素材として価値があるものと私は思います。現在徳島支部という大支部を預って思うことは、この素晴らしい剣道の醍醐味を若い後進の方々に一人でも多く味わって貰おうと懸命に努力している次第です。

人間の老いは年を重ねることではなく、理想と夢を失うときに初めて老いがくると思っています。私はその思いを信じて現在大いなる夢をもち、剣先から哲学が生じる構えをと精進いたしております。

剣風や日口

感動を新たに――

七峰

「諸手の剣道」に見る

剣道の特性

剣道評議員 来代 眞治



剣の道を歩み初めて二十年以上、良き見直しの機会を得た想いで剣に対する

私の思いを書いてみたい。

はじめに、誤解を招かぬように、私にとっての「中段の構え」について述べる必要がある。中段の構えは「攻めと守りのバランスが最も優れた」構えといわれている。確かに竹刀の位置からして相手を打つにも、相手の打ちを受けるにも、これ程優れた構えは他に無い。しかし、私にとっての「中段の構え」には「攻撃」はあっても「後の先的な防衛」はないのである（返し技のうち、それが先々の先であるならば、それは「攻撃」である）。このことを前提として本文の主題について述べていきたい。したがってこれ以後は特にことわりのない限り

「中段の構え」は「私にとっての中段の構え」であると考えていただきたい。

さて「諸手の剣道」とは、片手に剣を、残る片手に盾を持つこと、受けや守りの為に構えを変化させること、そして深くは心の中に「受ける」という気持ちを起すことまでも否定し、剣に対しての美学を「中段の構え」の中に表現することを表す言葉である。ここで「美学」について少し触れたい。私は剣道の美学について「美しく立ち、美しく打つことを絶対の条件とした『気剣体一致』の打突を人間に求めるという特異な思想を持ち、かつ、死に對しての美学、即ち『潔さ』を求めるといふ、究極の道を歩み続けることだ」と考えている。

諸手の剣道をめざす中においては、相打ちを心がけることで打とうとする相手の心の中に、受けられるとかかわされるとかでは決してなく、打たれる、突かれる、と言う心を持たせることが肝要である。だから、気剣体の一致した打突を相手に出させたということは、その打突が当たったか否かに関わらず、相打ちにいく心が出来ているこ

とはならない。ただ気剣体が一致せずに相手が打って来る打突は論外である。

「諸手の剣道」とはこのようなものであるが、結果主義的な他の運動競技や、大陸の武術とは相入れないものである。そして、これは私見ではあるが、「諸手の剣道」は、剣道の理想そのものなのである。しかし、なぜ剣道はこのような特種さを持つことになったのであろうか。私は日本と大陸が持つ、それぞれの文化や歴史の違いがこの間に答えてくれると考えている。

古代、中世における大陸での戦に負けた国が人口の大部分を失うのに対して戦国時代の日本では敗北国が失う人口はわずかである。これからわかることは、大陸において「負ける」ことに對する罪悪感、日本のそれとは比較にならない程大きかったであろうということである。日本人は負けを「良し」とはしなかったにせよ「滅び」につながる負けに美学を持たせたと考える。これが現代の剣道に生きているのではないだろうか。

私は剣道の持つこの特性に魅せられて、

この世界に足を踏み入れた。そして今もこのことについて考え続けている。本文は現段階における私の、この問題に對する結論である。また、本来ならば自分を中心としたこのような問題だけでなく相手や、周囲のことについての考えも合わせて述べるべきなのであろうが、諸々の事情により叶わなかったことをお許し頂きたい。

最後に私に伝統ある「徳島の剣道」に投稿の機会をあたえてくださった編集委員の方々に感謝します。



がんばろう徳島

〈少年部〉

徳島県における

少年剣道について

少年部長 堀 金 實

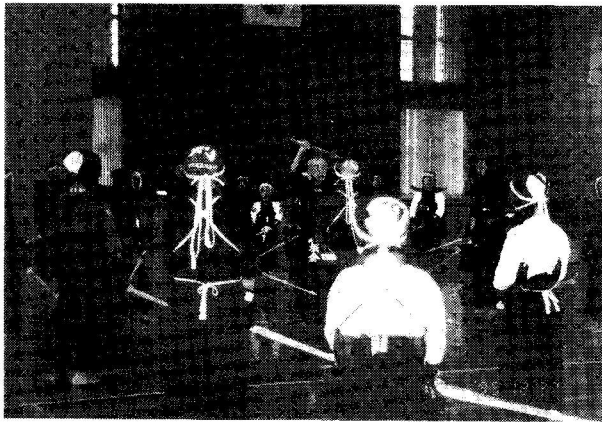


常H頃少年剣道発
展の為、格段のご努
力に対し衷心より感
謝申し上げます。さ

て、徳島県剣道連盟の底辺をなす少年剣道
教室に所属する小学生の人員は、平成七年
六月現在で一、七〇八名です。少年剣道教
室実態調査を開始したと思われる昭和六十
三年度よりの資料に基づき、これまでの人
員の実態に目を向けますと、年度別実態表
が示す如く七年間で統計上六四一名の人員
の減少を見えています。この人員は過日鳴門
県民体育館で開催された第六回徳島県小中

学校剣道強化錬成大会の出場選手の人員に
ほぼ近い人員であります。

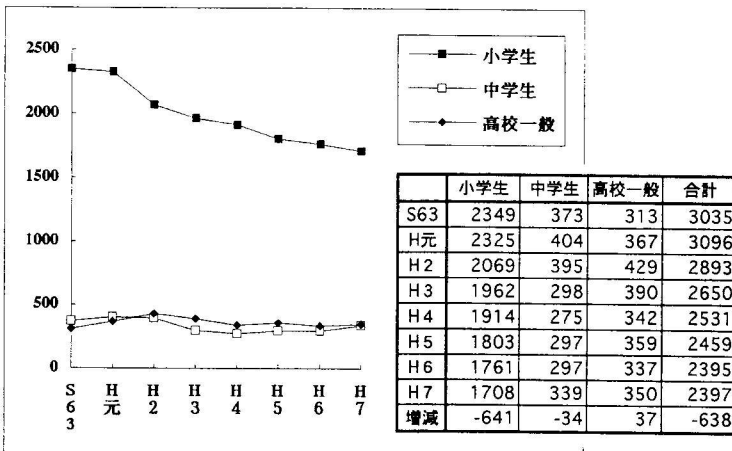
小学生の数が減少を続けるその原因を考
えますと、色々あるうかと思えます。家庭
での子供の数が減りつつあるのは現実です
が、しかし子供の数が減ったから即剣道少
年が減少したと一言で片付ける訳には
いかないと思います。子供の成長過程や環
境の中で現在の少年は一臭い、痛い、重い。
と剣道について表現し、剣道から離れてい



鳴門武道館における少年強化錬成会(男子)

く傾向が見受けられます。その事もさりな
がら保護者や子供の間で剣道に対する関心
が次第に薄らいで来たのでないでしょうか。
われわれ指導者は今こそ剣道をより魅力的
なスポーツとして若い世代に伝達する為
にどの様な工夫と努力が必要かじっくり考
える時期である様に痛感します。

年 別 実 態 表



現在、各剣道教室の子供達は心身の修練に一生懸命頑張っており、これらの子供達が剣道を始めたきっかけを考えた時、大きく分けて、親が勧めて始めた場合と、子供自身の希望で始めた場合の二つがあると思います。親は、「礼儀の正しい子に」「積極性のある子に」「精神面で役立つから」「同年輩の子と差異があるから」或いは、「剣道をしていると試験など本番時に強い」など色々と親は親なりの考えから子供に対する変身願望が感ぜられます。一方子供自身も、「友達や兄弟などが剣道をする姿を見て」「格好よさ、りりしさに憧れて」と言う動機等、やはり変身願望が感じられます。この様に見ると、変身と言う言葉が剣道を始める際のキーワードになっていると考えられ、その意味で先人が生死を賭して磨きあげた文化的遺産である剣道が持つ伝統や精神性を子供と保護者にまず知って貰う事が大切であり、それが生涯剣道が続ける一つの動機になるのではないかと思います。剣道の魅力の一つは老若男女を問わず、幅広い層で行えること。各自が目指す剣道はさまざまで、年齢段位あるいは指導者、ま



鳴門武道館における少年強化錬成会
(女子)

た環境により稽古法も考え方も異なると思いますが、小学生や中学生の年代は一生のうちで一番運動神経が発達する時期と言われ、百錬剛と言う言葉の如く、若いうちに鍛える事は大切である事には間違いありません。現在の少年剣道を見た時、試合回数が多くなればなる程、子供自身も「試合に勝ちたい」、保護者も「勝ってもらいたい」、まして指導者も「勝ちたい、優勝したい」と言う気持ち自然に強まり、勝負本位になり、姿勢や構えなどどうでもよい、成り振りがまわらず打突部位を竹刀で早く打てば

良いと言うような、基本を逸脱した稽古になるおそれがあるように思われます。剣道はあく迄も全剣連の理念の如く、「剣の理法の修練による……」と唱えているように竹刀であっても日本刀を操作する心掛けが必要です。まして少年剣道においてはあく迄もしっかりとした基本と言う技の上台を造る事であり、その意味で現在推進中の少年強化錬成会もその一環であります。

「剣道は礼に始まり礼に終る」と言う教えがありますが、この事が道場では実行できても普通の生活の中で実行しなかったら剣道を生活に活かすことにならないと思います。実生活と直結する剣道、また剣道とおして感性の豊かな子供を育てる指導こそが大切であると思います。私は剣道とは、人間に必要な思いやりの心を育て、生きていく為の上台を一つ一つ築いてくれる宝石の様なものだと思います。この一つ一つの宝石をどの様に与えるかが指導者の責務ではないでしょうか。ここに少年剣道に対する考えの一端を述べると共に少年剣道発展のため今後とも格段のご指導を賜ります様お願い申し上げます。

〈居合道部〉

剣連理事 高橋 憲 司

先ず今年度の事業報告について、講習会は春季（四月二日）、秋季（十一月四日・五日）とも大阪の福田一男範士を迎えて鳴門武道館において開講し、春は一般37名・少年22名、秋は一般26名・少年21名の参加がありました。中央講習会（九月九日・十日）には前田・坂本両受講生が派遣せられ、九月十七日に伝達講習会を開きました。大会は四月二十三日に鳴門武道館において県下大会を実施、七月九日には香川大会に二チームが参加、今年初めて四十七都道府県が揃って熊本市で開催された第30回全日本居合道大会には、五段に福井、六段に吉岡、監督兼七段に高橋の各選手が出席して全国順位二十位の成績でした。審査関係では級位で60名、初～五段で22名の昇級昇段があり、六段に長崎で森将夫、東京で福井勝の両氏が合格されました。

以上年度の事業報告は簡略にさせていた

だいて、編者のお勧めもあって今号より少し内容を替えてみたいと思います。小生、未だ修業半端の上、浅学非才であり誠に恥ずかしいのですが、「居合」の心と形について諸兄の御教導を待ちつつ思いつくままに綴ってみました。

今、社会は技術的には種々様々開発革新によって時間的的速度によって快適に且つ著しく向上していますが、反面、人は派閥をつくろうとする本性がために争いは飽きる事なく繰返され、今なお大であれ小であれ問題とされている事象の大半はそこに根ざしていると言わなくてはなりません。そしてそこに身を置いているのが人ならそれを善くできるのも人であるはずなのです。

「居合」が求める「道」は人が求め探す道と同じです。具体的には居合は「常居合急」事であり、言葉を換えれば臨機応変の心構えであります。また「鞘の内」とも言われ、先師の教えの中に「居合とは人に切られず人切らず、たゞ受けとめて平かに勝つ」とも詠われています。

即ちこの現代社会の中に在って、日本刀

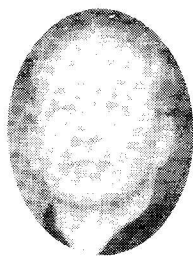
を手挟み古式蒼然たる姿をして何を学ぶのかと言え、形を通して心を修め、それがある種死生観にまで拡がりを持って、如何な状況下にあっても己を守り社会に貢献できる人格の形成を日指していると言えるのではないのでしょうか。



昇段審査合格秘話

七段に合格して

阿南支部 株 木 芳 夫



平成五年に京都・

東京、平成六年に京

都・東京、平成七年

に京都と五回受審し

たが、不合格。もう七〇歳では無理かも知れない。もうあきらめて止めることだと思っていた。が、高知市の交流大会に参加する機会があり、次のような話が出た。「もう受けるのをやめた。私の力では何ともならない。」と私が言うと、先生方は、「そんなことはない。そんなことでは駄目だ。続けて挑戦することだ。」という声が多かった。何日かする内に、それもそうだ。続けていってみよう。私の心もだんだん変わってきた。もう一回でいいから行ってみよう

という気になった。

実をいうと、私は試合をしても七段の先生にはそう負ける気がしない。勝つこともたびたびあるので、受審さえすれば簡単に合格できるのではないかといい気持ちがあったからであろう。こんな気持ちだから間違いのものがあつたのだらうと思う。今回は、もう一回にかけるといふ純粋な気持ちになれた。

七段の先生方にも、もう一回挑戦する話をした。日先生は、胴は打つな、胴を打つたら、必ず姿勢が崩れるといわれ、スナップ写真にまで撮ってくれた。私が七段を受けけることを知ったN先生は、特に力を入れてくれ、今のはいらぬ、これもいらぬ打ちだど一つ一ついいねいになってくれ、全面的にご指導を受けることとなった。先生は「不要なことはするな。マイナスになることはするな。いつも相手に竹刀をむけて、打ちの構えでおれ。」とのご注意である。日先生は自信を持って受審することの大切さなど何回となくご指導下さった。三人の先生方のご指導をまじめに受け入れ、

稽古に励んだというわけである。しまいは、もう打つ所がないという私のことばに對して、日先生はその通り、打たないことだといわれた。度々のご指導で、私の剣道も少しはましになったらしく、広島市での審査では、何とか合格できました。初めの相手は、小手をよく打ってきたが、打たれることはなかった。二人目の人は面を打つと下がるので、面ばかりを打って前に出た。やはり下がるので攻めて打って出た。そのうちに終了である。

合格者の中に私の番号を見つけ、B先生が「合格だ。早く剣道形の用意を！」といわれた。

広島での審査では、私一人が本県からの合格となり、相済まない心で一杯であった。これからは、徳島県の高齢剣友会のお世話と充分しなくてはならない。指導者の一員として恥ずかしくないよう、稽古にも努めなくてはと決意を新たにしている。

七段に合格して

徳島支部 南 充美



私は、かねてより七十歳になるまでに七段昇段を願っていました。この度

念願を果たすことができ大変喜んでいきます。

これまで昇段を目指して親道館で稽古をお願いしながら、羽ノ浦で朝稽古、鳴門武道場で稽古をと努力しておりましたが、平成五年二月八日、鳴門武道場で稽古中心筋梗塞で倒れ、丁度居合わせた先生方がお世話して下さり救急車で鳴門病院へ入院しました。当初は危険な状態でしたが処置が早かったので五週間で退院することが出来ました。その後、順調に回復し入院前より苦しみも無く身体が軽く動けるようになりました。そこで平成七年十一月二十八日（イツキニハ・ラッキーセブンの年）に東京での受審を決意しました。

審査を受けるためには面技が大切と教わっ

ていましたが、面打ちは親道館で竹原館長先生より充分稽古を付けて戴いていたのですが、走り込みの面を指摘されたり正しい面打ちが出来ていません。出発に先立ち大沢先生のご指導を受けることにしました。そのうち稽古友達から面打ちが大変良くなったとお褒めのお言葉を受けるようになりました。

同行する先生に誘われ津田港から出るオーシャンフェリーで行くことにしました。東京へは朝五時に着き少し早いかなと思いましたが初めて大きな船に乗る、ということは何初めて大きな七段という船に乗れるのではないかと喜んで行きました。

いよいよ受付で受審番号を貰いましたが一、七七番（イイナ、ナ番）なんだか良い感じ、受験番号は七六〇・D番（七段にナロウデー番）である。益々ファイトが沸いてきました。

これまで各先生達から戴いたアドバイスと出発前に馬場徳島支部長から先の先でいくようにとのお言葉を頭におき、実技に臨みました。今まで全国高齢者武道大会やね

んりんピックに出場させて戴いたことにより上がることもなく落ち着いて立ち会いができました。初太刀を今までに修得した自分では最高と思う面を先の先で打ち込み、間合いを取りながら面を打突して行きました。終わって満足感と自信が湧いてきました。いよいよ合格発表、第七審査場午後受け付けの部約八十人中合格三人のなかに入らせていただきました。

私がこれまで心がけたことは

一、普段習慣づけておこうとしたこと。着装（特に面紐を揃える）、姿勢、礼、遜居して竹刀を構え立ち会いに入るまでの動作。

一、初太刀を大切に有効打突につながるようにする。

一、面打ちを充分稽古する
走り込み面をなくし、気剣体一致の正確な面の打突を心掛ける。

一、子供との稽古でも正しい面打ちをする。
一、短い時間の立ち会いであるから、出来るだけ多く打突する。

以上参考になれば幸いです。

私が今回昇段出来ましたのも恩師先生初め徳島県剣道連盟の先生方並びに皆様方のお陰であると深く感謝いたします。この御恩に報いるため微力ですが、健康に気をつけ出来るだけ長く剣道に精進し、徳島の剣道発展のため努力致したいと存じております。

尚今まで私の身体に気を配られ稽古に手心を加えられ、またそのことで試合に敗けていただいた方もおられるとお聞きし、ご迷惑をおかけしましたことお詫びいたします。今後身体も復調しておりますので、その気使いは御無用に願いますと共に皆様と同様に稽古とご指導を切にお願い致します。

七段に合格して

阿南支部 大石 正志



昨年十一月、剣道七段に合格することができました。受験回数は十数回になり

審査に失敗する度に剣道に関する考え方や自分の取り組みに厳しさができてきたように思います。その間、いろいろ悩みましたが、一回も一諦めよう・やめよう。」なんて思ったことはありませんでした。性格が楽天的でありそれが悪くもあり良くもありだと思えます。

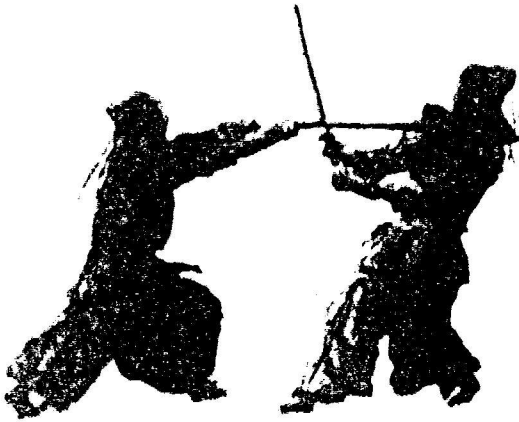
ここ数年間の自分の剣道を振り返ってみると昇段ということに心が止まり、本当の意味での稽古ができていなかったと思います。反省させられる材料として例えばこんなことがありました。審査の時「蹲踞の仕方・立ち姿」「飛付かない・先を取る・乗ること」これらのことに心奪われ、いざ立合が始まったときには迷いが生じ、何も

できずに審査が終わってしまふことでした。審査というものに心が捕われ、自分の稽古も審査にしても無念無想で臨むことができずして。すべては捕われの心「止心」「いつき」であったと思います。これはようするに、稽古不足の一言に尽きるという事です。以前、堀江先生に「段位審査を考えずに稽古しなさい。」とご指導いただきました。この言葉の本当の意味がやっ

と理解できたように思います。自分に足りないものは何かを考え、自分なりに納得がいける稽古をすることに心掛けるようにしました。それは、「走る・多くの先生方の集まる至誠館（中山啓男館長）に稽古に行く。」でした。いろいろご指導いただき、勉強することができました。今回の審査では何も迷う事なく立合ができたとように思います。それが七段合格につながったんだと思います。高校時代からお世話になった故松本・城先生に昇段の報告をすることができました。

今後、剣道修業の目的として「刀を意識した剣道とは・止心と欲とは。」それらの

ことを研究し、事理一致できる剣道を目指し稽古していきたいと思えます。また、微力ではありますが剣道発展のために貢献できればと考えています。これからもご指導よろしくお願いいたします。後になりましたが、いろいろご指導いただいた多くの先生方、同僚、そして、理解してくれた家族に心から感謝いたします。



剣道七段に合格して

名西支部 白木洋一



平成七年十一月二
十八日、日本武道館
にて七段審査が実施
された。私にとって

は四回目の受験となる訳であるが、過去に受験した時と比べれば最悪の体調であった。

審査の三週間前、助軟骨剝離になり着替えもままならぬ状態であったからである。医師の診断は「審査は無理かもしれないが、どうしても受けるのならコルセット着用で行ってください。」というものであった。今回はあきらめようかという気になったが、日を追うごとに体調も良くなり稽古もできるようになったので一折角申し込んでいるしもったいない。駄目でもともの気持ちで受けてみよう」という結論に達した。しかしこれが結果的にはプラスになり合格することが出来たのである。何が幸いするか分からないものである。過去三回の受験は、

自分で言うのもおかしいが、稽古量も体調も常にベストの状態でも臨むことができた。

ただ打った打たれただけを言うならば、自分ではかなり打った方だという感想をいつも持っていた。だから、自分でなぜ不合格になったのか、原因がいったいどこにあるのか迷い始めた時期でもあった。今になって思えば自分勝手に相手に打ち込み、それで満足感を得ていただけであったのだ。不合格は当然の結果といえよう。

審査当日、私は精神の集中だけを心掛けた。自分の最初の相手は今回で3回目の対戦になる大学の同級生であった。おたがい手の内を知り尽くしているだけにやりにくい気持ちもあったが、体調が不十分だけに、余分な動きをなくし相手の起こりをとらえることに全神経を集中させた。立ち会って一呼吸して相手の起こりを感じた瞬間、無意識のうちに私は面を打っていた。今までに打ったことのないような出ばな面であった。まわりで見た人に後で聞くと「あの面で決まりだったな。」ということであった。その後は、引き続き精神の集中を心掛け、

打たれてもいいから面に乗っていくことを心掛けた。

今回の審査を通じて自分なりに考えたことは、スピードや強引な攻めで相手を打つことのみを考えるのではなく、理合いにあった攻めや打突が自然にできなければならぬということである。もちろん、普段の稽古のなかでは気を付けてきたつもりであるが、それが自然にできるように心掛けるのとは、そうでないのでは大きな違いがあるように思う。七段に合格してからの稽古ではその点に注意しているつもりである。そうやって稽古していると、今までの稽古のやりかたでは見えなかったものが見えてきた。また自分が今までいかに強引に打突しようとしていたかもわかってきた。

最後に、先日行われた称号審査の時、堀江先生からご指導いただき、強く心に残っている言葉を紹介して結びにしたいと思う。

「剣道において『これでいい』ということはありません。常に『何か足りない』と研究し、その何かを求めていく気持ちが大切です。私もいつもそのことを思いながら稽古しています。」

遙かなる私の迷い旅

——六段に合格して——

徳島支部 手塚 十三子



五月、京都の「おたべ」に始まり、八月は福岡の「明太子」、十一月は名古屋の

「きしめん」か、東京の「草加煎餅」とまるで全国の名物を追い求めるかのような、精勤賞にも値する審査行脚が十年間続きました。

不合格のたび、「よし、今度こそ頑張ろう。」と気持ちは強まるものの、それが、「相手は自分なのだ」ということに気付く心の余裕が持てず、とにかく「相手と自分」が大きく対立し、次第にその相手は手強く感じられて萎縮するばかりの私でした。

十年間の審査を顧みると、深く心にしめることばかりで、その後悔の思いは日々の稽古の中でいつも天井からグサリと突き刺してきます。

人前でカッコ良さを求めたり、特別何か

「自立したいなどという気持ちは毛頭ありませんでしたが、審査の相手は比較的小柄な私からすると、立ち合いに入る前から威圧感を覚え、気後れしてしまうものでした。その結果、相手に力負けしないように耐えねば、と両足でグッと踏んぱり、それが最大の原因となって、身も心も居付いた状態を呈し、今日までの長い行脚を重ねる結果を招いたのだと思います。」

最近では男性に勝るとも劣らぬ堂々たる体格の女性も増えてきましたが、それでも男性と比較すると筋力や瞬発力などあらゆる運動能力の面で差異があり、なかなか男性のそれには叶いません。その違いを逆にかして、気は張りつつも身体を柔らかく使って軽妙な技で対応することが大切であると学びました。

また年齢とともに体力は次第に衰え、スピードも減退していく中で、若い人とお手合わせ願う時、中学生や高校生と同じような感覚で打ち合っていたのでは負けは必定了です。そのことを頭のどこかに止め置きながらも面を付けた瞬間にまるで別人になってしまい、我を忘れて打ち合いを繰り返す

ます。稽古を終えて、ふと我に返り、今日一日のかけがえのない相手と時間の空費に気付いた時、疲労感と虚しさに胸が塞がる思いで家路に着きます。

自分の勘だけを使い何の脈絡もないまま相手の前に飛び出して行くと、出端に乗られ、抜かれ、すり上げられ、と無惨な結果をさらさねばなりません。

互いの剣先を通して無言の壮絶なやりとり（仕事）があるからこそ、無心の技が放たれる。つまり、本当の意味での捨て身の技は緻密な業前があって、そこから初めて生まれてくるのだと痛感しています。

最後の審査の時のことは無我夢中でのような内容であつたのか、よくは覚えていません。立ち合いの直前、一打



実技審査に合格して、形審査に挑む筆者。



中学生を指導する筆者

たれたら打たれたでいい、でも絶対に後へは退かない—そう覚悟を決めて蹲踞をすると、自然に手足が前に動いていました。

結果は期待せず、さっぱりした気分でき替えを済ませると、八月の福岡まで三カ月しかない、急いで帰って稽古せねば、と長年の審査で培った「不撓不屈の精神力」が湧いてきて、我ながらあきれてしまいました。

竹刀を始めて握った高校生時代は、明け

でも暮れても練習、試合、練習、試合の日々でした。そしてここ徳島で沢山の方々からお教えをいただいて、剣道が「練習」から「稽古」に姿を変えようとしています。

このたび授けていただいた尊くも勿体ない段位や称号は、一瞬たりとも私個人にいただいたものではなく、今日まで温かく見守り、御教示下さった皆様方に生涯お預けすべきものだと思いに深く刻んでおります。

昇段審査に挑戦し続けた十年——その審査から私が教えていただいたこと。それは、日本の良き伝統文化としての理合いに根ざした剣道を真剣に学ぶとともに、さらに深く追究していくこと。

一人の日本人として教師として、そして女性として今後剣道とどのように関わっていくか。

この小さな体では背負いきれないほど大きく、重い課題を頂戴いたしました。

初太刀の一本が取り返しのつかない大切な一本であると今まで以上に自らを戒めて、何事にも真摯な気持ちで取り組んでまいります。と思います。

平成七年度

称号・段位合格者一覽

一 剣道

【範士】

立川 信彦
糸谷 文雄

【六段】

五月七日
五月五日

五月八日

十一月二十九日

十二月十八日

十二月三日

二月十八日

大澤 讓二
勝浦 守

玉田 晋作
平野 誠司
吉田 博文

玉田 晋作
佐々木 和人
手塚 十三子
平田 憲四郎

茨木 基良
二月十八日

【三段】

十二月三日

二月十八日

【教士】

佐藤 佳宏
手塚 十三子

五月十四日
佐藤 佳宏

吉永 則生
西山 伸二
横島 保

丸岡 啓之
元木 祐昭

福田 久上
佐藤 智和

喜浦 理砂子
七橋 麻理

五月八日

【七段】

九月十日

【四段】

五月二十八日

五月二十八日

【二段】

中山 繁輝
木原 資裕

九月十七日
株木 芳夫

増田 和広
金西 重記

五月二十八日
湯浅 英生
長谷川 陽子

植田 章彦
佐藤 義文
橋本 裕子

谷口 智弘
太田 宏行

東條 郷子

【錬士】

十一月二十八日

十一月二十三日
山田 浩史

九月二十四日

九月二十四日

五月二十八日

五月二十八日

五月八日

白石 洋一
大石 正志
南 充美

九月二十四日

九月二十四日

大西 健武

出口 正春
目下 太郎

岩朝 洋平
河野 敏夫

白木 崇
竹村 英信

山本 泰史
佐野 伸治

木下 健司
原 英之

武智 喜代子

陶木 喜代子

森山 元智

三木 琢司

前坂 政義

加藤 圭貴

榎本 佳世

九月二十四日

十二月三日

原田 貴史

児島 優子

二反田 和則

香川 利浩

喜多 幸稔

畑山 幸子

河野 公雄

二月十八日

住友 邦昭

石井 久美子

十二月五日

山室 雅幹

笠原 英之

三木 智美

松永 貴史

谷喜 史

井原 徹

三木 真登美

岡本 茂

木下文 江

十二月三日

手塚 剛

茨木 基良

田村 正樹

小越 昌史

岩朝 日出夫

吉永 則生

西野 知成

佐藤 智和

河野 雅美

西山 伸二

丸岡 啓之

福田 久上

喜浦 理砂子

横島 保

元木 祐昭

太田 宏行

東條 郷子

湯浅 英生

植田 章彦

谷口 智弘

東條 郷子

長谷川 陽子

橋本 裕子

安丸 篤也

五月二十八日

岩見 さゆり

中本 裕由

五月二十八日

五月二十八日

九月二十四日

大西 健武

目下 太郎

岩朝 洋平

山本 泰史

木下 健司

武智 喜代子

森山 元智

佐野 伸治

原 英之

陶木 喜代子

三木 琢司

福島康史	鈴江周	松岡樹	小笹夫	三江隆	豊永剛	木里健	福島聡仁	大石哲生	九月二十四日	渡辺あゆみ	高島基恵	鈴木加奈子	左官真理	小原実	柚友敏	戸村博史	富山龍太郎	前川泰伸	庄野健司	村上晋亮	美馬克武	福家彦	富永裕幸	日和田崇	
井内洋輔	近藤昌泰	橋本歳三	浜口修二	株田圭悟	紙本康宗	吉田亮一	太田秀登	青井雅大	馬淵雅大	松田健二	小笠陽介	郡勢和朗	伊賀晋平	敦賀清高	西前秀明	船本容平	西木昌也	上川裕司	中川佳史	木村陽太	橋本茂明	西田洋	岡崎将志	中川稔史	折上稔史
赤波江牧	位田夏子	桂森	大佐茜	武田結香	松田亜希	妹尾さなえ	辻原優秀	杉村三季	一吉美穂子	福永恵実子	畑山尋美	柳黒範秀	大原常己	藤本弘明	板東良一	坂東浩司	山形辰哉	渡辺貴大	山下俊宏	蔭岡太	日裏涼太	岸田光央	木村桂		
寺西裕穂	福永浩	磯部仁	川人介	山本弘	吉川敏行	大内健作	笠井浩徳	高原義人	原本成	榎野俊樹	中野創	江川祐昭	仁木道明	西村健太郎	山口雅慈	瀬川裕司	瀬口貢	泉和利	山田哲也	原田啓二	岡田敬吾	十二月三日	三浦充代		
黄田和美	今井和歌子	安山花子	豊田史香	武澤美香	田原茂延	柳生晃宏	渡内直樹	岡田大助	岡元弘	下藤光弘	小縣昌宏	高原和男	相坂裕之	割石貴史	富山昭彦	湯岑井雄	寺井裕司	上野嘉馬	高野雅光	宮城雅光	二月十八日	矢野裕子	山本光男	堀川修	
田村栄二	真鍋陽二	仲原篤志	松田康介	上田圭晃	長谷佑司	竹内泰宏	高田智輝	藤本誠二	富永誠二	勝瀬大志	村川武志	乘野憲男	隅田和成	坂東雅浩	仁木浩史	梅山遼介	原植尚人	麻植尚人	四月二十九日	【初段】			片山雅代	東條茜	
豊内紗子	斎藤聖子	宮本幸綾	佐藤知恵	岡田理恵	鉄野友文	日比野美由紀	上井美和	高木有紀	喜田由里	三ツ井由里	田村季仁	郡大輔	吉田佳史	上木直樹	貝野真一	沢井昭一	本村公一	兵部旬英	岡本晃治	篠原義介	株田慎介	日下香誠	尾崎香映		

二月四日

公文健太郎
多川大智
大宮佑貴
紅露智哉
森充正
中浦康仁
東輝記
中亮治
吉野憲志
荒木大輔
中野鯛二
谷口貴榮
矢部宣博
甘利紘一
東條晋十
乾好和
田村耕大
田村修平
笠井高志
西木聖造
阿部雄一郎
里東俊伸
西沢明大
佐々木丘人

齋藤拓哉
ホードレイ

岩村彩子
藤本和香
葛蒲汐子
益井悠佳
若代美幸
中崎智絵
山下智幸
竹澤郁美
庄野早苗
上佐眞理子
戸出悦子
岩本悦子
内田康夫
濱口和敬

一居合道一

【錬士】

五月四日

岡田育幸

【六段】

七月二十三日

森将夫

十一月十八日

福井勝

【三段】

十一月五日

小引健

【二段】

五月二十八日

高野嘉寿馬
沼田将征
仲田節稔

吉田節雄

桑原愛奈
桑原瑞枝

十一月五日

西原仁

【初段】

五月二十八日

酒井優

尾崎憲道

米田利彦

戸村淳一

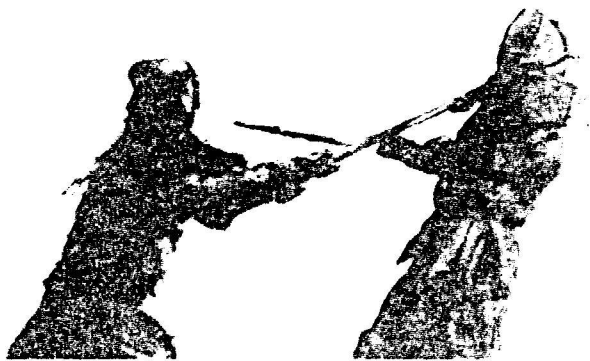
武田修典

原田進
篠本径夫
北川真衣
西條千鶴子

中村方里子

十一月五日

寒川清
坂東愛

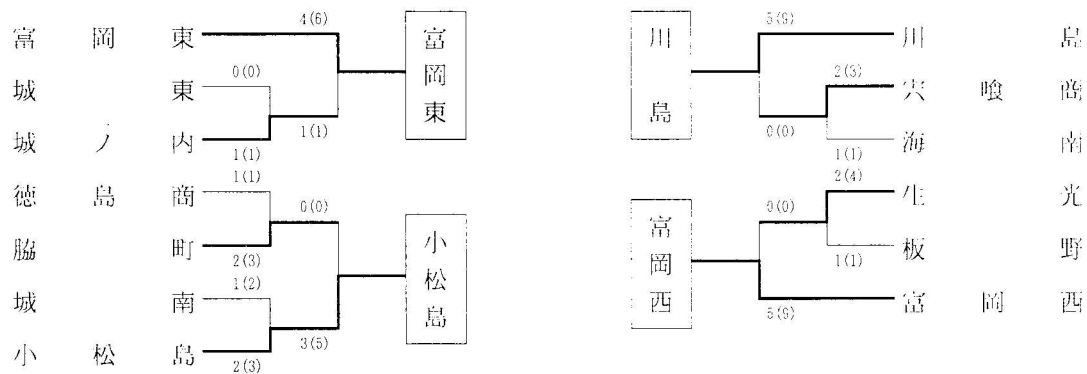


平成7年度 戦いの跡

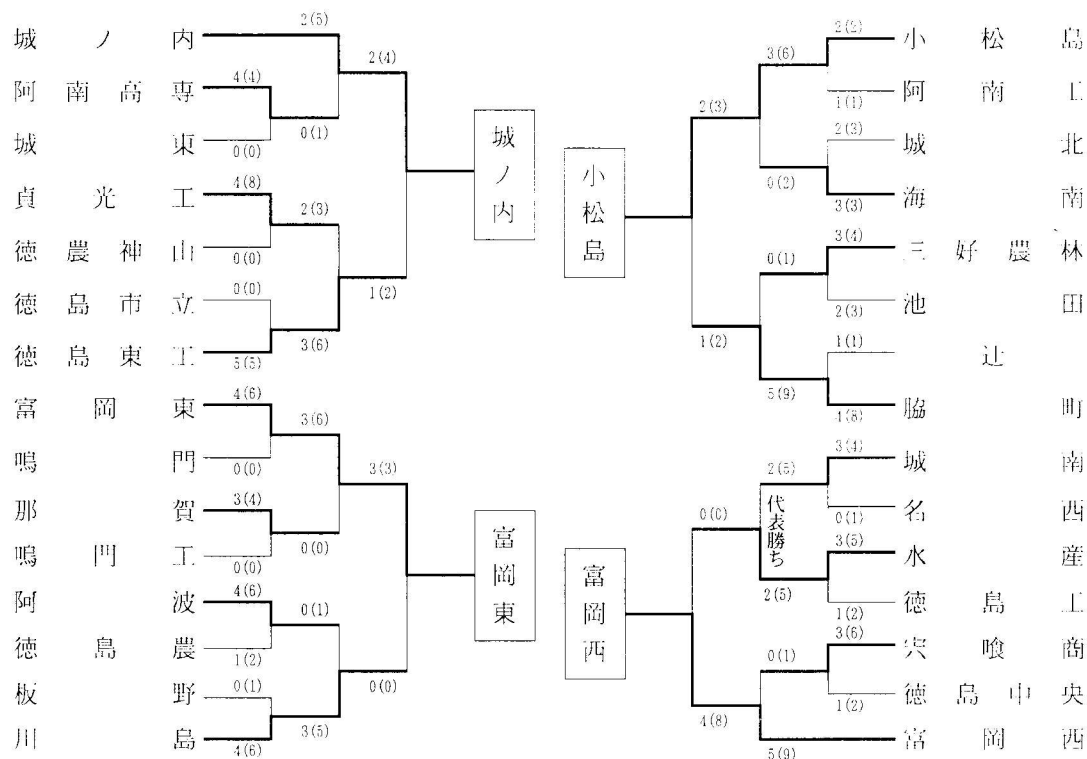
第35回 徳島県高等学校総合体育大会

平成7年6月3日～5日
徳島農業高校体育館

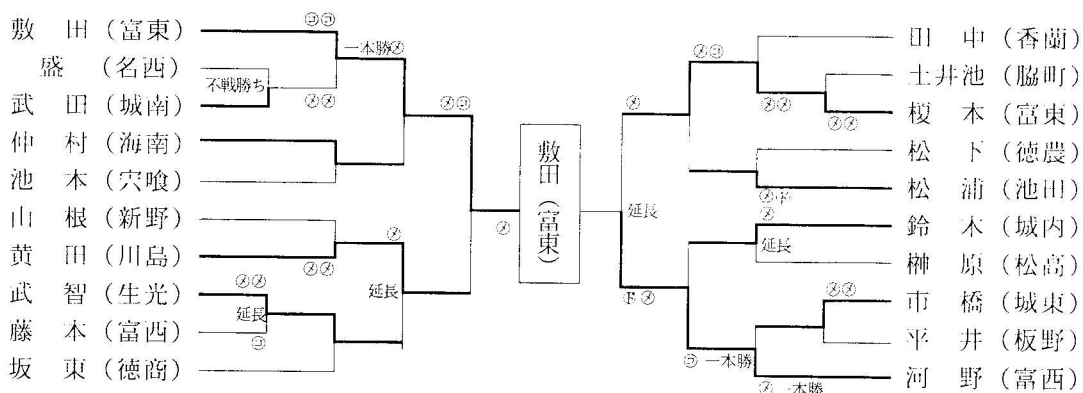
<女子団体予選>



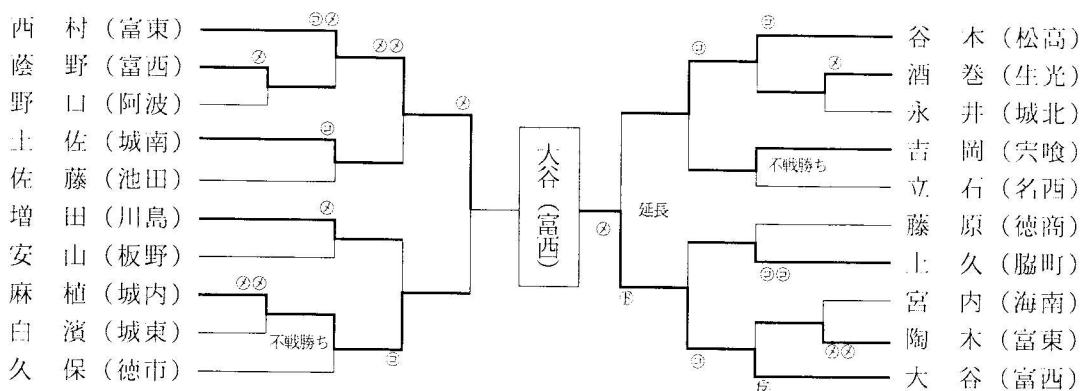
<男子団体予選>



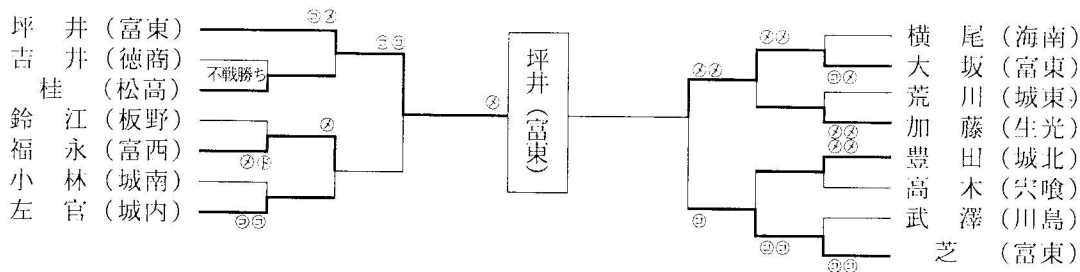
<女子個人1組>



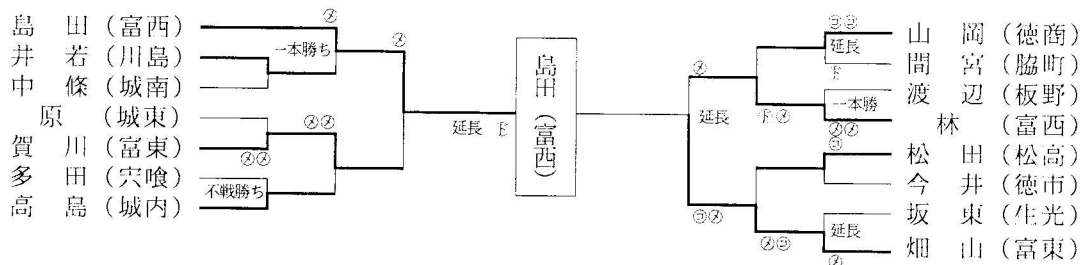
<女子個人2組>



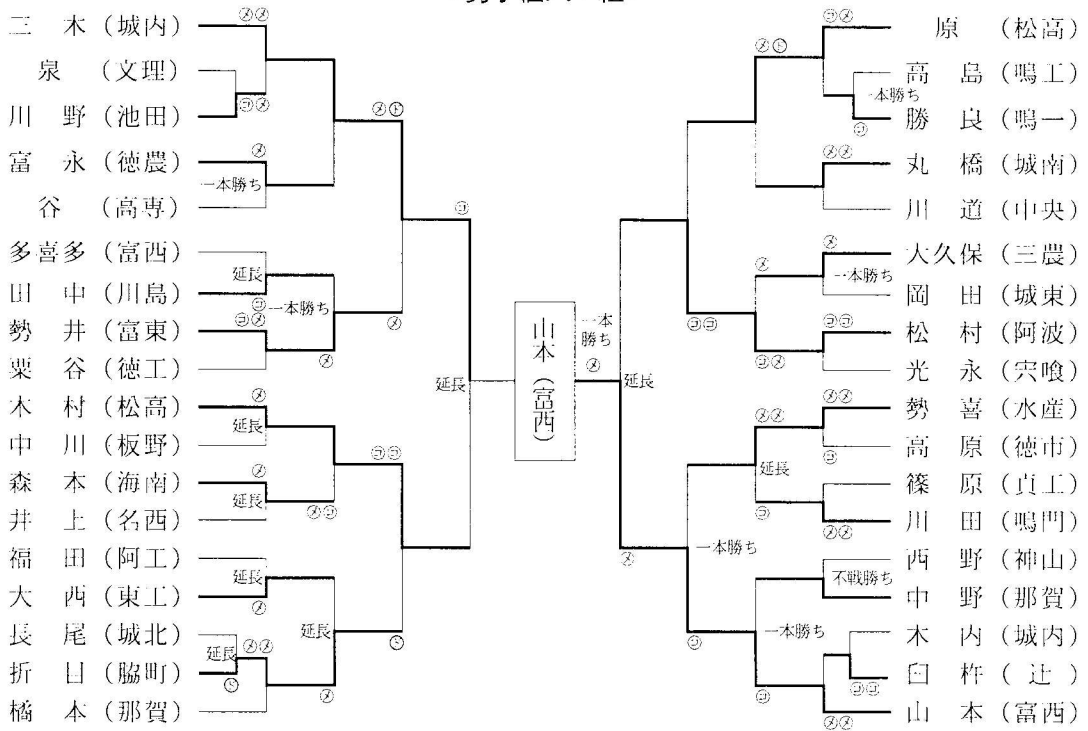
<女子個人3組>



<女子個人4組>



<男子個人1組>



<男子個人2組>



<男子団体決勝リーグ>

<男子団体>

	富岡西	小松島	富岡東	城ノ内	勝数	勝者数	勝本数	順位
富岡西		$\frac{3}{3}$	$\frac{2}{2}$	$\frac{3}{2}$	3	7	8	1
小松島	$\frac{1}{1}$		$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	0	3	4	4
富岡東	$\frac{0}{0}$	$\frac{4}{3}$		$\frac{1}{1}$	1	4	5	3
城ノ内	$\frac{1}{0}$	$\frac{3}{3}$	$\frac{2}{2}$		2	5	6	2

<男子個人>

	山本	日和田	原	佐藤	勝数	勝本数	点得失	順位
山本		△	△	△	0	0		4
日和田	○		△	△	1	2		3
原	○	○		△	2	3		2
佐藤	○	○	○		3	4		1

<女子団体>

	富岡東	小松島	富岡西	川島	勝数	勝者数	勝本数	順位
富岡東		$\frac{9}{5}$	$\frac{7}{5}$	$\frac{8}{4}$	3	14	24	1
小松島	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	0	2	3	4
富岡西	$\frac{0}{0}$	$\frac{6}{3}$		$\frac{5}{3}$	2	6	11	2
川島	$\frac{1}{0}$	$\frac{8}{4}$	$\frac{1}{0}$		1	5	11	3

<女子個人>

	大谷	島田	坪井	敷田	勝数	勝本数	点得失	順位
大谷		○	△	△	1	1		3
島田	△		△	△	0	0		4
坪井	○	○		○	3	4		1
敷田	○	○	△		2	2		2

《インターハイ出場校・個人戦出場者》

<男子団体>

富岡西高等学校

<女子団体>

富岡東高等学校

<男子個人>

佐藤 智 (城ノ内高)

原 英之 (阿南工業)

<女子個人>

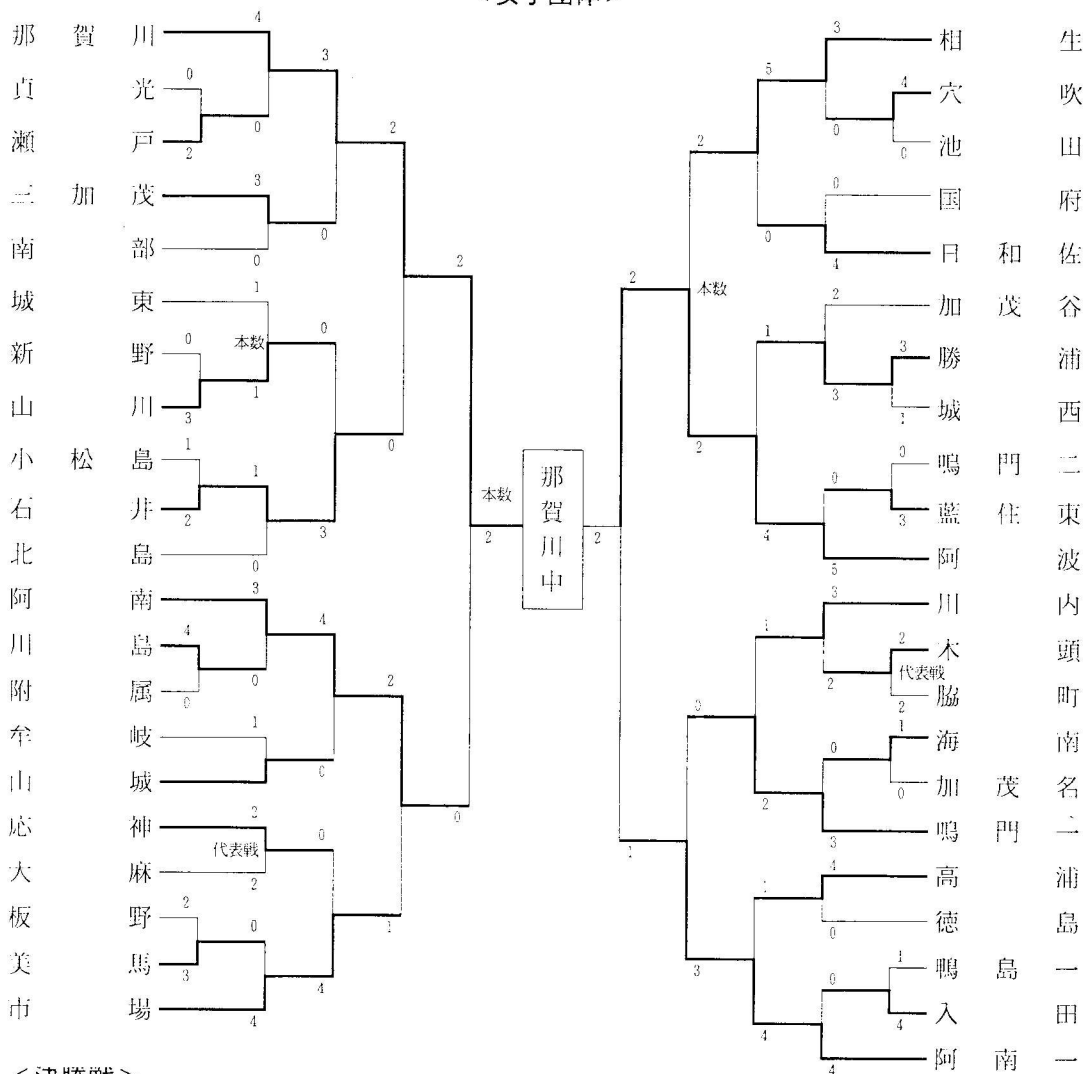
坪井 さくら (富岡東高)

敷田 美紀 (富岡東高)

第24回 徳島県中学校剣道選手権大会

平成7年6月11日
鳴門武道館

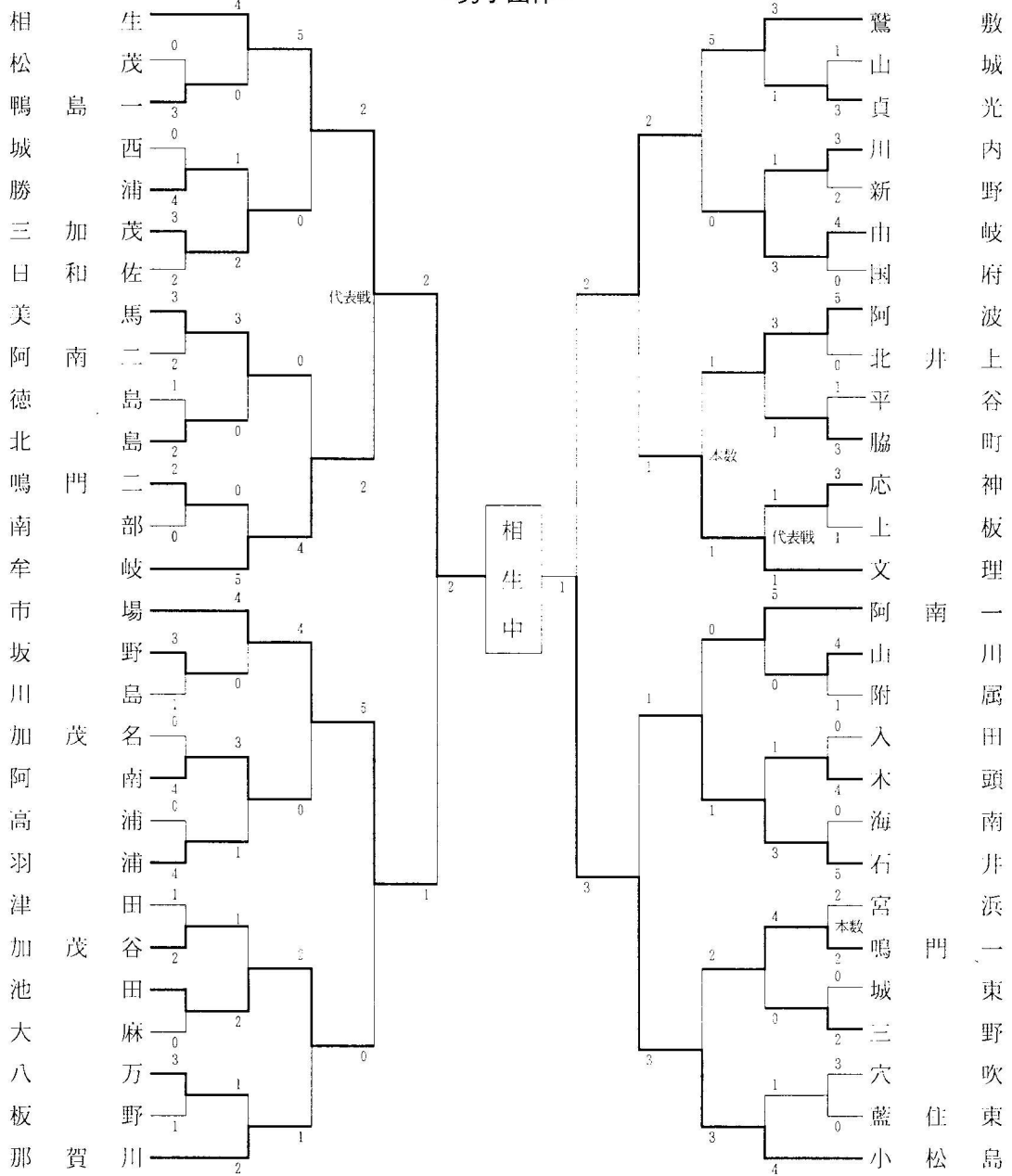
<女子団体>



<決勝戦>

学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
那賀川中	竈上	菱本	佐藤	星野	坪井	2 (5)
	⊙	⊙ 一本勝ち	⊙ ⊙		⊙ ⊗	
阿波中	⊙ ⊙			⊙ 一本勝ち	⊙ ⊗	2 (4)
	白井	藤原	田島	酒巻	横山	

<男子団体>



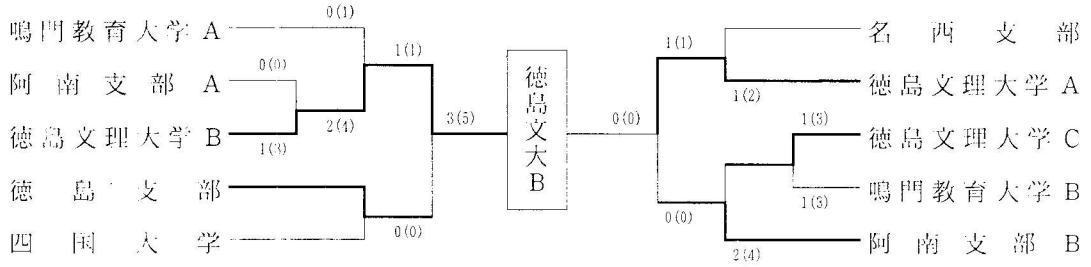
<決勝戦>

学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
相生中	儀宝	元浦	前田	田村	本田	2 (5)
	⊗	⊗	⊗ ⊗		⊗	
小松島中		⊗	⊗	⊗ 一本勝ち	⊗	1 (3)
	住村	窪田	播磨	清井	長谷川	

第16回 徳島県女子剣道大会

平成7年7月16日
徳島県立中央武道館

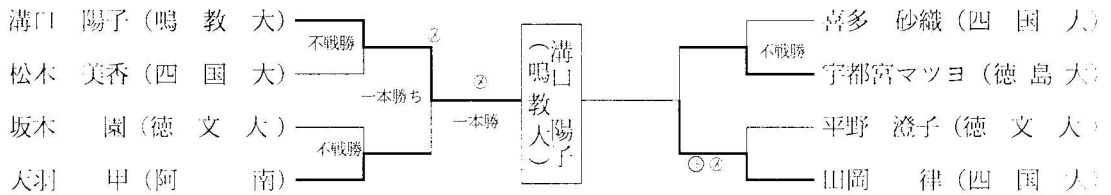
<一般団体戦>



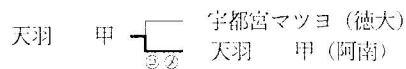
<決勝戦>

チーム名	先鋒	中堅	大将	勝敗
徳島文理大学 A	乾	對馬	宮原	0(0)
徳島文理大学 B	☉ ⊕	☉ ⊗	☉	3(5)
	橋本	妹尾	松下	

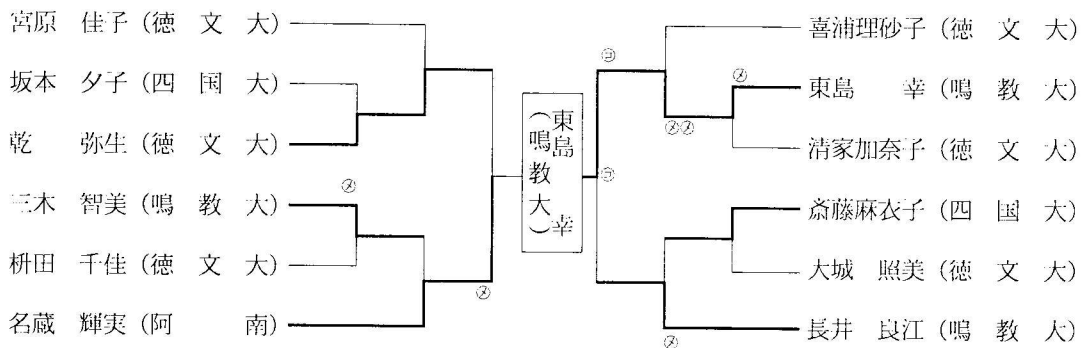
<初段以下の部>



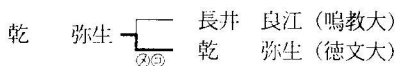
<3位決定戦>



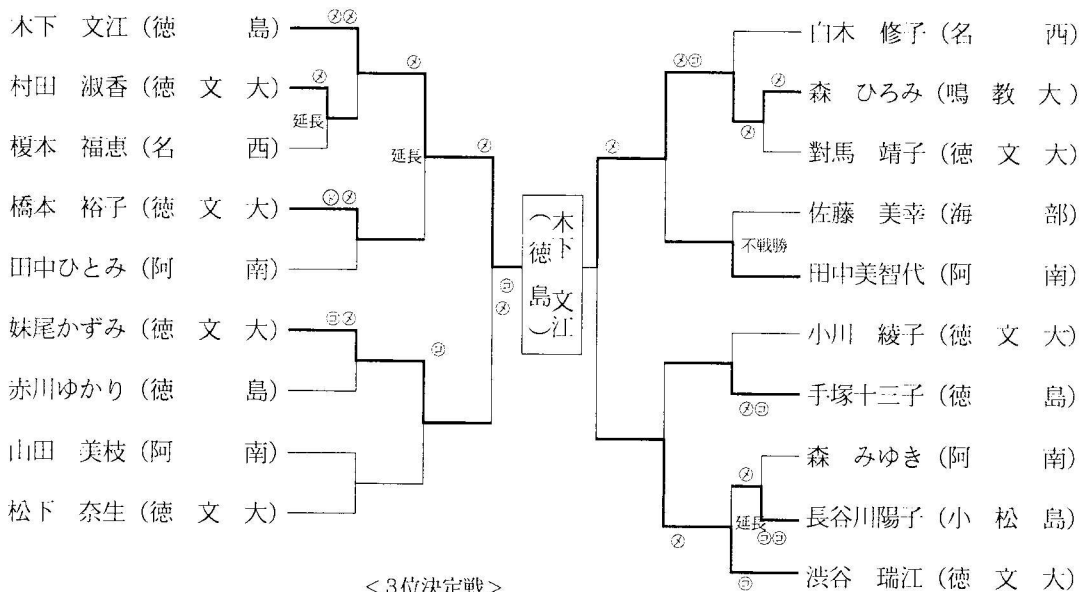
< 2 段 の 部 >



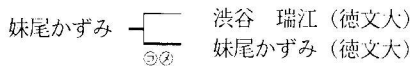
< 3位決定戦 >



< 3 段 以 上 の 部 >



< 3位決定戦 >



第34回 全日本女子選手権予選

平成7年7月22日
 県警察学校体育館

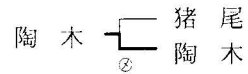
< 1組 >

	陶木	榊原	吉岡	猪尾	勝数	順位
陶木 (富岡東高)		②②	②	△	2 (3)	1
榊原 (小松島高)	△		△	△	0 (0)	4
吉岡 (立命館大)	△	⑤②		②	2 (3)	1
猪尾 (大阪体育大)	②②	②	△		2 (3)	1

○ 1組同率決定リーグ

	陶木	吉岡	猪尾	勝数	順位
陶木		②	△③	1 (2)	1
吉岡	△		⑤	1 (1)	3
猪尾	⑤②	△		1 (2)	1

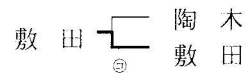
○ 1組決定戦



< 2組 >

	小籾	畑山	森	敷田	勝数	順位
小籾 (大阪体育大)		②	△	△	1 (1)	2
畑山 (富岡東高)	△		⑤	△	1 (1)	2
森 (立命館大)	②	△		△	1 (1)	2
敷田 (富岡東高)	②	②②	②		3 (4)	1

< 決定戦 >



○ 第34回全日本女子選手権大会徳島県代表

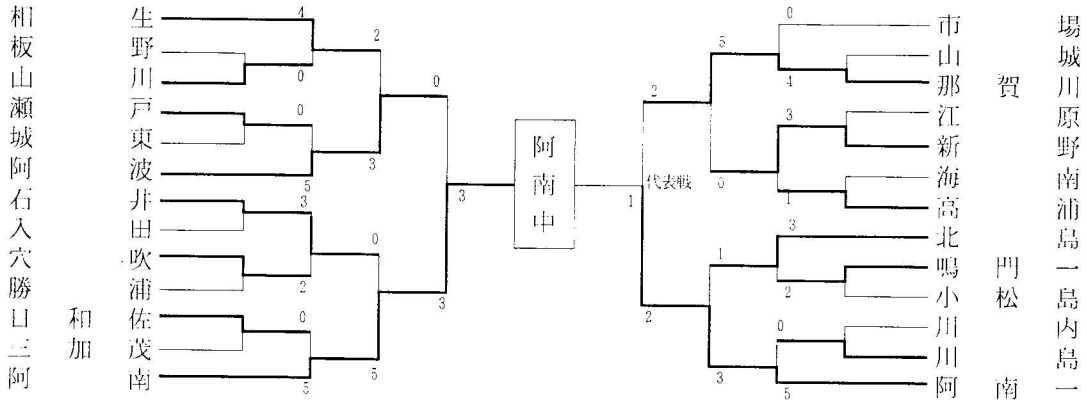
敷田 美紀 (富岡東高3年)

第49回 徳島県中学校総合体育大会

平成7年7月24日

鳴門武道館

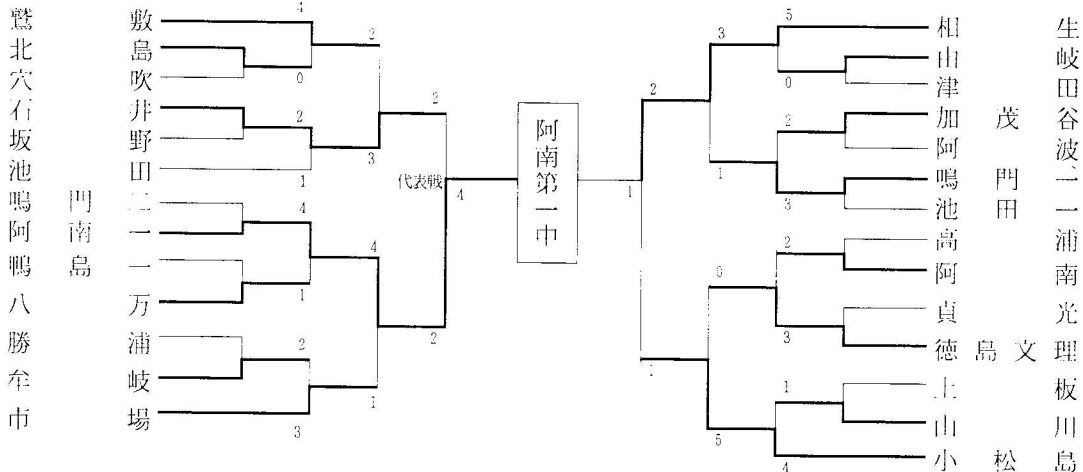
<女子団体戦>



<決勝戦>

学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
阿南中	平尾奈	大黒	小林	森	平尾英	3(4)
	⊖	×	⊙	⊙ ⊖		
阿南第一中	住友	沖津	遠藤	日下	森	1(2)
					⊙ ⊙	

<男子団体戦>



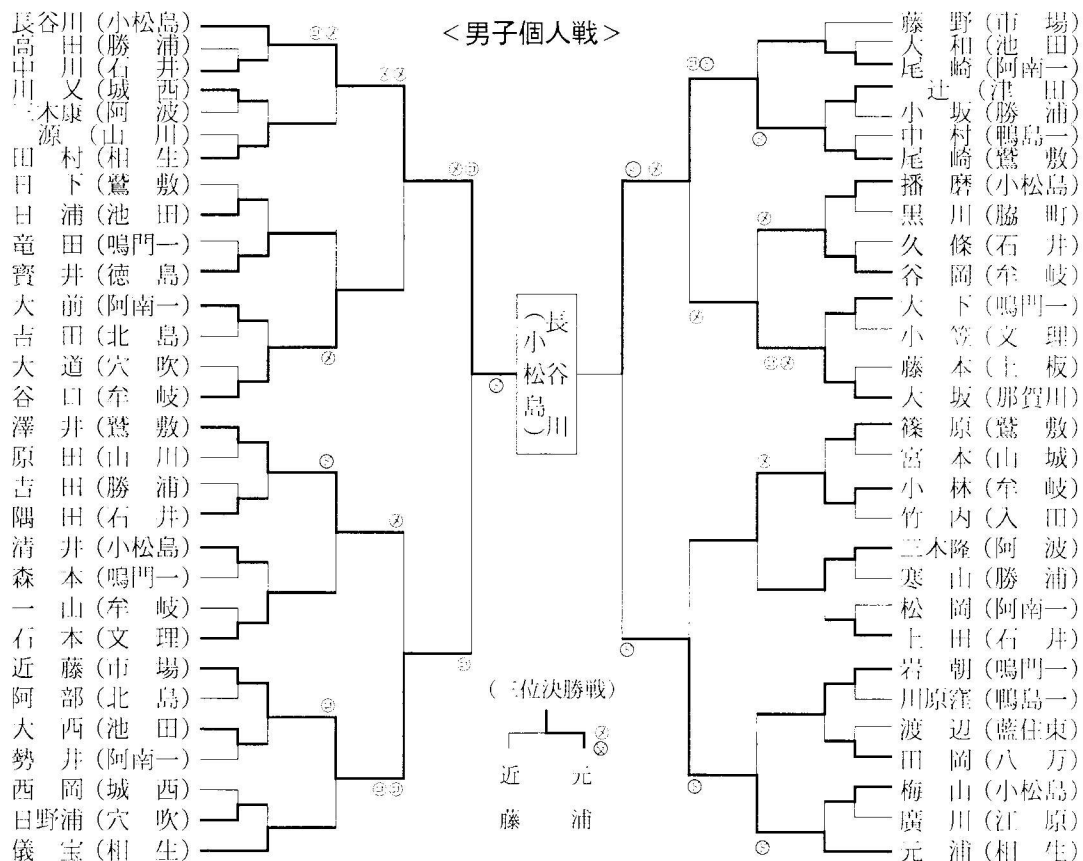
<決勝戦>

学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
阿南第一中	大前	松岡	勢井	横坂	尾崎	4(7)
	⊙	⊖	⊙	⊙ ⊙	⊙ ⊖	
相生中	儀宝	元浦	前田	田村	藤川	1(3)
			⊙ ⊙	⊙		

<女子個人戦>



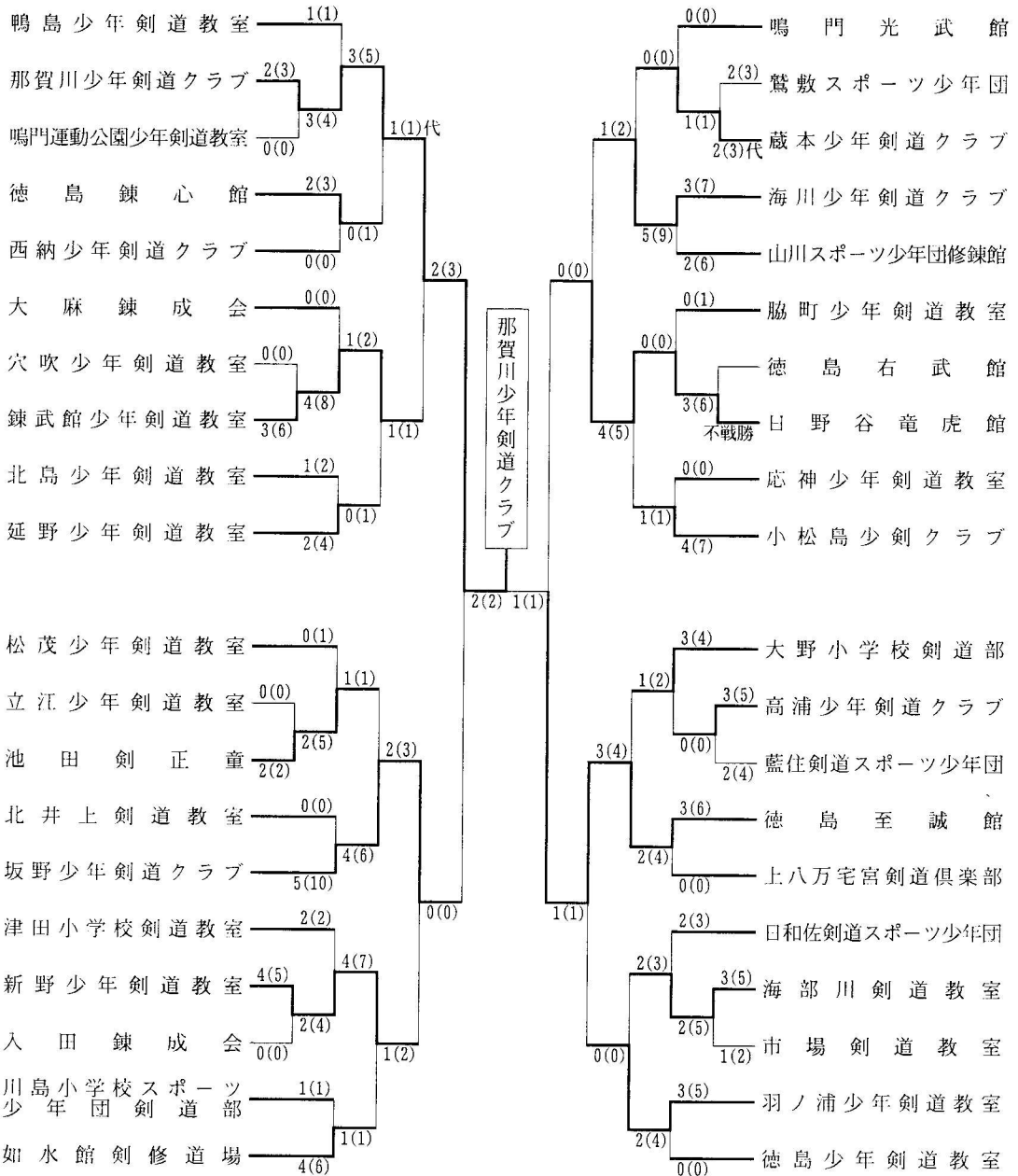
<男子個人戦>



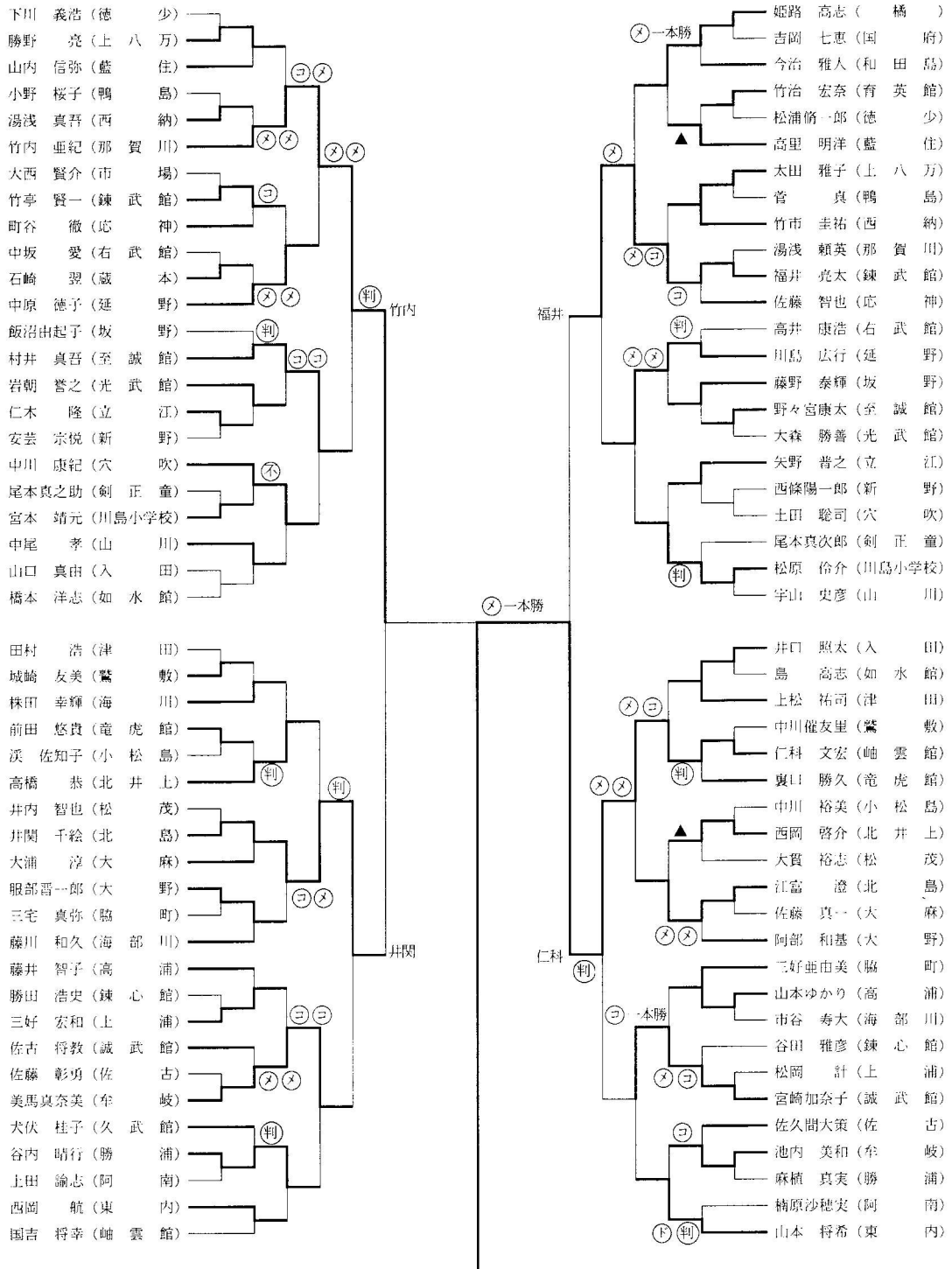
第26回徳島県少年剣道錬成大会

平成7年7月30日
鳴門武道館

<団体戦>



< 個人戦 >



谷本 彬 (橘)

富永由香里 (国府)

河野 里佳 (和田島)

下村 裕史 (春英館)

三原 潤子 (徳少)

堀口 勇介 (藍住)

田中 健太 (上八万)

桜木 信也 (鴨島)

住友 勇介 (那賀川)

立田 敏広 (錬武館)

佐藤 旭 (応神)

竹内 崇人 (石武館)

原 福海 (延野)

村瀬 賢晃 (坂野)

上田 優 (至誠館)

野崎 修一 (光武館)

浜 崇 (立江)

南部 康介 (新野)

黒田 裕介 (穴吹)

清家 義弘 (剣正童)

新居 祐輔 (川島小学校)

長浜 孝夫 (山川)

近藤 真也 (入田)

小西 美徳 (如水館)

稲井公二郎 (津田)

大西 山朗 (鷲敷)

西 健悟 (海川)

曾根 寛文 (竜虎館)

近松 亮平 (小松島)

政岡 真吾 (北井上)

夷谷由美子 (北島)

西岡 瞬 (大麻)

清水 由紀 (上浦)

四宮 崇作 (誠武館)

佐久間健太 (佐古)

和田 朋之 (牟岐)

山下久美子 (勝浦)

久賀 千夏 (阿南)

賀好 春奈 (東内)

岡山 直樹 (橘)

黒崎佳世子 (国府)

杉本麻由美 (春英館)

紅露 瑛子 (大野)

東條 和也 (海部川)

武市 和之 (高浦)

山田 桂子 (徳少)

仁科 文宏 (岫雲館)

安部 善郎 (上八万)

橋本 佳奈 (那賀川)

延 祥伍 (錬武館)

藤田啓一郎 (石武館)

佐川 滸平 (坂野)

堀部 健次 (藍住)

川口 美香 (至誠館)

矢野 徳和 (立江)

前野 賢策 (新野)

住友 恭輔 (穴吹)

松浦 豊 (剣正童)

板東 悟 (入田)

篠原 健太 (津田)

藤井 慎弥 (鷲敷)

前川 慶太 (竜虎館)

杉本 達哉 (小松島)

舟越 裕一 (北島)

京小瑛里子 (大野)

谷崎 真代 (海部川)

切中 論 (高浦)

岡本 直樹 (土浦)

露口 圭太 (誠武館)

中村美也子 (勝浦)

河内 洋介 (東内)

田村万里子 (国府)

宮武裕一郎 (徳少)

長田亜希美 (上八万)

坪井 香奈 (那賀川)

三好やよい (藍住)

茂崎江里子 (錬武館)

山上 功裕 (石武館)

村田 実香 (至誠館)

齊藤 健太 (立江)

馬原菜々子 (新野)

大石公美子 (穴吹)

森 光司 (入田)

酒池 威至 (津田)

加藤 ゆか (鷲敷)

藤川 真紀 (竜虎館)

杉本 順哉 (小松島)

中山 大輔 (島)

武田 元樹 (大野)

森岡小百合 (誠武館)

森島 葉希 (勝浦)

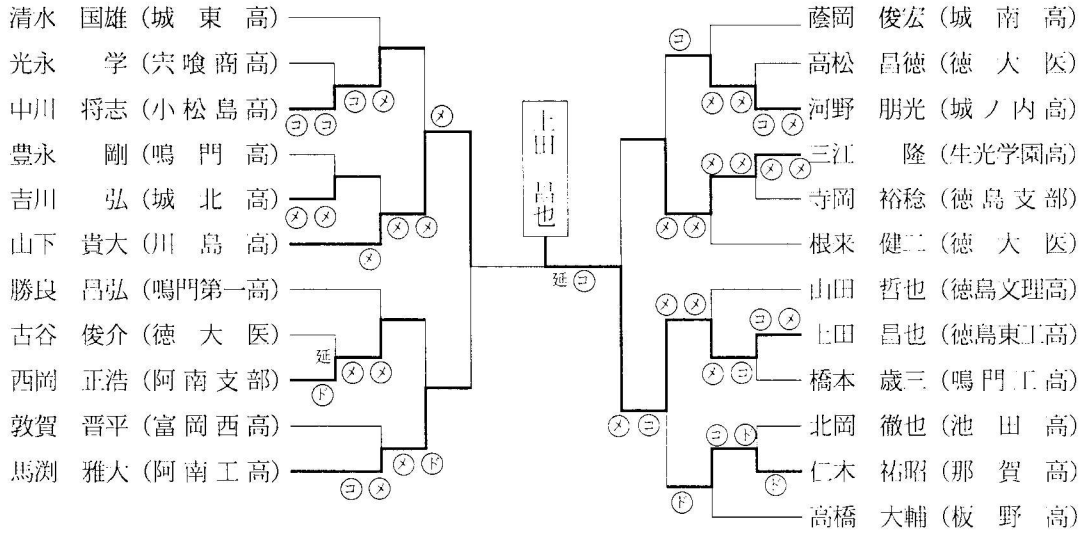
仁科 由希 (岫雲館)

中村 晃大 (国府)

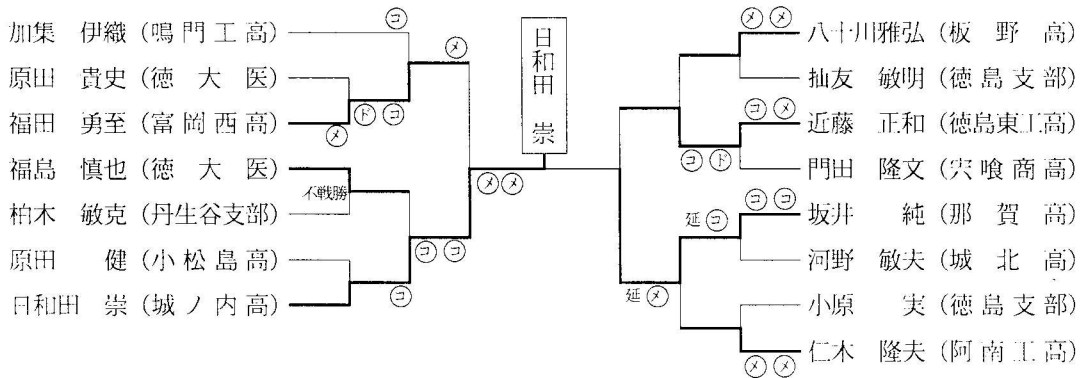
第19回徳島県剣道段別選手権大会

平成7年8月27日
鳴門武道館

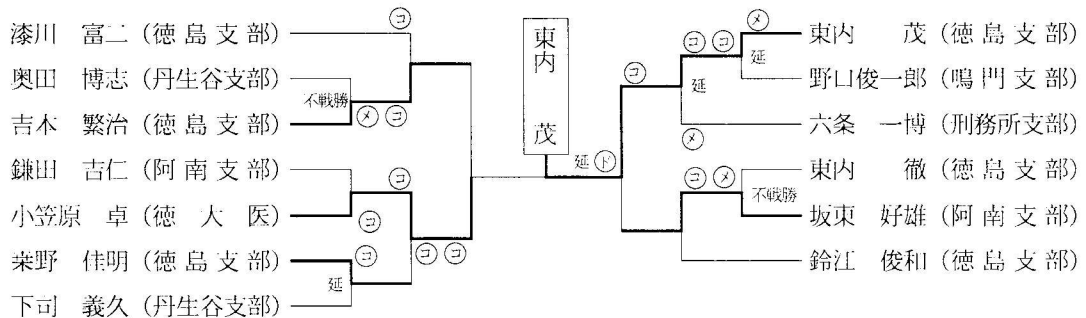
<男子の部> (初段の部)



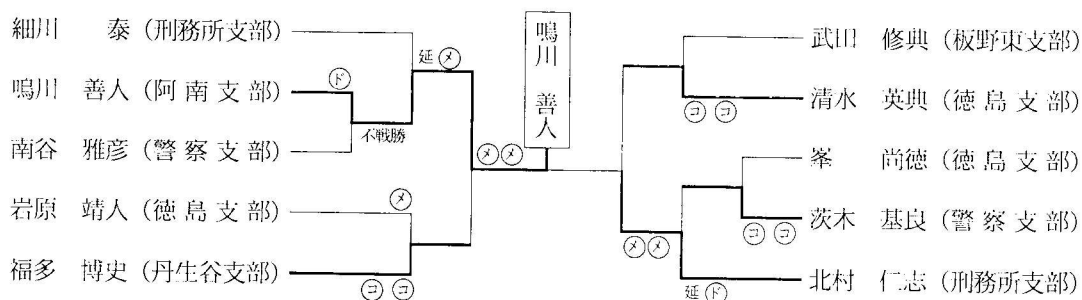
(2段の部)



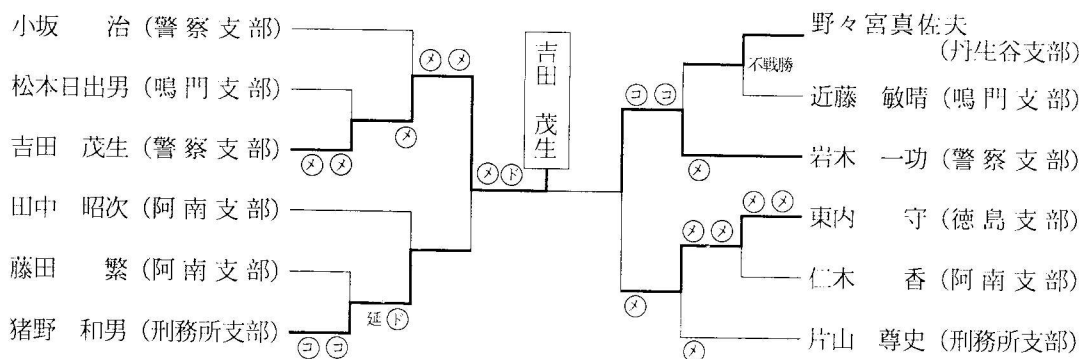
(3段の部)



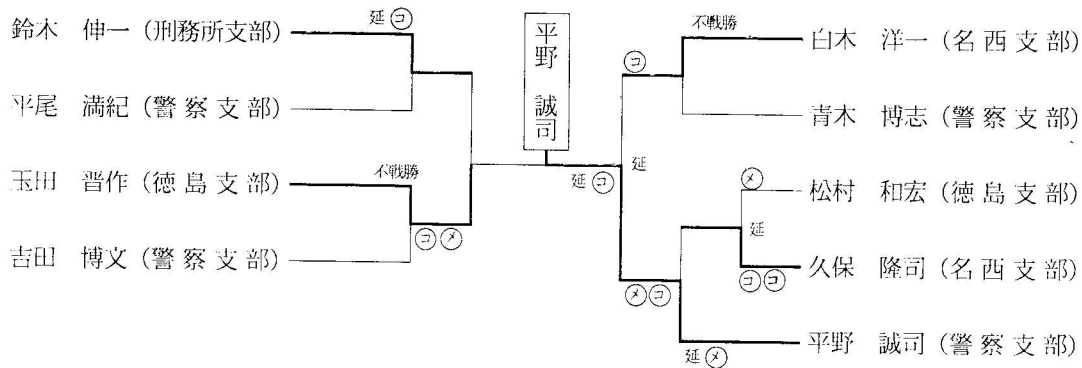
(4 段 の 部)



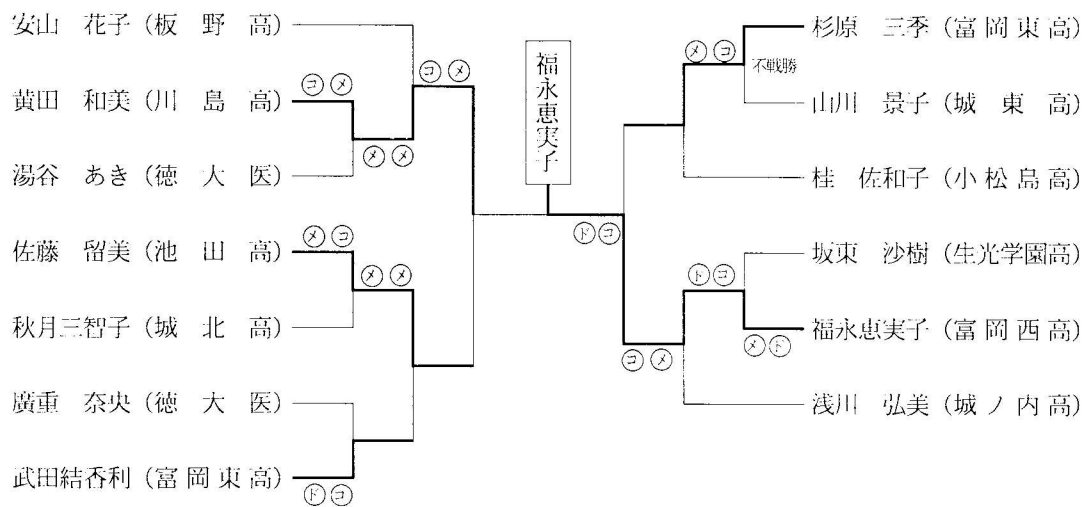
(5 段 の 部)



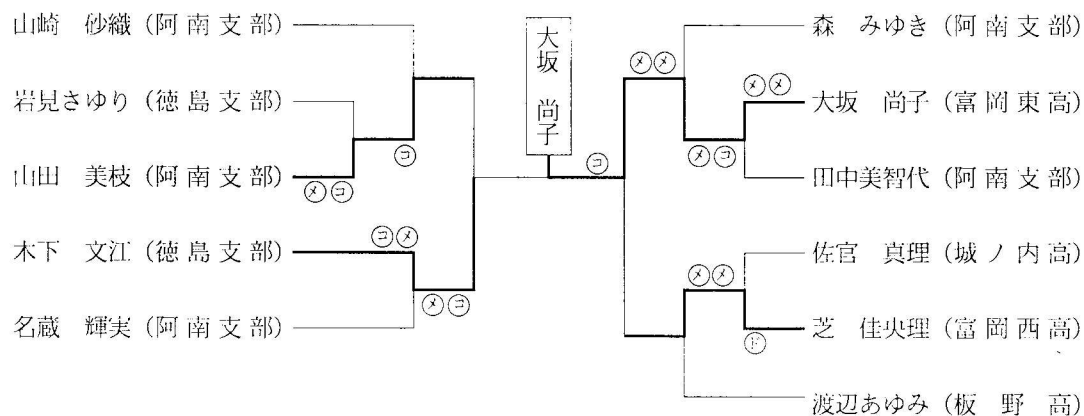
(6 段 の 部)



<女子の部>
(初段の部)



(2段以上の部)



第24回徳島県社会人剣道大会

平成7年10月1日
鳴門武道館

<予選リーグ>

A

	阿南	小松島	徳島	美馬東	勝者数	勝本数	順位
	A	A	A	A	数	数	位
阿南支部 A	△ ⁸ / ₃	△ ² / ₂	△ ⁴ / ₄	2	11	19	1
小松島航空隊	△ ⁰ / ₀	△ ⁵ / ₂	△ ² / ₂	1	4	11	4
徳島支部 A	△ ³ / ₃	△ ¹ / ₁	△ ⁴ / ₂	2	6	13	2
美馬東支部 A	△ ¹ / ₁	△ ³ / ₃	△ ¹ / ₁	1	5	10	3

B

	阿波	錬心	丹生	小松島	勝者数	勝本数	順位
	B	館	谷	A	数	数	位
阿波支部 B	△ ³ / ₃	△ ¹⁰ / ₃	△ ⁹ / ₃	3	13	25	1
徳島錬心館	△ ³ / ₃	△ ⁷ / ₃	△ ⁵ / ₃	2	6	13	2
丹生谷支部	△ ⁵ / ₅	△ ² / ₂	△ ⁰ / ₀	0	2	8	4
小松島支部 A	△ ¹ / ₁	△ ² / ₂	△ ⁵ / ₅	1	7	14	3

C

	阿南	板野西	石武	勝者数	勝本数	順位
	C	B	館	数	数	位
阿南支部 C	△ ⁷ / ₃	△ ⁷ / ₃	2	6	14	1
板野西支部 B	△ ¹ / ₁	△ ⁵ / ₃	1	4	7	2
石武館	△ ¹ / ₁	△ ¹ / ₁	0	2	6	3

D

	刑務	鳴門	加茂名	勝者数	勝本数	順位
	所	B	B	数	数	位
徳島刑務所支部	△ ⁹ / ₅	△ ² / ₄	2	9	16	1
鳴門支部 B	△ ⁰ / ₀	△ ⁵ / ₂	0	2	3	3
加刺道教室名	△ ⁶ / ₆	△ ⁶ / ₃	1	3	6	2

E

	阿南	徳大	板野東	勝者数	勝本数	順位
	新野	医学	B	数	数	位
阿南支部新野	△ ¹ / ₁	△ ⁹ / ₄	1	5	10	2
徳大医学部 OB	△ ² / ₂	△ ⁵ / ₂	2	4	8	1
板野東支部 B	△ ¹ / ₁	△ ¹ / ₁	0	2	6	3

F

	至誠	海部	美馬西	阿波	勝者数	勝本数	順位
	館	部	A	A	数	数	位
徳島至誠館	△ ⁰ / ₃	△ ⁹ / ₅	△ ³ / ₂	3	10	18	1
海部支部	△ ⁴ / ₄	△ ⁷ / ₃	△ ¹ / ₁	1	5	9	3
美馬西支部	△ ¹ / ₁	△ ¹ / ₁	△ ⁰ / ₁	0	1	3	4
阿波支部 A	△ ⁸ / ₈	△ ⁸ / ₁₆	2	7	13	2	

G

	阿南	名西	鳴門	小松島	勝者数	勝本数	順位
	大野	部	A	B	数	数	位
阿南支部大野	△ ¹ / ₁	△ ¹ / ₁	△ ⁶ / ₁	1	8	11	2
名西支部	△ ³ / ₃	△ ⁶ / ₃	△ ³ / ₂	3	8	16	1
鳴門支部 A	△ ³ / ₂	△ ¹ / ₁	△ ¹ / ₁	1	4	10	4
小松島支部 B	△ ¹ / ₁	△ ¹ / ₂	△ ⁶ / ₂	1	5	12	3

H

	岫雲	振武	美馬東	勝者数	勝本数	順位
	館	館	B	数	数	位
岫雲館	△ ⁶ / ₃	△ ⁶ / ₁	2	7	12	1
振武館	△ ² / ₂	△ ⁹ / ₃	1	5	8	2
美馬東支部 B	△ ² / ₁	△ ⁰ / ₀	0	1	2	3

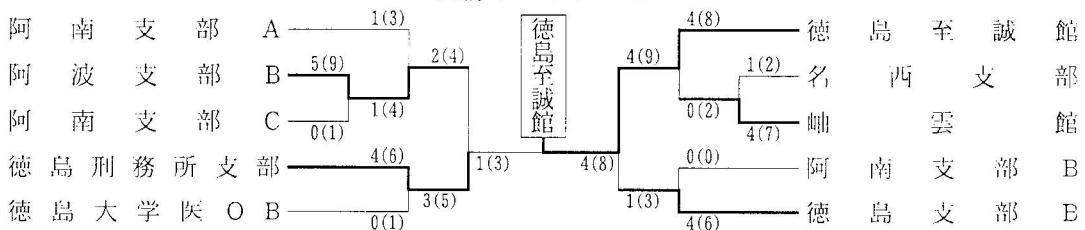
I

	阿南	加茂名	板野西	勝者数	勝本数	順位
	B	A	A	数	数	位
阿南支部 B	△ ⁸ / ₄	△ ⁴ / ₂	2	6	12	1
加刺道教室名	△ ¹ / ₀	△ ¹ / ₁	0	0	1	3
板野西支部 A	△ ¹ / ₂	△ ⁴ / ₂	1	4	7	2

J

	阿南	板野東	徳島	勝者数	勝本数	順位
	桑野	A	B	数	数	位
阿南支部桑野	△ ⁴ / ₃	△ ¹ / ₁	1	4	7	2
板野東支部 A	△ ¹ / ₁	△ ⁰ / ₀	0	1	5	3
徳島支部 B	△ ¹ / ₄	△ ¹⁰ / ₆	2	9	17	1

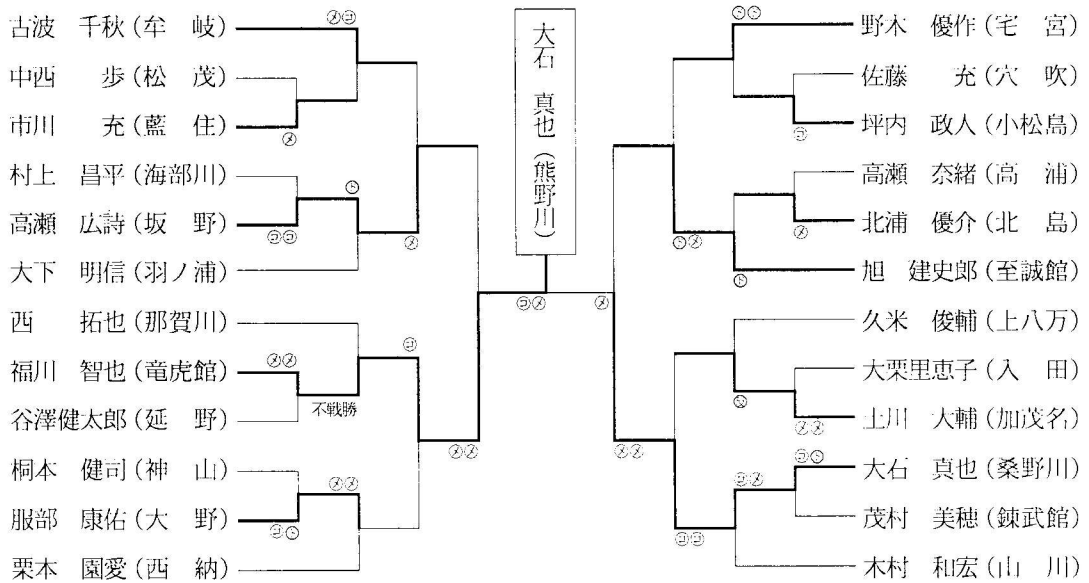
<決勝トーナメント>



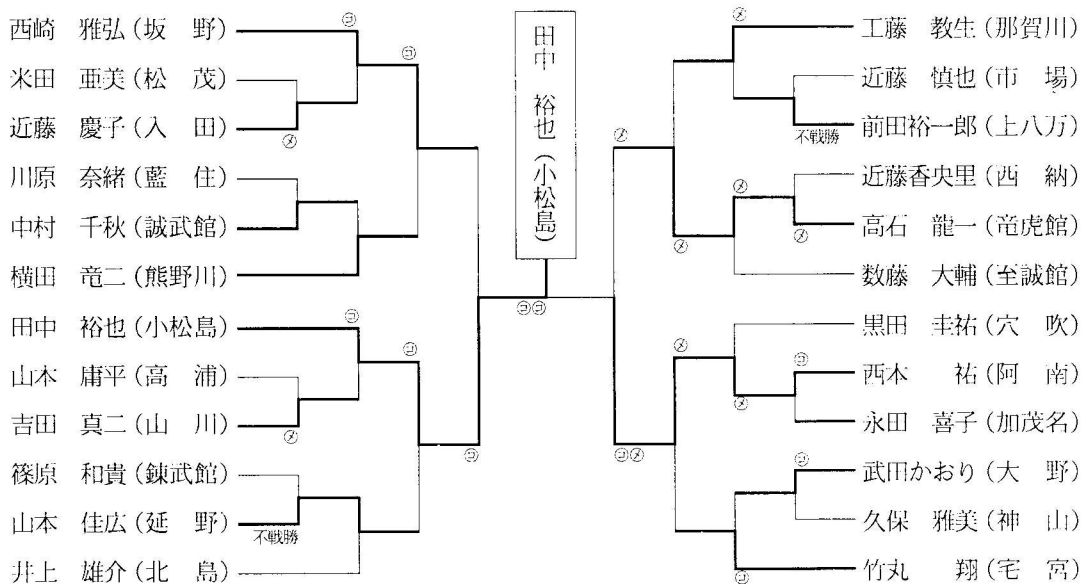
第13回徳島県スポーツ少年団剣道大会
第18回全国スポーツ少年団剣道交流大会県予選

平成7年12月10日
鳴門武道館

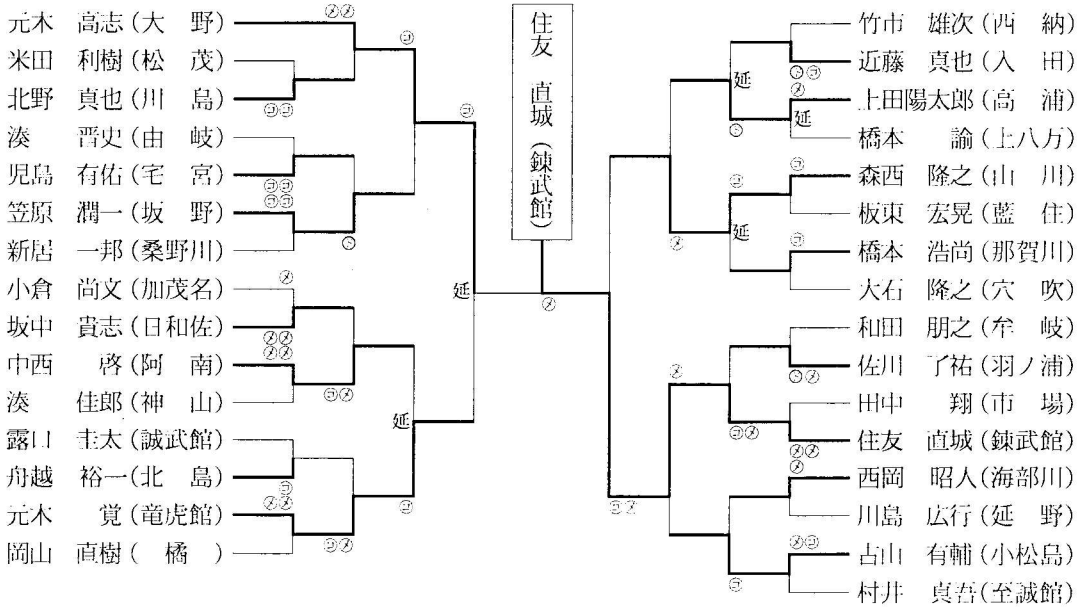
4 年 生 (A)



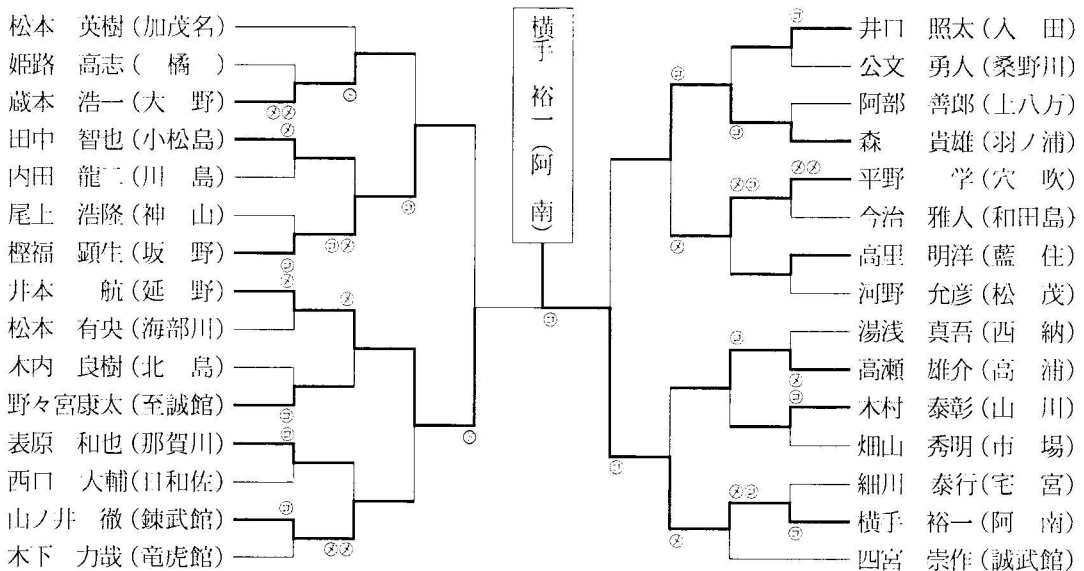
4 年 生 (B)



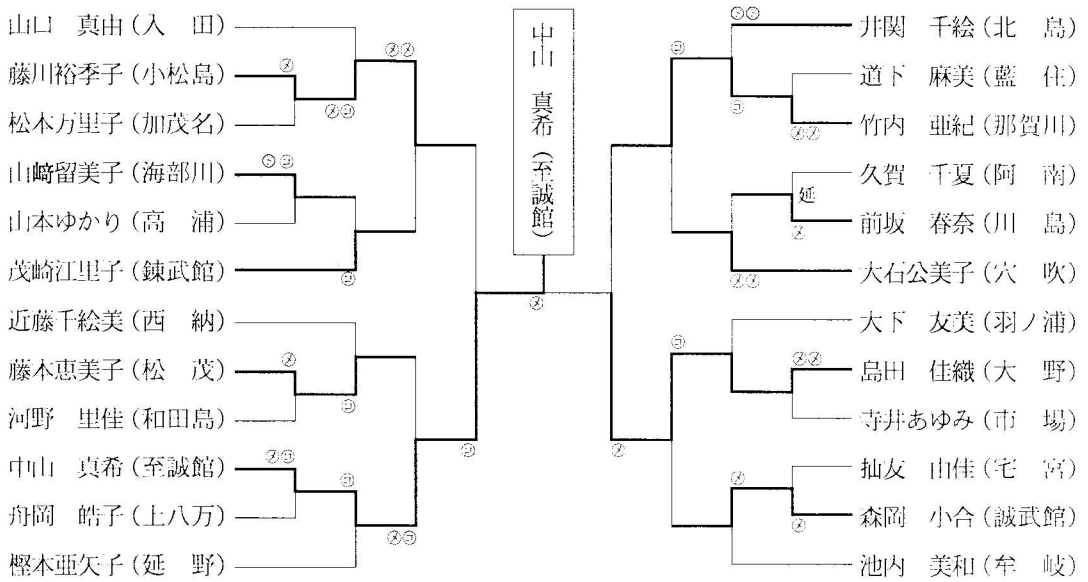
5・6年生男(A)



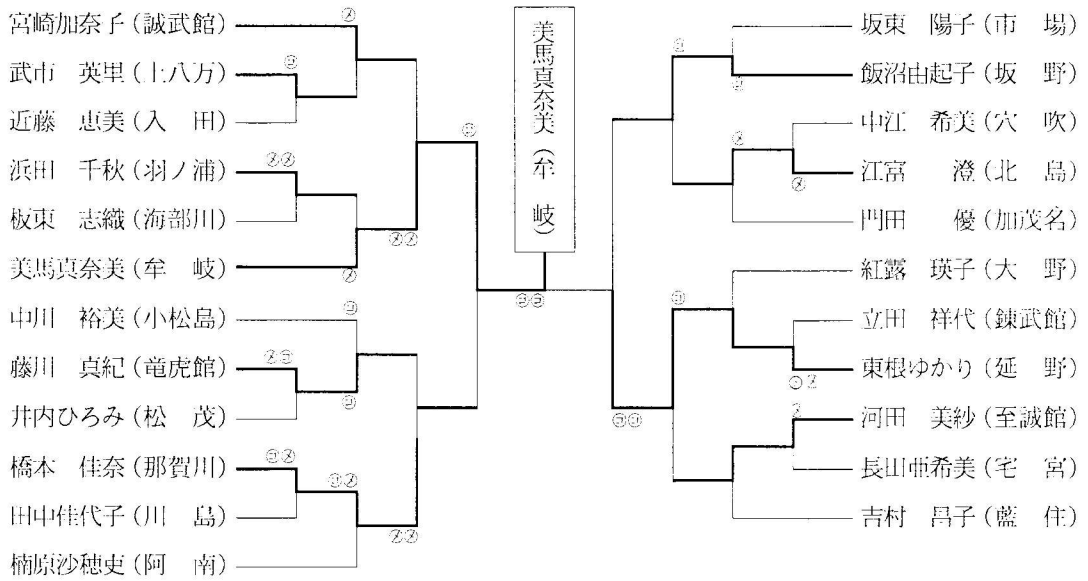
5・6年生男(B)



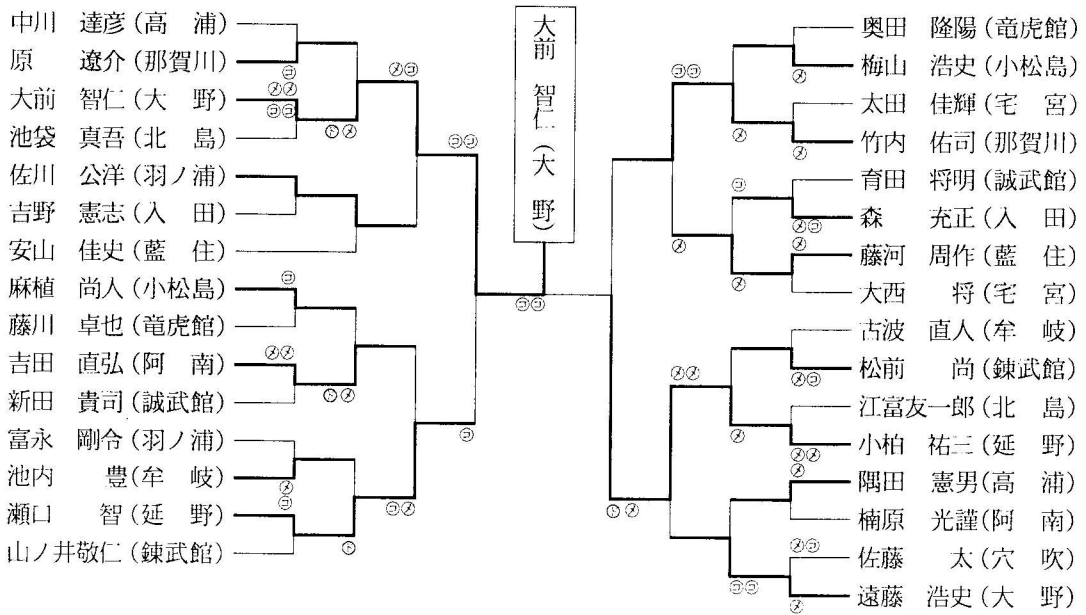
5・6年生女(A)



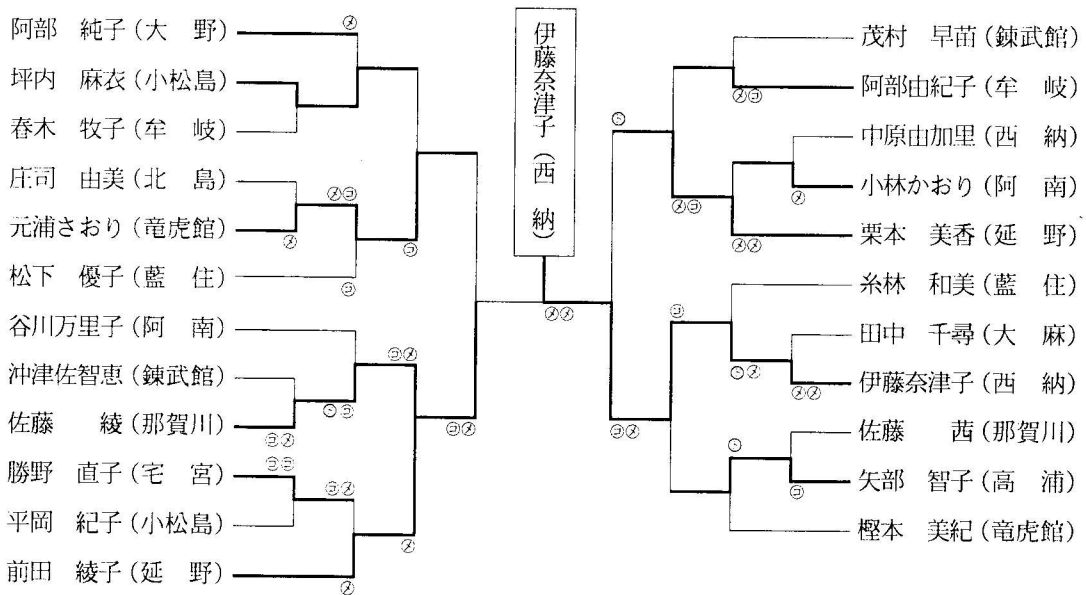
5・6年生女(B)



中 学 生 (男)



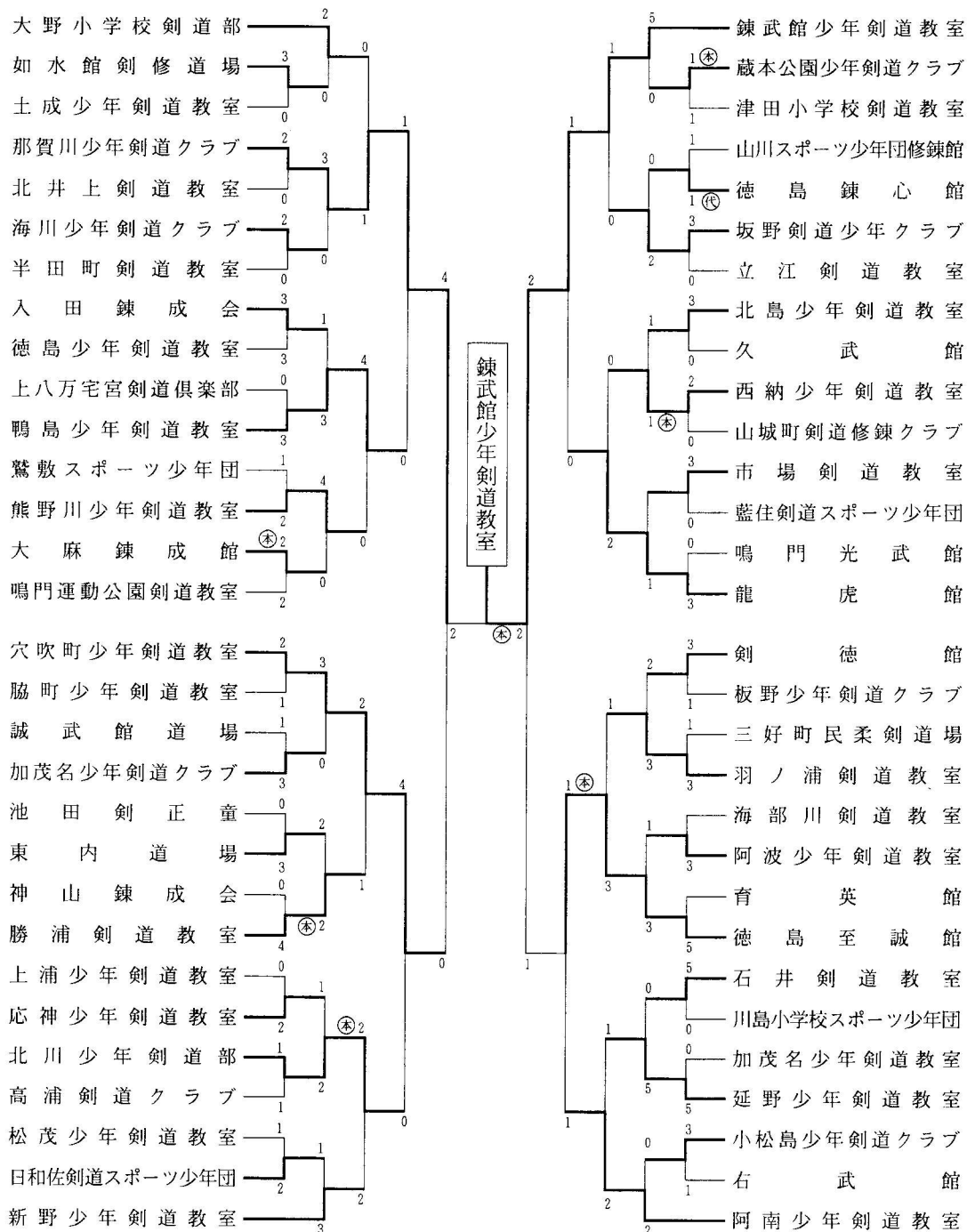
中 学 生 (女)



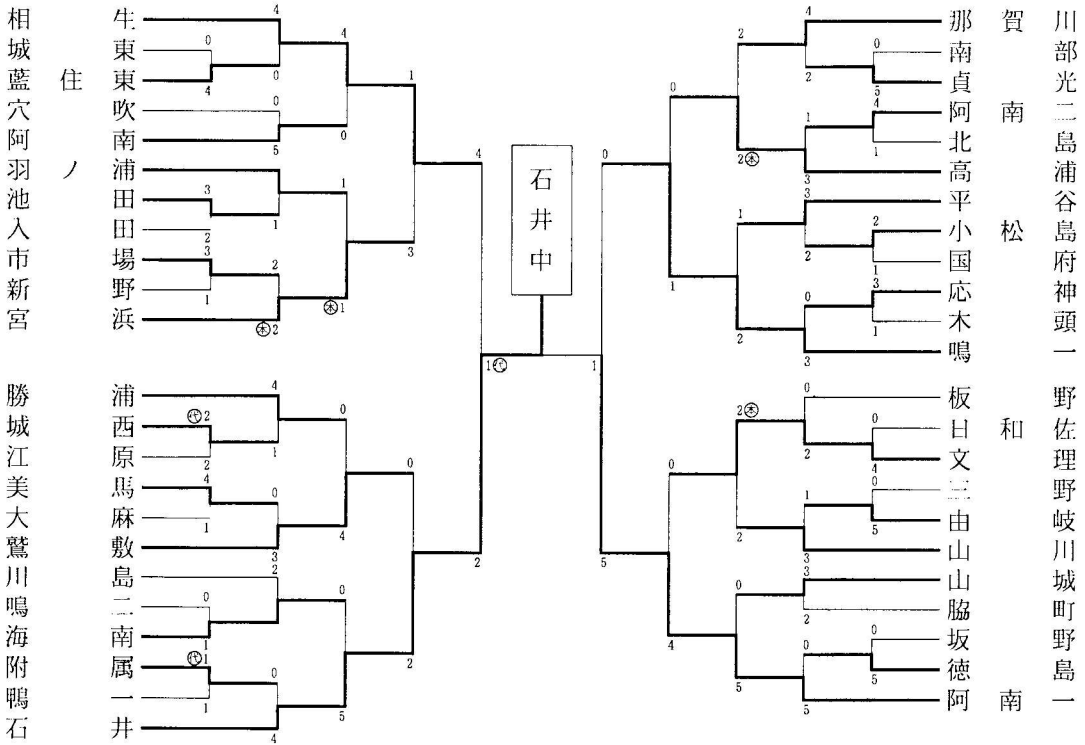
第6回徳島県小・中学校剣道強化錬成大会

平成8年1月21日
鳴門県民体育館

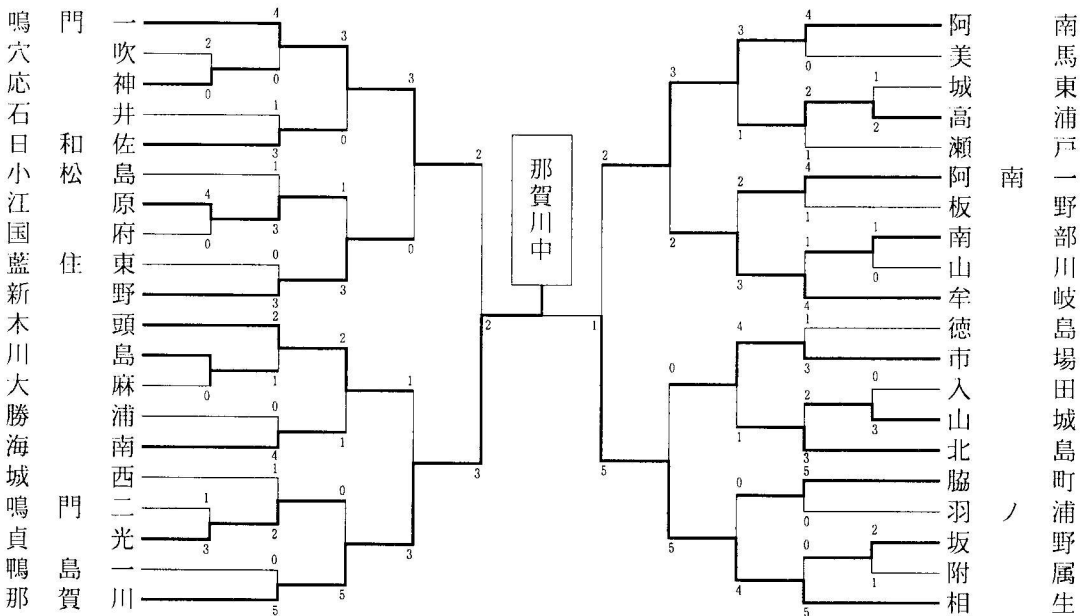
< 小学生 >



< 中学校男子 >



< 中学校女子 >



徳島県剣道連盟事務分掌表 (平成八年四月一日現在)



編集後記

今回の『徳島の剣道』には県内外の先生方より、玉稿をお寄せいただき、編集委員としてうれしく作業をさせていただきました。お陰様で、写真・資料等をたくさん盛り込み、活字も大きく読みやすく、しかも、内容の充実したようなものができたと自負しております。

しかし、本誌の「昇段審査合格秘話」で白木さんが堀江先生の言葉を紹介されているように「……剣道において『これでよい』ということはありません。常に『何か足りない』と研究し、その何かを求めていく気持ちが大切です。……」の剣道を編集作業と置き換えても同様のことが言えるように思えるのです。先程、できばえを自負していると書きましたが、実は時間に追われ、確認不十分のところや誤植があるのではないかとの不安がつきまっています。まさに、昇段審査に臨む受験生の心境です。もちろん、可否をつける審査員は、『徳島の剣道』の読者のみなさんです。

皆様に愛され、親しまれる「徳島の剣道」になっていきたいと編集委員一同祈念しております。今後とも、よろしくご指導・ご鞭撻の程お願い致します。また、次号に向けて、皆様よりの剣道・居合道に関わる情報や日頃のお考えを剣道連盟事務局まで連絡・投稿していただければ幸いです。

『徳島の剣道』第十二号

編集委員会

柏原浩	山田仁	寺西慶裕	大川功	土川資雄	木原資裕
-----	-----	------	-----	------	------

『徳島の剣道』第12号

平成8年6月15日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 堀江幸夫

〒772 徳島市中徳島町2丁目96

TEL FAX 0886-52-2337

印刷 グランド印刷株式会社

徳島市方代町6丁目20-15

TEL 0886-22-8448 FAX 22-8418